



都市生態と文化創造

阿倍野から広域的ネットワークを構築する
Urban Ecology and Cultural Creativity
Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka

(編集)
Edited by
岡野 浩
Hiroshi OKANO



都市生態と文化創造

阿倍野から広域的ネットワークを構築する

Urban Ecology and Cultural Creativity
Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka

(編集)

Edited by

岡野 浩

Hiroshi OKANO

大阪市立大学 都市研究プラザ

Urban Research Plaza, Osaka City University

目次 Contents

Part 1 : 世界に向けて阿倍野から広域的ネットワークを構築する

Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka

はじめに

招待論文 :

過去からやってきたメタセコイアが未来のための音楽を提供する

D. W. Larson

(Summary in Japanese)

(ヒト・モノと創造性)

第1章 大阪におけるメタセコイアの景色

小南 哲雄

第2章 昭和に生きた「化石」: 昭和中学のメタセコイア

杉村 浩司

第3章 人も、街も、つながってひろがって

濱崎 憲子

第4章 なにはの葦 淀川のヨシ

小山 弘道

(知と創造性)

第5章 阿倍野区松虫通の今昔

吉村 弘

第6章 三木楽器・アポロ店

田中 晴美

(場・みちと創造性)

第7章 懐かしい築港: 「ビーハイブ」の記憶

江見 裕子

第8章 父母に聞く戦争体験: 美章園と爆弾

本田 浩二

第9章 大阪の近代化と中華料理の創造性: 明洋軒を通じた地域の結びつき

松浦 一郎/岡野 浩

(集い・交流と創造性)

第10章 信太の森の自然と信太の森ふるさと館

田丸 八郎

第11章 タンゴと喫茶文化: 西田辺のチ・ケの断章

中西 顕子

第12章 都市間のネットワークと創造性: 復元力の源泉とはなにか

岡野 浩

第13章 メタセコイアが織りなす文化創造

岡野 浩

Invited Paper: Metasequoia from the past offers music to the future

D. W. Larson

(Full Paper)

Part 2 : 2017年大阪市立大学国際学術シンポジウム「人と植物の共生」

Osaka City University International Conference 2017

Symbiosis of People and Plants for the Future of the City

「植物と文化創造性: 都市生態学への道」

Hans Thomsen Ma Yuming Pan Shanhai Li Geng 武田雅史 塩崎雅亮 杉田健司 佐野博士

有山麻衣子 谷 和 藤原ヒロユキ 岡野 浩

筆者紹介 Contributors

Part 1

世界に向けて阿倍野から広域的ネットワークを構築する

Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka

本書は、都市における生態系、すなわち、ある一定の地域で生息するすべての生物と、その無機的環境を含めた総合的システムを対象としながら、都市生態 (urban ecology) と文化創造性の相互関係について考察することを旨とするものである。

都市の創造性は、その都市に住んできたあるいは現在住んでいる人々だけで維持できるものではない。都市を訪れ、関わり、当該都市のことを他の都市に伝えた人々などとともに、何にもまして自然の役割が重要である。

とりわけ、ここでは大阪・阿倍野にスポットライトを当て、「市民知」による創造的な空間づくりの類型を示し、文化的な地域間の交流の在り様を示すことを意図するものである。すなわち、都市における様々な「アクター」(行為する者・物) を文化や自然、生態系に置き、それらのネットワークのあり方が、いかにして「市民知¹」を創造する「場」として重要な役割を果たすことに繋がるのか、また「市民知」を生み出すメカニズムやそれを促進するための政策やサポートのあり方、(海外を含めた) 他の地域との連携 (ネットワーク) の在り様、などについて考えたい。

すなわち、都市の創造性、とりわけ文化の創造性と持続性に関連するものとして個々人の「記憶」を取り上げ、その記憶を呼び覚ませるものとしてヒトが歩んできた、多様な「道」(海の道、川、街道、そして精神的「道」) を遡上にあげたい。ヒトとモノ、コトとを結び付け、「記憶」を蓄積したり除去したり埋めたりする「複合物」として (海の道、空の道とともに) 「文化の道」として位置づけ、重要な「アクター」と捉えたい。

本書の内容については、阿倍野の方々にこれまで見聞きした「実践」、そしてこうした過去の「実践」やそれを見聞きした「記憶」、自らが行ってきた「実践」を述べていただき、様々なヒトやモノ、コトに関するテキストを「ヒト・モノ」、「知」「場・みち」「集り・交流」の4つのカテゴリーを総合的に論じていきたい。

また、阿倍野の創造性についての理論的・歴史的考察を行い、文頭で述べた UNESCO 創造都市ネットワークの7つのカテゴリーを統合する新たな枠組みの可能性を示し²、都市の創造性の源泉は、こうした市民の方々の日々の活動とそれを集約し、発信するための「世界の人々に開かれた」オープンスペースと様々な「道」を理解する能力であることを主張する。また、そうした有形・無形の文化財を維持し、発展させ、ヒトやモノを総体として尊重する感性が重要であり、文化を社会が編集することに対する認識が求められる。

では、阿倍野と他の都市や地域との関係性の中に、自然の役割を見ていくこととしよう。

¹ ここでいう「市民知」とは「市民による実践知」として捉え、「市民が持っている実践・理論の相互浸透から長い年月をかけて形成された知」と定義づける。

² 大阪市立大学・都市研究プラザが主導して2012年に設立した都市創造性学会 (AUC) (設立総会: パリ政治学院) の第2回大会(2013年5月31日および6月1日: ロンドン大学)において、UNESCO 副事務局長補のフランチェスコ・バンダリン氏 (Francesco Bandarin) は、UNESCO 創造都市ネットワークの7つのカテゴリーである「文学」・「映画」・「音楽」・「工芸」・「デザイン」・「メディアアート」・「食」の分類について触れ、現在見直しの議論を行っていることを紹介するとともに、先進国と開発途上国の都市間でさらなる交流が必要であること、さらに「都市の創造性」と「世界遺産」との密接な関連性を獲得すべきことを強調した。

過去からやってきたメタセコイアが未来のための音楽を提供する

Metasequoia from the past offers music to the future

ダグラス・ラーソン

D. W. Larson

カナダ・グエルフ大学 (生物学)

要約

世界各地の古い森林はかつて楽器を含む多種多様な文化目的のための木材源であった。ギターは、弦楽器の中でも世界で最も普及した形態のままであるが、優れたギター用表板 (トップ) の供給は減少しており、次の世紀には枯渇してしまうと予測されている。メタセコイア (Dawn redwood) は 1 億年前には地球上で最も豊富な樹木であったが、2000 万年前にその範囲は縮小され、1940 年代初頭までは化石でしか知られていなかった。1944 年に中国で生きたメタセコイアが再発見され、1947 年に世界中に広がり、温帯地域を中心に世界中の大規模な植林につながった。現在そして将来、メタセコイアがギターに使用できるかを調査するため、切り取った。四分挽きのブックマッチの板が 3 つの楽器の製作に用いられた。また 2 つのギターが同時期に作られたが、そこでは長く生育されたベイスギとスプルースが使用された。乾燥後の木材の機械的性質を決定するために簡単な実験を行った。また、ギターではさまざまなプレーシングのパターンを使用し、木材の安定性と音色が、通常、楽器のトップに使用される長く生育されたスプルース、ベイスギ、およびセコイアの代替物として適しているかどうか判断された。この実験から、メタセコイアはギター用トップ板 (表板) のための良好なものであること、また将来多くの表板を生産できることが分かった。

進化の歴史、元の世界分布、絶滅危機

Dawkins (1982) は、人類の成功にとって生物学的な進化の重要度が低下しているにもかかわらず、新しいアイデアが古いアイデアを駆逐するにつれて、文化的進化が加速し続けていると主張する。

本論文はこうした文化的進化の側面を扱っており、かつて豊かで古くからある古生代の木々が絶滅に追い込まれた場合、ギターなどの弦楽器をどのように作り上げればよいかを述べたい。具体的にいえば「メタセコイアは、現在および将来のギター製作者が使用できるか」

という問いである。

被子植物は、過去 7000 万年ほどの間、私たちの惑星の生物多様性を支配してきた。これに先立ち、裸子植物植物は地球上のすべての陸生植生を代表するものであった。約 2 億 5 千万年前から、この惑星は針葉樹の急速な拡大を経験し、1 億年前のジュラ紀ではすべての陸上の表面が覆われていた。メタセコイアはその時期に現れたのである (Hewes 1981)。その最盛期である 4 千 5 百万年前に、現在ではカナダの高北極 (Jahren 2007) で密度の高い森林を形成していた。ちなみに、これらの森林のいくつかは氷に覆われていないため、ログ、切り株、枝、葉、種子を含むこの森林からの粗い切片は、アクセル・ハイベルグ島の地層に引き込まれ、表面に見えている (Basinger (1991))。

しかし、約 2000 万年前の中新世では、地球温暖化に伴ってメタセコイアはほぼ全域で消滅し、化石でしか知られておらず、1944 年に再発見されるまでは絶滅したと考えられていた。

人間による原生自然の喪失を嘆いている人は、再発見の意義を見過ごしている。人新世に入って人間が地球の陸上の表面の 83% 以上を占めたことは確かだが (Sanderson et al 2002)、地球の残りの野生生物は人類にとって大きな価値の生物や生態系の便益 (サービス) を提供する (Balmford et al 2002)。王と胡は 1944 年に紅藻類の生存を再発見した (Hu and Wang 1948, Hu 1948, Chaney 1948, Merrill 1948)。その後、1947 年に始まった世界的な種の再配分は、原生自然の小さな区切りが人間の文化に大きな価値を与えうるというよい例であるといえる。

再発見

もちろん、メタセコイア自体は、1941 年に日本の古生物学者三木茂が赤い木の 2000 万年前の化石を再調査するまで命名されることはなかった (Miki 1941)。皮肉なことに、四川省で地元の林業員 Tsang

Wang によって見出されたがメタセコイアであるとはすぐに特定できなかつた。標本は Cheng (鄭) 教授に送付された。最初に標本を彼の同僚の H.H. Hu (胡) に送った。彼はその後、カリフォルニア大学バークレー校の友人であった古生物学者 Ralph Chaney にサンプルを送った。

ほぼ同じ時期に、鄭氏はサンプルをハーバード大学の E.D. Merrill に送った。Chaney (1948) において、その地を訪れた後、生きているメタセコイアの存在が確認された。当時、化石種の再発見は、世紀の偉大な科学的事象の 1 つと考えられていた。その後まもなく、種子の大量収集と世界的広がりが見込まれた。1948 年から北半球と南半球の温帯地域に植えられていった。そのとき植えられた樹木は現在は直径 2~3m、高さ 35m に成長している。この種の再発見への関心は非常に強かった。中国では、王、鄭、そして胡が、誰が最初の発見をしたのかという点について、ほぼ間違いなく争いが起こった。Chaney は Merrill の支援を得て中国に行った。生きた化石であるメタセコイアの存在を示した両者に、均等な貢献を割り当てるべきであろう。

アクセル・ハイバーク島と『ストーリー・テラー・ギター』

崖の生態系と古代の森林の生態学に没頭した私の学問的な生活 (Larson 他 2000, Kelly and Larson 2008) の間、私は科学教育とギター製作にも積極的に取り組んできた。私の目標は、Jacob Bronowski (1973) が提唱したように、学生にアートと科学の融合を理解してもらうために楽器を使用することだった (Larson 2011)。2006 年には、これらの人工物で構成された 1 つの楽器を作成するため、科学的データを収集し始めた。結果として得られた『ストーリー・テラー・ギター』(Larson 2011) は 6 大陸から集めたもの、35 の企業、および 68 人の人工物を含む 3,562 の別個の部分で構成されていた。1988 年にナイアガラの崖の古代の森林を発見した (Kelly and Larson 2008)。古代の森林の研究者が私を探し出すことがよくある。そのうちの 1 人が Axel Heiberg 島の 4500 万年前のメタセコイアの化石に取り組んでいた Canadian Parks Service の Ian MacNeil であった。あるとき、MacNeil は『ストーリー・テラー・ギター』のプロジェクトで使用された場所にあった圧縮木材のサンプルを提供してくれて、このローズウッドによく似た木を装飾品のロゼットに含めることにした。それをこの地に栽培された同種の新しく切った木材と組み合わせたのである。

オンタリオ州南部で収穫された巨大メタセコイア

『ストーリー・テラー・ギター』の本が出版された後、科学と芸術のあらゆる面に関心が集まった。Andrew Poynter は、オンタリオ

州ケンブリッジにある会社 (A & M Wood Specialty) のオーナーで、オンタリオ州のバリの土地所有者から購入した木の価値のある部分を特定するよう依頼した。樹木の高さは約 60 フィートで、直径は 1 m を超えていた。カナダのオンタリオ州南部で種子の分布の歴史の初期に明らかに植え付けられたメタセコイアの標本として、私は彼のために木を特定した。木が乾いてからログに最高の 4 部挽きがほしいと Andrew に要求した。私はこの木を使ってギターを作りたいと説明した。なぜなら私が知る限りでは、誰もメタセコイアをギター用表板 (トップ) として使用しようと試みたことはなかったからである。この理由はおそらく、幹を十分に大きなサイズに成長させるのに必要な時間と関係しているであろう。1940 年代後半から 1950 年代初めに植えられた木は、今ではギターに使える大きさに成長している。この木材を使えば古くなったスプルース、シダー、レッドウッド (ギター用に使用されるトップ板) の供給が減少しているいま、素晴らしいことである。これを念頭において Andrew は同意したのである。2 年後、Peter MacSween と出会い、1 つの大きなボード (図 4a, b, c) から 3 つのセットのブックマーク付き 4 分割パネルを選択し、切り取り、再解析し、実験と製作を開始した。

- (a) A & M ウッド・スペシャリティの空気乾燥材
- (b) 4 つ星のブックマッチパネル抽出のために選ばれたボード
- (c) トップ表板の 3 セット。

木材の加工と測定

シトカスプルース、オウシュウスプルース、およびベイスギの試料が正確に同じ大きさに切断された試料と比較して、木材のメカニカルな特性を調べるための簡単な実験が行われる間、パネルを乾燥し続けた。これらの実験は確立されておらず、『機械工学研究』で使用されるタイプのストレス負荷実験を表すものではなかった (Bennett 2016)。木目に平行な木材のメカニカルな特性を調べるために、幅 2.5cm、厚さ 0.7cm、長さ 46cm の木片で各種のサンプルを調製した。各サンプルは四分の一であり、振れ (交差) がゼロであった。つまり、すべての木質繊維は x 面と y 面の両方で木材の表面に平行であった。木目の振れの欠如にもかかわらず、Hori らによって報告された状況とは違って、メタセコイアの低木のマイクロファイバー角に関する文献はなかったようである。その論文では、例えば、スプルースは、音響減衰をほとんどまたは全く示さず、他の種より良好に音を伝えるため、音響機器の響板に使用するのに優れた木材であることが示された。ダンピングは、通常、維管束の軸に平行でないセルロースマイクロファイブリルによって引き起こされる。そのような木材の共振は、より多くのエネルギーを熱に変換し、トーンをより少なく変換する。急

な角度はより大きな減衰を引き起こすが、現時点では、メタセコイアの気孔のマイクロフィブリル角に関する情報は得られないため、この種の音響減衰の程度を予測することはできない。

木材試料の第2のセットを調製して、木目全体のメカニカルな特性を試験した。これらの試料は、幅 2.5cm、厚さ 0.7cm および長さ 15cm であった。全ての試行において、各サンプルの端部が支持されている間に、スプリングスケールをサンプルの中心に取り付けた。1000g の力をスケールに適用し、サンプルの中心の下方への撓みを測定した。

これらの実験の結果は表 1a を参照されたい。比重および平均リング幅もすべての試料について測定し、その値が表 1b に示されている。これらの単純なテストの結果は非常に明確であった。下向き偏向はスプルースでは最も小さく、ベイスギでは大きく、メタセコイアは最も大きかった。これは、木目に平行で、木目に直交する方向の両方に当てはまった。比重はスプルース (0.40)、ベイスギ (0.35)、メタセコイア (0.30) で最も低かった。ベイスギとスプルースのリング幅は 0.1~5mm の間で小さく、メタセコイアでは 6~12mm、と非常に大きかった。

要約すると、メタセコイアは他の伝統的に使用されていたトップ板の樹種に比べ、ギターのトップ板として使用するには不適切であるかもしれない。Bennett (2016) と Wegst (2006) は、ギターやその他の弦楽器で伝統的に使用されている木に関する非常に詳細な音響エンジニアリングレポートを提供しているが、残念ながら、メタセコイアと他のものを比較する確かな情報は見当たらなかった。実施された簡単な実験から結論づけることができるのは、メタセコイアは非常に弱くて急速に成長するベイスギと同じような動きをするということだった。最初のギターの製作は、こうした点を念頭に置いて行われた。

最初のギターの製作

最初のメタセコイアギターの製作のために選ばれた木は、比較目的のために作られたその後の 4 つのギターのために選ばれた木と一緒に表 2 に示している。制御された実験的なギターの製作はほとんど不可能であることを理解する必要がある。適切な実験設計では、単一の「処理」変数に関してのみ変化する 2 つの集団の項目について、1 つの「処理」の効果を試験することが必要である。2 つの集団は、「処理」と無関係のランダムな変動が統計的に考慮されるように、できるだけ大きくすべきである。ほとんどの実験では、試験項目の母集団サイズはしばしば 5 と 20 との間であり (統計試験では 4~19 自由度を生じる)、処理中の試料の絶対最小数は 2 (1 自由度を生じる) である。

わずか 1 自由度で実施された実験は、非常に弱く、したがって良くないことがわかった。このような統計的常識の意味は、ギター部品がどのように機能するかをテストするには、「処理」とみなされる 1 つのコンポーネントを除いて、すべての点で同一の複数の楽器を構成する必要がある。明らかに、これはギターメーカーにとって非常に困難で高価な要件になる。

なぜこのタイプの研究が今までに行われたことがないかを説明しよう。通常は、ブリッジ材、フィンガ材などのように、個々の部品を 1 つだけ選択して、完全な測定器の一部としてではなく、分離した部分だけで実験を行う。当然であるが、このようなアプローチは適切な実験設計を可能にするが、装置全体が実行マシンとして試験されることはない。

弱点を認識しているアマチュア製作者としてこの問題を解決するために、パネルの最初のセットに隣接して連続してセクション化された残りの 2 つのパネルから 2 つのギターをさらに製作できることを知り、3 つの楽器に使用される木材は、可能な限り同じものを用いた。#1 と #2 のギターは、トップのブレスパターンを除き、同じにした。サイドはサトウカエデ、バックはブラックチェリー)、ネックはマホガニーであった。ダルベリア・ニグラ (ブラジリアン・ローズウッド) が背中と両側に使用され、ラムヌス・カタルティカ (一般のバツソーン) が指板に使用されたことを除いて、#2 および #3 のギターは同一であった。#4 の器具は、最初の 3 つのモデルと寸法は同じであったが、上部のスプルースやバックのためにカエデといった伝統的な木材を使用した。彼は #5 のユニットはベイスギ、サトウカエデのサイド、ブラックチェリーのバック、およびマホガニーのネックから構成されていた。

最初のギターが完成したら、他のギターを休ませることができた。その後、時間を置かずにつけていったわけでは無いが、5 つの楽器のすべてに K&K ピエゾ電子ピックアップを装着し、私のライブ演奏で使用している。

ギターのパフォーマンスとルシア (製造家) の未来への影響

#1 ギターは、最も厚い上部プレートと 1 つの追加の下部顔プレートを有していた。

そのほか、プレーシングはスキャロップ (加工) ではなかった。楽器が一旦組みつけられると、トップがサウンドホールに向かって膨らむ兆候はなかった。ギター製作から 3 年が経過したが、トップは安定している。中音域が強く、下端が制限されている。それにより操作性に優れ、チューニングできており、季節ごとに形状、ワープ、そしてバックルは変化することはない。磨耗から保護するために上部にピッ

クガードを取り付けていない。コンサートで頻繁に使っている結果、トップが傷ついている。<https://www.youtube.com/watch?v=JxnxTP4qkhQ> にアクセスすると実際の音を聞くことができる。

#2は#1と同じく、スキャロップト・プレーシングを施した。

時間の経過と共に安定してきており、構造上の歪みはなく、トップは弱いプレーシングにもかかわらずサウンドホールが膨らむような兆候は見られなかった。音は高周波域ではまだ良いが、低域は#1よりもはるかに顕著である。#3はスキャロップト・プレーシングで構成されているが、伐採と国際貿易の面で厳しく制限され、弦楽器で優れた音色を出すとされるブラジリアン・ローズウッドをバックとサイドに使用している。#2と#3を比較すると、ライブオーディエンスでは大きな違いは見られなかった。オシロスコープは実際に#2と#3の間に違いを示すであろうが、オーケストレーションにはオシロスコープを装着していることはほとんどないため、この実験ユニットでは、ブラジリアン・ローズウッドの優位性は証拠よりも定説や歴史に基づくことが示された。

#4と#5は伝統的な音色を使用していたが、それ以外の場合は3つのメタセコイアの音によく似ていた。従来の考え方は、これらのギターのトッププレートに使用されていた古くから植えられた木材から生成された音色は、よりバランスのとれた、豊かで強烈な音色を提供することを示唆している。

5つのギターからわかることは、それらの間の違いが実際には非常に小さいことである。さらに、このような音色、演奏性、安定性、重量および外観の類似性から、メタセコイアは現時点でギター製造に使用するのに適した木材であるといえる。

結論

本論文の冒頭で、一度に豊富に供給されたトップ板のすべてが絶滅の危機に瀕しているとすれば、将来の人々は弦楽器をどのように製作するのかという疑問を述べた。園芸生産されたメタセコイアは、現在および将来、ギター製作者が材として使用できるかという質問に対する答えは「イエス」である。メタセコイア林が、カナダ東部での湿度や気温の著しい変化にもかかわらず構造的安定性を示し続けていることは、メタセコイアが世界中の製作者にとって適切な供給源となることを示唆している。世界中で広範な植林がうまくいき、成長がはやく、大きく育つことは、メタセコイアを植える中小規模の農園にとっても、関連する業者にとっても好ましいことである。今世紀の終わりにギターメーカーが古き良き時代のスプルース、シダー、レッドウッドにずっと依存し続けるのではなく、野生から収穫した種を人工的に植えていくことで補うしかないであろう。かつては絶滅したと考えられていたが、先見の明がある科学者によって蘇らせた種であるメタセコイアは重要であるといえる。

第1章

大阪におけるメタセコイアの景色

Landscape of Metasequoia in Osaka

小南 鉄雄 (Tetsuo KOMINAMI)

1. はじめに

三木茂博士は日本全国を回り、各地から植物遺体(化石)を調べておられた。調べていくうち、セコイアとラクウショウとは異なる化石があることを見つけられて、これをメタセコイアと命名され、昭和16(1941)年に論文で発表された。その後、中国の奥地でこの種と同じものが発見され、米国の学者が調査団を中国に派遣し、種子を米国に持ち帰り、メタセコイアを育成した。戦後この苗木100本を発見者三木先生に敬意をこめて昭和24(1949)年わが国に送られてきた。日本では当時の学者を集めて「メタセコイア保存会」を設立し、これを受けて日本全国に配付した。その後これらのメタセコイアから、差し芽、実生によってどんどん増やし、全国に配付され、今日のように、各地でメタセコイアの樹列があり、緑、黄金色、冬枝と色や形の変化で日本の四季の変化の風物となっている。このメタセコイアに各所で出会い、それぞれがその場所でのメタセコイアの歴史を物語っていた。

2. 大阪府立農芸高等学校

大阪府立農芸高等学校は大阪府南部の堺市美原区にあり、創立99年(大正6(1917)年設立)の伝統ある農業高校である。筆者はここに昭和45(1970)年に赴任して、応用微生物科目を担当したが、メタセコイアが存在には気が付いていなかった。昭和44(1969)年~50(1975)に校舎の全面改築があり、昭和16(1941)年頃に建てられた木造の校舎が現在の鉄筋コンクリート建ての北の棟、中の棟、南の棟3棟の校舎に建て替えられた。第4期増改築工事に完成した特別教室棟(中の棟校舎)の応用微生物実験室の窓の外に大きな樹木を認識した。これが「メタセコイア」であり、その時にすでに天高くそびえていた。現在メタセコイアは敷地最南の運動場に面した南の棟に4本、中の棟北側に3本、農場に1本ある。これ以外に創立80周年記念庭園に、このと

きに幼木を植えた10本近くがある。

先の7本については歴史があり、50年以上は経ているものと考えられる。しかも一番古いのは、年代は定かではないが、メタセコイアが日本に入ってきた近い年代昭和28(1953)年頃に農芸高校教員の藤澤純教諭(後に校長)が植樹し、育成されたようである。残念ながら、農芸高校の現校舎周りのメタセコイアは3階建ての校舎よりはるかに高くなり、秋から冬の落葉が激しく屋上に積り、排水溝を塞ぎ、雨水が溜まり、プールようになってしまうことから、仕方なく、数年前に上部を切り取った。しかし、切断後でも成長は続きどんどん伸びて、メタセコイアの樹形は自らの自然の力で三角錐のきれいな形に修復している。一方、農場にぽつんとあるメタセコイアは、手を加えず、そのままの姿で風雨に耐えて成長している。

3. 大阪府教育センター(大阪府科学教育センター)

昭和37(1962)年に大阪市南部の住吉区荻田に大阪府科学教育センターとして発足した。当初は科学教育を中心に研修・研究が行われてきた。その後、一般教科、情報教育、技術・家庭教育、同和教育、養護教育、教育計画研究室が加えられて総合的な科学教育センターとなった。さらに、平成5(1993)年には建物を3階建ての旧館から7階建の新館に増改築し、名称を「大阪府教育センター」と改称して事業内容も大きく改組・拡充された。この改築前の平成元年に筆者は、「大阪府科学教育センター」技術家庭科教室(後に産業教育室)に転勤、技術・家庭科の木材加工を担当した。

なお、大阪府科学教育センターの初代所長は小竹無二雄博士(昭和37(1962)~48(1973))であり、博士は大阪市立大学理工学部の初代学部長でもあった。久世源太郎第2代所長は創設時に初代生物室長として、京都大学から教育センターに赴任され、当時大阪市立大学におられた三木茂博

士を煩わしてメタセコイアの苗木を植樹、その後懸命に育成された。メタセコイアは、大阪府教育センターのシンボリック的存在であり、平成 2 年からの増改築までは枝を一本切るのにかなり厳しい状況なほど大切にされていた。平成 4 (1992)年には西側道路に面したメタセコイアの樹列の一角に、大阪府教育センターのメタセコイアの由来を記した記念碑³が建てられた。

なお、改築に伴い何本かは伐採された。このうちの一本をある程度の長さに切断し、大阪府教育センターの技術家庭科木材加工室の横に保管されている。この伐採されたメタセコイア木材を平成 10(1998)年に当教育センターで開催された「全国教育所連盟第 16 期共同研究第 1 回全国研究集会」の参加者全員のネームプレートに加工した。メタセコイアの切断、加工には当時の技術・家庭科長期研修生の方々の協力を得た。この中の一人が大阪市立昭和中学校の杉村浩司教諭である。プレートの裏面にはメタセコイアの由来を教育センター生物教室の協力を得て作成したシールが貼ってあり、会議に使用し、お土産とした。由緒ある木片であると大変な好評を得た。

しかしながら、近隣からのメタセコイアの落ち葉の苦情や、高くなりすぎた樹高は風などによる倒木の危険から、樹高を低くすべく、ある高さに切断された。近年は切断あとから枝が伸びて美しい樹形となってきている。

³ メタセコイアの記念碑文：「メタセコイアの樹」敷地の北側と西側に植えられているメタセコイアは、昭和 37 年大阪府科学教育センターが設立された当初に大阪市立大学の三木茂先生より苗木を譲り受けて植樹したものであり、今年で 30 年になる。メタセコイアは、昭和 16 年三木先生が自ら採集した植物化石に新しい属として命名されたもので、4 年後に中国四川省で現存種が発見され、「生きている化石」として有名になった落葉針葉樹である。わが国へは、昭和 24 年にアメリカを通じて吹上御所に伝えられたのが最初で、現在では全国各地でみられるようになっている。平成 4 年 10 月大阪府科学教育センター所長大戸道彦。

⁴ 杉村浩二：大阪市立大学都市研究プラザ 10 周年記念国際シンポジウム「復元力（レリジエンス）のある都市をめざして：アジアと欧州を架橋する先端的都市論」においてメタセコイアと文化の復元力（自然と植物）部門で中学校、高等学校の事例の一つとして「昭和に生きた化石」を発表（2016.9.26）。

⁵ ネームプレート裏面文：「メタセコイアの樹（生きている化石）当センターのメタセコイアは、昭和 37 年大阪府科学教育センター（現大阪府教育センター）が設立された当初に、三木茂博士（メタセコイアの命名者）より苗木を譲り受けて植樹したものです。このプレートは、平成 5 年の改築時にやむを得ず一部伐採したものから作り直しました」。

4. 和歌山県橋本市のメタセコイア

和歌山県橋本市は大阪市立大学の三木先生が橋本市東家の瓦用粘土の中から化石の球果を見つけられた場所である。この結果と各地の化石（植物遺体）の球果や枝葉からセコイア属とヌマスキ属と異なる新たなメタセコイア属を命名された。この橋本の地に筆者は昭和 63(1988)年に転居してきた。

ある教科書出版会社の担当者が学校の理科教材として使ってもらおうと、西日本を中心に小中学校に苗木を送っておられ、橋本市には昭和 26(1951)年に各小学校に配付されたようである。現存樹木がその当時のメタセコイアとすれば 65 年の年月がかかっている樹木となる訳である。実際はもっと後年と考えられる。現在メタセコイアの大木が見られるのは、旧橋本市立橋本小学校跡地及び杉村公園等であり、特に杉村公園には 10 本近くが樹列を形成している。旧橋本小学校には一本の大きなメタセコイアがあり、60 年を経過しているそうである。今年(平成 28(2016)年 11 月 27 日)には樹頂に大きな星を付け、樹体の周りにはいくつもの LED をつけて、点灯式を行い、点灯されたその美しい姿を毎夜浮かび上がらせている。

5. おわりに

行く先々でメタセコイアと縁があり、それぞれに歴史を語ってくれていた。ここでは筆者とメタセコイアを結びつけるもう一つのエピソードを述べる。

大阪府教育センターに在職中（平成元(1989)年～平成 12(2000)年）、センターのメタセコイアの由来を調べるうち、三木茂著『メタセコイア』（1955）の本の中に、昭和 24(1949)年アメリカから苗木を送っていただくにあたり、その苗木の育成と増殖を目的とした「メタセコイア保存会」のページがあった。その会の特別会員兼 幹事の一人として、恩師である岐阜大学農学部遺伝育種学講座の平吉功教授の名前を見つけ、より一層メタセコイアに関心を持った。また、農芸高校でメタセコイアを植え、育てた藤澤純校長は、岐阜高等農林林学科卒業である。

参考文献

- 1) 三木茂(1953)『メタセコイア: 生ける化石植物』日本礦物趣味の会
- 2) 岡野浩・塚越実(2015)『メタセコイアと文化創造—植物的社会デザインへの招待—』OMUPブックレット No.53
- 3) 大阪府教育センター(2012)『大阪府教育センター50周年記念誌』
- 4) 大阪府立農芸高校(2007)『創立90周年記念誌』
- 5) 伊都県事務所林務課(1998)『伊都の木・林・森』

第2章

昭和に生きた「化石」

昭和中学のメタセコイア

Fossil Living in Showa Period: Metasequoai in the Showa Junior High School

杉村 浩司 (Koji SUGIMURA)

今回は2012年にNHK放送コンテスト・テレビ番組部門に出展したビデオ映像を元に書かせていただきます。この作品は放送部の生徒7名といろいろと取材を重ね、できあがったものが表題の『昭和』に生きた化石』です。

私とメタセコイアの出会いは、1998年に大阪府教育センターへ技術・家庭科の研究生として勤務したことに始まります。技術・家庭科のうち技術分野では、「材料と加工に関する技術」、「エネルギー変換に関する技術」、「生物育成に関する技術」、「情報に関する技術」を学習することになります。ここでは家庭科の、「被服」、「食物」「住居」等と併せて、すべての分野・領域を学習しました。当時、センターでは技術・家庭科の研究生は、産業教育室を中心に研修を重ねていました。この産業教育室で、当時の室長の小南鉄雄先生から「材料と加工に関する技術」のうち、木材加工に関する技術について学びました。

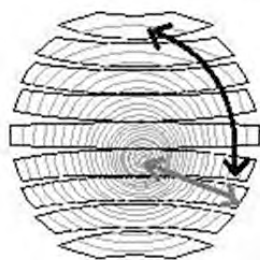


図1 接線方向の収縮（黒線）が半径方向の収縮の2倍

木材の性質として、板材はこぐち（断面側）から見ると、木表（樹皮側）に反ります。木の幹は、葉で光合成を行うため、根から水分を吸収します。その水分は木の幹の形成層を通じて運ばれます。この形成層で導管（被子植物、主に広葉樹）または仮導管（裸子植物、主に針葉樹）が形成され、毎年新しくなって年輪ができあがります。ですから木材の水分はこの形成層、すなわち樹皮のすぐ内側が、一番水分が多いので木材を乾燥させると、断面の接線側に収

縮する割合が強くなり、木表側（樹皮側）に反ってしまいます。半径方向に対して接線方向は2倍収縮します。教科書では、この接線方向の収縮が大きいかは説明されていますが、なぜそうなるかは説明されていません。また、理科では草木類の導管についての説明はありますが、樹木としての説明はなく、形成層のない単子葉植物（主にホウセンカ）を使って実験を行います。したがって、高校まで樹木についてのしゅみはほとんど学習されません。



写真1 大阪市立昭和中学校のメタセコイア
(2012年5月撮影)



写真2 大阪府教育センターのメタセコイア
(北西側から2012年4月撮影)

私は、情報・電気の分野が専門だったため、木材加工や植物学は教育センターに来るまで、ほとんど勉強していませんでした。教育センターでは、小南先生を中心に技術・家庭科のありとあらゆる分野を研究させていただきました。その中で、この分野は一から学習する分野でした。

大阪府教育センターは、今でもそうですが、四方を樹木に囲まれており、そのうち二面はメタセコイアが列をなして植えられています。1957年にこの教育センターが立てられて植えられたものです。ここにメタセコイアが植えられた緯がセンターの北西の角に記念のプレートが建っています。ちょうど1993年にこの教育センターが増築されるときに東側のメタセコイアが切り倒されました。この木材を小南先生が保存されていて、1998年に教育センターで行われた会議において、出席者への記念品としてメタセコイアで作られたネームプレートが配布されました。このときのメタセコイアのプレートと木片をいただき、その後の技術の授業で役立てました。この木片からは今でも香りを放し、杉より甘く、檜よりもおだやかなにおいです。

1999年に私が昭和中学校に赴任したとき、校庭に30mlほどある3本の大きな樹が目にとまり、尖った円錐形は一瞬で教育センターにあったメタセコイアだと気がきました。その後、技術の授業で教育センターで学んだ「生きている化石メタセコイア」について話をしていました。2012年にNHK放送コンテスト・テレビ番組部門への応募に際し、番組の内容について話をしていると、生徒たちから、校庭に植えているメタセコイアについて、どのような経緯で校庭にメタセコイアが植えられたかについて取材をしようということになりました。



写真3 大阪府教育センターにあるメタセコイアの記念プレート

昭和中学校のメタセコイアの出自を調べる手がかりとして、大阪市教育委員会を通じて公益財団法人・大阪市博物館協会から大阪市立自然史博物館の主任学芸員・塚腰実先生を紹介していただきました。塚腰先生には多くの取材に協力していただき、自然史博物館のとなりの長居植物園に植えてあるメタセコイアの下でインタビューに答えていただきました。

塚腰先生によると、1950年にアメリカから100本の苗が送られて来た後、三木茂先生らが保存会を作られ、100本の樹を全国に植えられると同時に、挿し木をしてメタセコイアを保存しようとなりました。この話が大阪書籍（2008年倒産）の道德の教科書に掲載されることになり、大阪書籍が教材ということで、主に西日本の学校にメタセコイアの苗を配布しました。昭和中学校は、1947年に現在の阿倍野中学校の地で発足し、現在の桃ヶ池町に移ったのは、1953年ですから、ちょうどそのころ、大阪書籍の苗の配布と合致します。

昭和中学校のグラウンドとフェンスをはさんで、地続きで桃ヶ池公園があります。ここにも10本ほどのメタセコイアが植えられています。大阪市建設局や公園事務所を調べても記録は残っていないようです。制作した番組には載せませんでした。私の感想では、昭和中学校と桃ヶ池公園のメタセコイアは植えられた時期が違い、目的も別で植えられたと考えます。大阪近郊ですが、メタセコイアの植えられている所を出来るだけ多く取材を行いたと思いました。前述の大阪府教育センター、大阪市立長居植物園を始め万博記念公園、神戸市森林植物園などにメタセコイアが植えられているのを確認しました。



写真4 自然史博物館収蔵庫でメタセコイアの化石の説明をする塚腰先生
(2012年5月撮影)

ちょうど、大阪府教育センターで取材をしているときに、近くにメタセコイアが道沿いに6、7本植えてある私立「ひまわり幼稚園」を見つけました。直接、理事長の西村尚子先生に話を伺うことができました。



写真5 インタビューを受ける西村理事長
(持っている写真は開園当時のメタセコイアの写真)

昭和43年にこの幼稚園が出来た当時、幼稚園のシンボルになるようなものはないかと当時の理事長が知人に頼んで苗をわけてもらいました。天にまっすぐ伸びるメタセコイアの姿が子どもの成長に合っているということで、メタセコイアを選んだそうです。

1950年に送られた100本の苗木を見ようと、大阪市立大学附属植物園と雲雀丘学園中・高等学校（兵庫県宝塚市）に行きました。当初は雲雀丘学園には最初に送られた100本のメタセコイアはないと思っていたのですが、ここで、その内の1本を確認しました。案内していただいた板倉宏明先生によると、メタセコイアは2本あり、もう1本はその後植えられたものの、2009年に新校舎建設に伴い、高等学校玄関付近に移植されました。板倉先生の話によると、本来ならば移植はせずに伐採してしまうという話も合ったそうです。メタセコイアはご存じのように針葉樹でありながら落葉樹です。さらに短枝ごと落ちるので、落ち葉で地面がいっぱいになります。この枝が雨どいを詰まらせたりします。また、成長が非常に早いので根が土管に入ってしまうと詰まらせたりもします。また、雲雀丘学園のメタセコイアは近くに太い水脈があり、この水がメタセコイアを成長させているということです。昭和中学校・桃ヶ池公園のメタセコイアもすぐ北側に桃ヶ池があり、その水が成長を早めていることで納得しました。

この伐採を逃れたメタセコイアをモチーフにこの作品を次のようなナレーションで締めくくりました。

「中国の奥地でひっそりと生きてきたメタセコイアが、人間の手によって、日本各地に植えられてきました。しかし、再び人間の自分勝手な都合で切られたり、なくなったりしているメタセコイアも数多くあります」。

「昭和天皇が愛したとされるメタセコイア、昭和の時代を生き抜いたメタセコイア、この昭和中学校に植えられたのも何かの運命を感じます。このメタセコイアを、雲雀丘学園のメタセコイアと同じように、末永く大切にしていきたいですね」。

にもかかわらず、2016年9月に昭和中学校の4本のうち30mほどの3本が伐採されました。残りは10mほどの高さの1本が残っています。理由は3つありました。1つ目はグラウンドの排水溝が落ち葉で詰まることです。2つめの理由は、グラウンドの横に高架のJR阪和線が通っています。野球の練習で、ボールが電車に当たらないようにするために、防球ネットが必要です。そのために伐採が必要だったのです。3つ目の理由は、落雷の防止です。伐採されたメタセコイアは、どれも30m以上もあり、付近で一番高いものだったのです。これに雷が落ちることは十分に考えられます。落ちた雷は、誘導雷となって、樹木の付近にいる人に当たる可能性があります。2012年8月に昭和中学校近くの長居スタジアム付近で樹木に落ちた雷が誘導雷となった死亡事故がありました。

また、2016年8月に埼玉県の高校のグラウンドで、予兆もなく落雷があり、死亡事故が発生しました。このような落雷によるリスクを少しでもなくそうということで、高い3本のメタセコイアは根元から伐採されました。

昭和中学校にはまだ15mほどのメタセコイアが残っています。池から離れた距離なので成長は遅く感じます。また、隣の桃ヶ池公園のメタセコイアもグラウンドから、あべのハルカスをバックにその存在感を示しています。

第3章

人も、街も、つながってひろがって

Creative Space in Bishoen, Abeno: The Early Period for Football in Osaka

濱崎 憲子 (Norico HAMAZAKI)

いわゆる「駅前旅館」

JR阪和線美章園駅前がキャッチフレーズの「美章園旅館」。住所は東住吉区大塚町（現在：北田辺1丁目）で、北側は道路(美章園街道)を挟んで阿倍野区美章園2丁目、阪和線の高架の西側は美章園3丁目という東住吉区の北西角にあたる立地。昭和30年代、「美章園旅館」の西並びには薬局、古道具屋、表具屋、自動車修理店などの借家が角を曲がって南側まで続いていた。東側は空き地（昭和30年前半に住友銀行美章園支店が建つ）でブロックの東角には大きなアパート「美章園荘」があった。

市バスの美章園の駐車場も現在よりもっと西側で我が家から近い位置にあり、また近鉄バスも運行していて市バスの駐車場のすぐ近くに駐車場があった。阿倍野橋までの運賃は市バスの方が安いので、ほとんど近鉄バスは利用しなかった。

道路の向い側（美章園2丁目）には間口の広い荒物屋があり、その東側には金庫屋、うどん屋「雨風屋」、呉服屋「つるや」、タイピスト養成所などが連なっていた。もう少し東に進んで路地を北に入ると小さい市場があり、母に付いて花屋さんにはよく行った。ある日スイトピーを一輪もらったのを覚えている。

当時の「美章園旅館」は和洋折衷の建物で厚みのある木製の両開きの門戸にはカンヌキがあり、玄関はガラス格子の引き戸で正面は三畳ほどの長方形の踊場になっていた。その踊場の隅に消火器があって、何かの拍子に倒してしまい一面泡だらけになってしまったことがある。応接間は子供心に印象的でお気に入りの空間だった。天井にはアールヌーボー調の石膏レリーフの装飾が施され、中央にはガラス飾りをあしらったシャンデリアが輝いていた。3人掛けの背もたれの高いソファー、肘掛けタイプの一人掛けソファーが2脚、手回しの蓄音機、テーブルには煙草入れとラ

イター・灰皿がお決まりのようにセットで置かれてあった。窓は上部がアーチ型の両開きが2カ所。使うことは無かったが暖炉もあった。1階には前載に面してL字型をしたまわり廊下のある広間と呼ばれる十数畳の書院造りの部屋があり、主に宴会や親族の行事に使っていた。その頃は内蔵があって衣替えのシーズンは蔵で洋服の出し入れを手伝った。応接間の真上が兄たちの部屋で勉強机やベッドがあったのはしっかりと覚えているが、2階にはあとは客室が4～5部屋あったような気がする。



昭和30年頃の美章園旅館

当時としてはモダンな洋風の佇まいだった

旅館の利用客は天王寺の鉄道管理局（現在のJR）職員、平野の森永乳業、地方から定期的に来阪する企業や商店の営業マン、サッカー関係の人々などが多かった。昭和31年に参議院議員の泉山三六氏が打泊した。昭和33年夏にミヤコ蝶々が1～2週間滞在。蝶々さんの自宅は文の里3丁目で、実家は近鉄南大阪線河堀口駅近くにあった。当時は壁面に固定された四角い黒電話で、蝶々さんが椅子に座って足を組んで不機嫌な様子で電話相手と話していたのをよく覚えている。また昭和34年夏にはそのころ人気のコメディアン大村崑主演「番頭はんと丁稚どん」の撮影のため松竹

映画のロケ隊が数日宿泊した。のどかな昭和の懐かしい思い出である。何度も何度も増改築をしていたので、記憶が定かではないが昭和41年頃に屋号を改名して「大阪スポーツマンホテル」になったのかもしれない。

「大阪スポーツマンホテル」

何とも大仰なネーミングで、人に話すのが恥ずかしかった。今考えると中央区本町の靱公園にあった「大阪スポーツマンクラブ」への父の思いから名付けたようだ。大改装の後はおもとの和風建築と鉄筋4階建ての、これまた和洋折衷となった。両開きの大きなガラス戸を開けると大きな石をオブジェのように設えた空間があり、石の橋を渡ると自動ドアがあってロビーへの入り口となる。左に受付カウンターがあり、各客室と繋がる電話交換機もあった。ロビーでまず目に入るのが湾曲したデザインの階段で、両手摺支え部分にはオリンピック五輪のモチーフが連なっていた。1階の広間はそのままだと残され、改装した1階の奥には30～40人座れる食堂とその奥に調理場があった。そこが鉄筋の1階で、2・3階が客室、4階は40畳ほどの舞台付きの広間だった。



昭和40年頃、大阪スポーツマンホテルロビー
フロアはカーペット貼りで、靴履きのまま入館

玄関の東側には喫茶室があり、当初は知り合いの人に貸していたが数年後に改装して父がコーヒーを淹れていた。店の入り口のレンガ壁にはグリーンの大大理石に金色の文字で「village INN」と刻まれてあった。その頃父がサイフォンでコーヒーを淹れるときに使っていた竹ベラを、いま私が使っている。

宿泊客は大学、高校の部活合宿や各種競技の大会出場者など、長居競技場利用者も多くマラソン選手の円谷幸吉氏も宿泊。また、浪速短大・大阪芸大の受験生の指定宿舎の

一つだったので、毎年多くの受験生が地方から泊りに来ていた。昭和45年の大阪万博期間中は連日満室に近い状況だった。そして昭和61年4月で「大阪スポーツマンホテル」は廃業。アーチ型の石橋がかかった池、釣瓶式井戸、灯籠、大きな松の木、四季折々に開花する木や草が息づいた前栽をはじめ、思い出がいっぱい詰まった我が家が幻のように消え去った。多くの人がさまざまな目的で利用して賑わった美章園駅前の「大阪スポーツマンホテル」の記憶はしっかりと頭に焼き付いている。そして美章園と言う街も時代と共に、地域の様子やライフスタイルの変化に伴って、いまではすっかり変わってしまった。

そして平成17年秋、「大阪スポーツマンホテル」の跡地より西側に予定よりも2年遅れで「ティールーム&アートギャラリー・エムズ」がオープン。「喫茶店」といわれると、いまでもあまり気分がよくない。あくまでも「ティールーム」にこだわってお茶を飲みながらゆったりとした時間を心地よく過ごしてもらえる空間づくりを目指している。またギャラリーでは、年4～5回のエムズ企画展のほかグループ展や個展でアート作品の発表の場として利用してもらっている。よく「美章園らしくない店」といわれるが、一体「美章園らしい」というのはどういう意味なのか？私は自分が育った街をそのまま素直に受け入れているので、愛着もあり、これからも快適に暮らしていきたいと思っている。



ティールーム&アートギャラリー・エムズ
サーモンピンクとグリーンを基調にした外観

開業してから「エムズ」で出会った多くの人々。自然体で話の弾む人、アートを通して出会った人、たまたま小学校や中学校、高校の同期や先輩だった人、友人の知り合いだったり...と。また、「エムズ」に来られたことはないが、店先で掃除などして、顔見知りになり挨拶を交わす名

前も住まいも知らない方もいる。集いの場であり、人から人への輪がつながり広がって行く「ご縁」という不思議な巡り合わせに感謝することも多い。「美章園旅館」や「大阪スポーツマンホテル」の時代も常に人の出入りがあり、父や母もこの地でそれぞれのスタンスで多くの人たちとの交流を温めていたのであろう。

日常にあった「蹴球」

1993年、Jリーグが開幕してサッカーファンという人があまりにも多いのに驚いた。私にとってサッカーは幼い頃から生活環境の中に普通に存在していた。しかし何度試合を観ても全く興味がわかず、ルールすら未だに理解していない。私にとって近くて遠い「サッカー」。父というフィルターを透してしか辿れないサッカーの記憶。

父は明治43年生まれで、高校・大学と青春をサッカーに費やしていたようだ。そして私の二人の兄も父の影響だろうかサッカーをしていた。

長兄は勉学優先だったが、次兄は父の理想に沿って高校・大学・社会人の選手としてサッカーに関わっていた。1960年頃は学生や社会人のサッカーチームで、プロのサッカーチームが出来るなんて夢にも思わなかった。その頃、中央区本町の鞆公園内に「大阪スポーツマンクラブ」というのがあり、父は理事を務めサッカーの普及に邁進していた。また鞆公園にはサッカーグラウンドがあり、観客は出場選手の関係者ばかりで、石の雛壇に腰掛けて観戦するのだが、ぽつんぽつんと人が居るなんとも寂しい風景が記憶にある。



昭和初期、大学時代の父（後列左）

サッカーのチームメイトと

1960年にデットマール・クラマー氏が1964年の東京オリ

ンピック日本代表チームの指導のために来日、結果ベスト8の成績を残して4年後のメキシコオリンピックに夢を繋げた。また東京オリンピックで父は蹴球会場の競技役員として関わっていた。

同年、長居競技場（現在のヤンマースタジアム）が完成しサッカーの大会も多く開催されてサッカーの認知度もかなり上がったようだ。そして1968年メキシコオリンピックで日本代表チームは銅メダルを獲得。そのチームメンバーに次兄もいた。彼のポジションはゴールキーパーで、結局試合には出場する機会はなかったがメンバーの一員として正式に記録されている。

余談になるが、私が高校3年生(1967年)のときクラスメイトの男子たちがちょこちょこことサッカーに興味を持ち始めていたが、まだクラブも同好会も無かった。ただただお遊び程度のサッカーゲームをするために父に頼んで、長居競技場のメインスタジアムの南側にある練習場（現在は立派なグラウンドに整備されている）の使用許可をとってもらったことがある。当時父は蹴球協会の役員だったので、家業はさておき頻りに長居競技場の事務所を訪れていた。またその頃は、正月の全国高校サッカー選手権の大会が長居競技場で開催されていて、「大阪スポーツマンホテル」は秋田商業をはじめ、高校サッカー名門校の宿舎となっていた。美章園から鶴が丘までの電車移動も選手たちの負担を軽減したと思う。

現在の呼称は「キンチョースタジアム」だが、この球技場の完成に父はかなり貢献したといっても過言ではない。サッカーを主とする球技場として1987年に竣工。その開幕セレモニーのテープカッターの一人として父も誇らしげな顔をしていた。父のフォトコレクションには球技場の建設過程を記録したものがどっさりあった。



昭和62年4月長居球技場（現：キンチョースタジアム）の竣工式のテープカット。父（右から3人目）、当時の大阪市長大島靖氏も列席

「ア式蹴球」からサッカーに関わった父は1989年・平成元年の誕生日の翌日に亡くなった。「轉成院积邦還」、(ボールを)蹴りながら自分のあるべきふるさとに還って行くという意味の法名を頂いた。そして命日の日付で当時の内閣総理大臣竹下登氏から勲章も頂いた。1993年のJリーグの開幕をさぞ観たかったであろうと思う。ちなみにJリーグのチェアマンだった川淵三郎氏は、父の高校の後輩で、長兄の高校・大学の先輩にあたる。青春時代の父がボールを蹴っていた大正・昭和初期のサッカーと21世紀の現在国民的スポーツとなったサッカー、当然プレイスタイルもスキルもステージも全く別の競技なのかもしれないが「サッカー」を愛するという心は父の時代から全く変わっていないのだと思う。私も男子に産まれていたら、きっとボールを蹴らされていたであろう。我が家の4代目の看板犬はよくサッカーボールで遊んでいた。

幼稚園通園前後 (1954年～)

- 1954年4月「浅香山幼稚園」入園。新設1期なのか園児30名。30歳代半ばくらいの男性が園長で、20歳代後半くらいの女性の先生が2名でクラスを担当していた。
- 幼稚園はJR阪和線の浅香山駅から東側の大和川沿いにあった。阪和線から見ても赤い尖り屋根が目印ですぐにわかった。
- 送迎バスで通園するのだが、近所の顔見知りの子など居なくて、ただ一人河堀口あたりの男の子がいた。バスが浅香山駅高架下を東側へカーブするとき、落ちはしないかと気が気ではなかった。
- ランチタイム、牛乳ビンの口にちぎったパンを浸していたら、行儀が悪いと先生に注意された。子供心にかなりショック!だった。
- 楽しかった思い出などは、あったかも知れないが覚えていない。きっとかなり通園するのがイヤだったようで早期退園した。ただ制帽は頭頂部が四角で房飾りが付いていて大学帽のようなので気に入っていた。

●美章園駅前にまだ信号機が無かった。幼稚園に持って行くためのマグカップを美章園市場に買いに行き、オレンジ色のカップを手にもうれしくて道路に飛び出して車に轢かれた。車は三輪トラックで、当時は救急車などあったのか知らないが、三輪トラックを運転していたお兄さんが病院へ運んでくれた。

●阿部野筋の西側、現在のキューズモールの南の先っぽあたりにあった鳥潟病院に入院。重傷ではないが左足にギプスをはめられていた。病院のベッドは大人仕様なのかかなり高い位置に寝かされて、ある日、付き添いでベッドの横下で寝ていた母の上に落下した。

●鳥潟病院はモダンな洋館造りで、病室は普通の家のように窓の外には琵琶の木があり、居心地がよかったような気がする。

●父の友人の姪の方が日舞の先生で、小学校に行くまで月に1～2回宝塚まで稽古に通っていた。阪和線で美章園から天王寺、そして内回り環状線(当時は省線と言っていた)で大阪駅へ。その頃は天王寺から大阪までの駅名は覚えていたが、まだ「大阪城公園」駅はなかった。そして梅田の阪急電車の乗り場は阪急百貨店の東側で、現在よりかなり南にあった。

●父の友人のお宅は阪急宝塚の山手でかなり広く、庭には大きな池があり、そのそばの高い木の上にはツリーハウスとまではいかないが秘密基地のようなスペースがあり、そこのお兄さん(小学5～6年生)たちが昇り降りして遊んでいた。

●お屋敷の離れに稽古場があって、「藤娘」の途中まで習った記憶がある。その稽古場のトイレが洋式で恐る恐る使ったが、悲しい洋式トイレの初体験となった。

●1954年12月、美章園市場の東側の美容院(現存も営業している「にしむら」というお店)で5歳で初パーマをかけた。

●節分の日に髪に髷やかんざしを付けて着物を着ている写真がある。それを「おぼけ」といつていた。男性が女装するなどの仮装もあったらしい。まるでハロウィーン！

●誕生日やお正月など記念日には、阿部野の近鉄写真スタジオ、美章園駅東側のアルス写真館などで写真を撮っていた。

●応接間の蓄音機から聞こえる曲で記憶にあるのは、パティ・ページの「ワンワンワルツ」、ダイナ・ショアの「ブルーカナリア」、「明治大学校歌」の3曲。

●兄が小さなカメラを持っていた。大きさは多分70×40mmくらいで、仕上がりプリントは40×40mmくらい。あと赤と青のインク瓶、スパイラル状にカットされたガラスのペン先がとても素敵に見えた。

●家の東側に住友銀行が建つ前、広い空き地だった。家で産まれた仔犬を数匹遊ばしていたら、知らないおぼさんが仔犬を全部持って行ってしまった。

●その空き地にオリエンタルカレーや森永乳業の宣伝カーが来て、商品のデモンストレーションをしていた。

●家の南側のブロックの北西角にあった大きな社宅か寮が火事で全焼した。夜で私は布団の中から火の粉が上がるのを見ていた。その焼け跡はしばらくそのまま放置され、立ち入り禁止のバリアもないので格好の遊び場所となった。割れた食器や便器の一部らしきものなどが散乱していた。やがてその土地が整備され、その前の道で遊び始めるとその前の家のおぼあさんが必ず水撒きをして私たちを追い払った。

小学校のころ (1956年～)

●美章園市場から阪和線の高架沿いに「7」の付く日に夜店が出ていた。近鉄南大阪線河堀口駅あたりまで屋台が並び、リンゴ飴、カルメ焼き、綿菓子、金魚すくい、ヨーヨー釣り、輪投げ、針金細工、コルク玉の射的などがあった。

●その河堀口までの商店街に「ニシオト」と言う昆布の佃煮屋さんがあり、まわりにはいつも蒸れたような臭いが漂っていた。またその近くに玉川幼稚園があり、いとこが通っていた。

●美章園市場。今のスーパーサンコーの場所で、南側から入ると正面に果物屋があり、左側（西）と右側（東）にそれぞれびっしりと商店が並んでいた。八百屋、魚屋などはボウル状のザルをゴム紐で吊り下げて売上金や釣り銭の出し入れをしていた。お母さんたちはイ草で編んだ手提げの買物かごを持っていたが、いま思うとまさにエコ。ビニール袋はなく、商品は新聞紙などで包んでいた。

●タマゴ屋さんが印象的だった。粃殻を敷き詰めた台に、大きさ別にグループ分けして値段を表示してあった。そしてタマゴをライトに照らして一つひとつ確認して販売していた。

●肉屋のおぼさんが「おおきに！」と言うのを「おっきに！」と言っていたのが面白かった。

●市場の東側には美章園温泉があった。玄関を入ると左右には下足箱、右の戸が女湯、左の戸が男湯。女湯の記憶は正面に大きな湯船がありその奥に子供なら3～4人は入れる小さな浴槽で身体に細かな焦げ茶色の錆のようなものがつく電気風呂、小部屋になった独特の臭いが息苦しい蒸し風呂、そして乳白色の牛乳風呂などがあった。脱衣場は板張りでゆったりとして南に面して池のある庭があった。

●風呂屋には大きな体重計があり、重さの単位は貫（かん）匁（もんめ）。ついでに足のサイズは文（もん）だった。

●美章園温泉、当時はかなりモダンな建物で2階はダンスホールになっていた。

●美章園温泉の南向かいに肉屋「玉富士」があり、そのコロッケが美味しくて、おかずではなくおやつとして食べていた。

- 肉屋の隣りあたりに下駄屋さんがあって、運動靴やつけかけ（今はミュール）、母は下駄を買っていた。
- 美章園温泉の北側には映画館があって、東映映画の時代劇、花菱アチャコの「のんきな父さん」、海外アニメーションなどを上映。
- 映画館で、よく時代劇を観ていてヒーローが悪人をやっつけたとき観客はスクリーンに拍手喝采を送っていた。
- 美章園市場の西側高架下に、今も営業している「大崧寿司」。遠足のお弁当はいつも、「うなぎときゅうりの巻き寿司」だった。
- 美章園駅の東側に阿倍野区と隣接する東住吉区がある。現在の北田辺2丁目2番・3番地で、疎開道路予定地と近鉄南大阪線で区切られた三角地帯。その疎開道路予定地の東側の一角に祖父の土地があり、イチジクの木が3本、鶏小屋と納屋があった。長兄が友人からもらって来たヤギも一時いたが、どこかの幼稚園に寄付したようだ。東隣には「日の本産院」があって、その土地と高さ1メートルほどの簡易な柵で仕切がされていた。その「日の本産院」の土地が畑だったのかどうか曖昧だが花が咲いていた記憶があり、その頃読んだフランシス・ホジソン・バーネットの「秘密の花園」が、なぜかその眺めと重なっていた。
- 家の南側。高架下に佐野さんと言う散髪屋があった。私より3～4歳年上の長女、2～3歳年下の次女。ほぼ赤ちゃんだった三女がいて2階の自宅スペースにもよく遊びにいった。佐野さんで散髪をしてもらおうと必ず居眠りをしてしまい、あるとき目が覚めると家にいたこともあった。
- 高架をさらに南へ行くと、家から2ブロック目の角に内科の「松田医院」があり、風邪などひいて診察を受けると必ず細い紺色の注射器でお尻にペニシリンを射たれた。診察室の壁に鳩時計が掛かっていた。
- もう1ブロック南に行くと、榎神社と桑津墓地がある。墓石はあるが子供の遊び場になっていて榎神社という名称で呼ぶのが普通だった。ある日首吊り事件があり、大柄な男性が下着姿でぶらさがっているのを見た。つい最近まで、夢だったのかなあと思っていたが小学時代友人も覚えていて現実だったと判明した。そしてその木は今も在り、縄をかけた枝には切り落とされた跡も残っている。またその友人が言うには墓の西の一角にペットセメタリーがあったそうだった。
- 榎神社で遊んでいて夕暮れ時に火の玉を見た。まだうっすら明るいし、テレビや映画でよくある「ひゅ～どろどろ～」なんて効果音も聞こえて来ないので怖いという感じはしなかった。
- 小学生の頃、お出かけ着は誂えが多く、文の里商店街の「サカエ洋装店」でよく仕立ててもらった。その先生が女優の北林谷栄さんによく似ていた。
- 小学校3～4年の頃から月刊雑誌「少女ブック」を買ってもらっていた。これの付録がとてすてきで内藤ルネのイラストを使ったものやアクセサリーなどもあった。
- 小学校4年のとき両親と京都の宿に一泊して、初めてファンタオレンジを飲んであまりの美味しさにもう1本買ってもらった。サイダーはピリピリして飲めなかったが、ファンタの炭酸はマイルドだった。
- 当時、女の子は「うち」と自分のことを呼び、相手に対しては「自分」と言っていた。
- 小学校6年の夏休みの自由研究で「日の出の観察」を友人数人でした。美章園の駅の下りホームの南端から生駒山方面を見る。
- この自由研究の発表には、当時まだ新しかったマジックインクを何色が使ってレポートをまとめた。
- 小学生時代の行動範囲の北限は河堀口、南限は桃が池、西限は文の里商店街、東限は近鉄南大阪線を少し越えたあたり。当時松虫通りは無く、北田辺商店街も途切れていなか

った。

中学生の頃（1962年～）

●東住吉中学校は桑津小学校と北田辺小学校からの進学者が大半で、桑津小学校の卒業生が一番多かった。団塊の世代なので、同期は約860人。私が1年生の頃は在校生が3,000人近いマンモス校だった。

●現在の白鷺中学は東住吉中学の分校で、私たちが2年生のときには17クラスのうち5クラスが分校で授業を受けていた。

●中学生になって家庭教師が来ていた。1年生のときは大阪女子大の学生さんで眼鏡をかけた物静かな人だった。私はよくうたた寝をしていたのに辛抱強く付き合ってくれていた。2年生も大阪女子大の人だったがちょっと変わった風貌であまり馴染めなかった。3年生は大阪市大のハキハキとした女性だった。

●1年生の担任は女性で音楽の先生。初めてクラスを持つ新米先生で、クラス全員と1対1で交換日記をしていた。その中で私は小学校6年の親友と仲違いしたまま中学生になってしまったことを書いていたら、ある日の放課後先生に呼び出されてその親友と仲直りする機会を作ってもらった。現在もその親友とは付き合いが続いている。

●1年生の体育の授業でソフトボールの試合があった。ヒットを打って1塁ベースに突っ込んで左肘の骨にヒビが入った。3～4週間ギプスで腕を固定されていたので、いろいろと授業をサボることが出来た。

●1年生の国語の授業で、先生が「弁生肅々夜川を渡る～」と詠い出したとき、初めて聴いた詩吟にびっくりして鳥肌がたった。

●2年生の数学の先生が面白かった。転任してきた女性で、言葉が訛っていて、言葉の後に「ね」がつくので授業中に何度「ね」というか数えたことがある。しかしそれが何回だったのか覚えていない。

●3年生のクラスメイト女子6人で「木の実グループ」というのを結成、羽曳野の看護施設に毎月お小遣いを出し合っていて送っていた。近鉄南大阪線「北田辺」駅付近に集まって、茶封筒にそのままお金を入れてポストに投函していた。「木の実」と言うのは私の発案で、父の大学時代の友人の娘さんの名前。小学生のとき初めて東京に行ったときに彼女に会った。同年の可愛い人で、何よりその名前がステキだな、と心に焼き付いていた。

●中学何年の頃からか阿倍野の「ユーゴー書店」に行くようになった。また、天王寺公園の中に小さな温室の植物園があり、植物名などは分からなかったが居心地がよかったのでよく行っていた。

●先生のあだ名。理科の先生(男性)はいつも白衣姿だったが襟元が汚れていそうなので「あか(垢)つきの人」、社会と体育を掛け持ちしていた先生(男性)は「アパッチ」、技術家庭の先生(男性)は「便秘」、体育のベテラン先生は「ポンチ」これは先輩たちから代々受け継がれたあだ名、英語の先生(男性)は当時のテレビドラマ「月曜日の男」の俳優に似ていたので「J・J(ジェイ・ジェイ)」など。

●「J・J」は愛車のスバルで学校に来ていて、校庭の南側に駐車していた。

●中学の卒業アルバムを見ると、男性の先生で蝶ネクタイをされている方が何人かいる。また卒業式の日、担任の女性の先生は袴を召されていた。

高校時代（1965年～）

●公立高校の受験日、大阪市内は珍しい大雪で試験が午後からになった。たまたま同じ中学から一緒に受験する友人の家が近くだったので、数人で彼女の家に行って時間待ちをした。そのときに、いままで飲めなかったコーヒー(インスタント)を初めて飲んだ。味の感想は覚えていない。

●母と一緒に合格発表を見に行った。「あ～あるわ…」程度の表情だったので、制服業者が注文を取りに近寄って来なかった。

- 校長先生が教壇から右へ左へ歩きながら話をしていた。いままでの先生はほぼ教壇正面をキープしてたのに、なんとアメリカっぽいと感心した。
- 1年生の頃の通学は近鉄南大阪線を利用していた。学校までの道のりは、見渡す限り田んぼ。帰りには田んぼに入って蛙を捕まえて家の池に放していた。
- 1年でテニス部に入ったが、準備運動で校庭を走らねばならなかったのが即退部して、美術部に入った。
- 2年のクラスは全く馴染めなかったのが、昼食は美術部の部室で美術部の友人と食べていた。
- 修学旅行は九州へ。2年のクラスなので記念撮影の時だけクラスに戻って、ほとんどは親しい友人がいるクラスに紛れ込んでいた。
- 高校2年の頃から、コンタクトレンズを使い始めた。その頃はハードレンズで現在のレンズより1.5倍ほども大きかった。取り扱う眼科が日本橋にあり、検眼・発注から受け取りまで1週間ほどかかった。
- 下校時の飲食店への寄り道は禁止されていたが、補導されることもなく、あっちこっちのお店に寄っていた。
- 3年のクラスは楽しかった。男女合わせて10数名のグループが出来ていた。学校から長居公園まで徒歩10分もかからない。下校時に、周辺の団地に住んでいる子はカバンを家に置いて一緒に公園まで歩く。まだ植物園も博物館もなく、広々とした荒地に大きなため池があった。
- 3年の英語教諭が見た目にもかなりユニークで、短髪の前髪を鉄腕アトム額のように不思議なカーブに切りそろえていた。性格はまじめでおとなしい。あだ名は「金さん」。
- その「金さん」の授業の前に、ある企みがあった。主犯は不明。教室の前と後ろにある引き戸を外から開けられないように固定した。さて金さんはどうする？とみんなが固唾をのんで見ていると、廊下側の壁の下にある通気用の高さ30~40cmの引き戸開けて這うように教室に入り、何も無かったかのように教壇に立って授業を始めた。みんな、ポカンとしていた。以後金さんにいたずらを仕掛けることはなかった。
- 先生のあだ名。数学の教諭(男性)は「てんぷら」見た目若いので生徒に紛れると先生だと判別しにくい。政治経済の教諭(男性)は「政経怪獣ブースカ」大柄、太りぎみで汗かき、鼻息が荒い。体育の教諭(男性)は「アリラン」眉毛が八の字で目は細く逆八の字。体育の教諭(女性)は「リラちゃん」筋肉質のしまった体型でゴリラみたいだから。早くに転任された英語(グラマー)の教諭(男性)は「ジェラード」。当時のテレビドラマ「逃亡者」の憎まれ役の刑事の名前、でも先生はみんなから好かれる良い先生だった。

第4章

なにはの葦 淀川のヨシ

Reeds in Naniwa, Osaka and YOSHI in Yodo River

小山 弘道 (Hiromichi KOYAMA)

1. ヨシとは

文学、歴史の中では「葦」が使われていますが、植物学ではカタカナ表記「ヨシ」が標準和名です。ヨシはイネ科の多年生植物で、水辺や湿地に群生します。高さは、5m（鶴殿の最高測定値は、5.35m）に達します。太さ（直径）は、大きいもので2cm。地上部は一年生で4月初めに伸び始め、7月半ばに止まり、穂を出します。12月下旬に枯れます。地下部は、5年位生きるので多年生です。枯ヨシを1月、2月に刈り取り、後にヨシズ、スダレ、日除け、などにします。ヨシズやスダレに利用する太さは7mm～13mm位です。大形のササの葉を産しない淀川周辺では、ヨシの葉でチマキを作ります。

特殊な利用は、雅楽楽器「篳篥」の「蘆舌」（リード）です。太さは12mmと決っています。淀川上流部右岸の河川敷、高槻市域の「鶴殿のヨシ原」に産するヨシは、古くから蘆舌に最適とされ、国の重要無形文化財「宮内庁の雅楽」の篳篥に用いられています。淀川の「鶴殿のヨシ」は国の大切な財産ともいえるのです。

近年淀川の防災対策のための改修事業によって鶴殿周辺の川床が低下したために、河川敷が乾燥しヨシが激減していました。1996年保全対策として建設省（国交省）が揚水ポンプを設置し、稼働して以後、回復のきざしが見え始めています。

2. 「葦（あし）」は大和言葉か

漢和辞典によると、ヨシには葎、蘆、葦の三文字が当てられ、解説されています。「葎」は春芽を出した頃のものの、「蘆」は初夏の頃までに大きくなったもの、「葦」は冬になって枯れたもの、と意味が異なっています。また「蘆」は、つらなり生える草の意味と記されています。

日本古代（萬葉集まで）のヨシの呼び名と文字を、日本

書紀、古事記、萬葉集まで調べました。日本書紀では「葦牙^{あしかび}」、「葦原^{あしはら}」、「鹿葦津姫^{かあしつひめ}」。「かあし」が（かし）となったと思えます。古事記では「葦原」、「葦牙」、「阿斯波良能^{あしはらの}」。萬葉集では「葦邊^{あしべ}」、「葦原^{あし}」、「安之^{あし}」、「安志^{あし}」、「阿之^{あし}」、「葦苴^{あしかり}」。「蘆」と「葦」、その他を、漢字の意味のようにヨシの状況を区別して用いたかどうかは分かりません。古代でもヨシを「あし」と呼んでいます。

それ以後、数々の文章や和歌には「あし」、「蘆」、「葦」が使われていますが、植物の呼び名を離れて人の心を表すまでに意味が広がっています。しかし現在手近な古典文学の訓読みは、ほとんど「葦」を当てています。「葎」が使われなかったのは、「葦牙」が神の名としてあったからです。

3. よし、あし

「あし」は「悪し」に通じるので、「よし（善し）」になりましたは、いかにも説得力のある言葉ですが、いつの頃からかはまだ不詳です。古くは萬葉集で「悪し」の意味に使っています。

卷第十四東歌。三四四六

「伊毛奈呂我都可布河伯豆之 佐佳良乎疑 安志等比登其等 加多理与良斯毛」。

妹なろが使ふ河津のささら萩 「あし」と人言語りよらしも。

藤原敦頼（道因）が嘉応2（1170）年に住吉社に勧進奉納した「住吉社歌合」には、「かのかみかぜいせじまには「はまおぎ」となづくれど、なにはあたりには「あし」とのみいひ、あづまのかたには「よし」といふなるがごとくに、おなじきうたなれども、ひとのこころよりよりになむあるうへに…」と、呼び名の違いと記されています。決めかねるとしながらも、和歌のよし、あしをそれとなく評してい

ます。この時代にはすでに懸詞として使われていたのかも知れません。新千載和歌集（1356年）巻第九積教歌の三首の和歌が、よし、あしが人の道、人の心へ広がったことを表しています。

前権僧正玄円 九一〇「よしあしと人にかたるな難波がたこと浦にすむあまのしわざを」

前大納言為世 九一一「しら波もよせつるかたにかへるなりひとをなにはのあしとおもふな」

八条院高倉 九一二「津の国やなにはにおふるよしあしはいふ人からのことのはぞかし」

4. なには、津の国に海辺の歌が多い理由

難波といえば、あし。「なには、津の国」にはヨシが生い茂っていました。なにはは渦、あし辺などの言葉に見られるように、なにはには干潟があちこちに広がっていました。河口辺りの淡水と海水が交じり合う汽水域です。そこに生えているヨシの風景、葦垣にみる利用法などが数々の言葉、心を生み出しました⁶。

百人一首に次の二首があり、よく知られた和歌です。

伊勢「難波がた見じかき蘆のふしのまをあはで此よを過ごしてよとや」

皇嘉門院別當「難波江の蘆のかりねの一夜ゆへ 身をつくしてや恋わたるべき」

節の短さ、かりね（刈り跡の茎）、漂標と、ヨシの性状がよく観察されています。

5. 淀川のヨシ、今は水辺環境の主角

淀川が整備されて小さくなっていますが、淀川大堰の下流にはかなり広いヨシ原があります。水際にはヨシが続いています。しかし干潟のイメージからは遠く離れた風景です。古き時代の葦の和歌に描かれた難波潟は、想像もできなくなっています。

ヨシの水を浄化する働きが、今期待されています。水辺に群生して多くの生き物を養う力が見直されています。人の心の豊かさを養っていたことにも気づき始めていますが、

数値化しないと理解できない現代人はまだ失った水辺の大きさを計れずにいます。

国内で生産が低下したスダレの輸入は40億円にもなり、輸出国の水辺の浄化に役立っています。ヨシは群生するので、話題の二酸化炭素を固定する量が大きく、製品化して利用することが温暖化防止に役立つのです。

私達は鶴殿のヨシで、今の暮らしに合うような手作りの創作品の開発を行っています。また山田兄弟製紙（福井・越前市、和紙の里）の協力を得てヨシ紙としています。水辺を生きている場所に戻すことを目標に、「鶴殿のヨシ原」で努力を続けています（初出『なにわ大阪再発見』第7号）2004年11月）。

5. 琵琶湖におけるヨシ地とヨシ茎表面の役割

琵琶湖にすむ多くの生物たちが、ヨシ群落と密接に関係して生活していることはよく知られています。琵琶湖岸の豊かな生物群を支えるために、ヨシの茎とその表面が重要な働きをしています。茎の表面は、付着藻類の生活の場です。水中には長短のヨシの枯茎があり、いろいろな微生物が付着しています。それが豊かさの基本となる生物群です。

ヨシ地はゴミがたまってきかないから無くしてしまえという人がいますが、ある意味ではこのきたなさが琵琶湖の豊かな生物群を支え、水質を良くするために役立っているのです。プラスチックや空き缶はこまりますが、ヨシ地に打ち寄せたゴミ群は再び湖面に流れ出すことなく、そこで分解され、いろいろな生物に利用されていきます。分解しにくい物も、土の中に閉じ込められ、そこで分解され土中の生物群に利用されます。

ヨシ地は、大小さまざまな生物の生活の場です。水草、魚、水鳥などの生活の場となっています。これはヨシの生え方に変化があり、それぞれの生物が自分の体の大きさに合わせてヨシを利用しているからです。ヨシ地に変化をもたせるためには、幅は、最低30mは必要だと思っています。

⁶ 読売テレビ（2003年）で、「所さんの目がテン！」がヨシの地下茎から塩分が採れることを検証していました。ヨシが海辺に生える理由が分かりました。仕組みは未詳ですが、ヨシは地下茎で塩分を止め、地上部の葉や茎が枯れるのを防いでいたのです。

草津川南部ヨシ茎表面積 (cm²/m²)

調査日		5月 15日	6月 12日	7月 10日	8月 31日	9月 25日	10月 30日
水深 (cm ²)							
生茎	(10)	1,010	1,100	1,210	1,190	1,160	1,100
枯茎	10		2,050	1,420	2,080	3,360	
	20		4,060	2,780	3,990	6,250	
	30		6,050	4,090	5,670	8,580	
	40		7,810	5,370	7,200	10,460	
	50		9,590	6,620	8,570	11,990	
	60		10,930	7,730	9,520	12,960	
	70		12,070	8,670	10,240	13,740	

(注) 生茎は深さ 10cm 当たりの表面積を、枯茎は各水深地点までの合計を示す

表は 1979 年に調べた 1 m² 当たりのヨシの生茎および枯茎の表面積の大きさです。ヨシの茎は芽が出てから枯れるまで太さが変わらないので、1 m² 内の全ての生茎の直径を 50cm 位の高さで一度測定するだけで表面積を出すことができます。

ただし、生茎（当年茎）の表面積は平均生茎密度 40 本/m² のヨシ群落で得られた、水深 10cm 当たりの値で示しています。それゆえ、たとえば水深 50cm での生茎の全表面積は、この表の値を 5 倍すれば求めることができます。

枯茎は長短があるので、表面積は深さに比例しません。

浅い場所での枯茎の表面積は生茎の 2～3 倍になります。調査日の違いは場所の違いも意味しています。

しかし、どこでも同じような値なのは、注目しなければならないことです。生茎と枯茎の合計が、ある深さでの全表面積です。ヨシの生えられる水の深さは、最大 1m です。枯茎は時間とともに短くなり、4～5 年で消えていくと考えていますが、表から分かるように、枯茎の表面積が全体の 2/3 となっているので、単純計算では毎年 1/3 が入れ替わっていることとなります。したがってヨシ地は毎年一部を更新しながら、全体としてはいつも一定に保たれています。

これは、そこで生活する生物群にとって非常に重要なことです。生茎や枯茎の変化にしたがって付着藻類群も変化していくのだらうと思いますが、あたらしい枯茎、古い枯茎といろいろな段階の物が混在していることが、そこで生活する生物にとって必要なのです。それが人工物と全く違う点です。人工の物は老化していくだけで、更新されることはありません。

一本のヨシの茎が生まれてから消えるまでの種々の働きを、まだ人工的に作ることはできません。ヨシ地の自然の仕組みをうまく取り入れながら、より豊かな琵琶湖の将来像を描いていくことが大切であると思っています（初出『琵琶湖研究所ニュース』（滋賀県琵琶湖研究所、1988年6月））。

第5章

阿倍野区松虫通の今昔

Now and Then at Matsumushi Street of Abeno Ward, Osaka

吉村 弘 (Hiroshi YOSHIMURA)

ここに二冊の古いアルバムがあります。明治生まれの父母の、明治から昭和初めの写真の数々です。その写真の中から昔をひもといてみます。



兄弟3人の写真は戦後のもので、当時、洋館の住宅は珍しく、「洋館の坊ちゃん」と呼ばれていました。集合写真は昭和初期のものと思われます。上海にお住まいだった岡田様を自宅に迎えてのクリスマスの集いです。

母方の祖父 篠田鉄次郎は、明治から大正にかけて、安治川で「諸機械商篠田商店」を経営し、多くの従業員をかかえ、大きく鉄商を発展させました。十三に住んでいましたが、空気が良いからと阿倍野へ居を移しました。大正の初めです。



真ん中で抱かれている赤ちゃんが私の母（吉村富美子）です。明治41年3月生まれですから、その後まもなくの頃と思われます。隣が母の両親（篠田鉄次郎・とめ）です。法被姿の人達は篠田商店の従業員です。

最初、聖天山に隣接した所へ日本建築の住宅を建てて住んでいましたが、これとは別に、松虫通に御影石とレンガで洋間に暖炉という洋館を建てました。しかし、広すぎる、多くのヘビが入ってくる、という不都合があり、聖天山の家は手離し、松虫の家に住むことになりました。母は松虫の家から清明小学校に通い、人力車などで女学校に通い、娘時代を過ごしました。昭和8年に結婚し、一人娘であったため、父を家に迎えました。その後、住み続け現在に至っています。

1. 大正時代の松虫通

昔、このあたりは東成郡天王寺村と呼ばれていました。古くから松林が続き、その中に民家がわずかに点在していました。草原が広がり、久世牧場があり、乳牛や牛馬が飼われていました。桃の木も沢山あったそうです。松虫から北に向くと松林ごしに阿倍野まで見通され、高い建物は阿倍野警察署ぐらいであったと聞いています。また、阿倍野斎場の煙も見え、「焼き場の煙を吸えば結核が治る」といわれ、近くに結核の方が多く移り住んでいたそうです。

2. 昭和時代の松虫通

昭和10年頃、現在の家の前に「清交乗馬倶楽部」という馬場が出来ました。会長は町会長の吉木三郎氏をはじめ、私の父 吉村二郎など20名ほどで活動していました。

服装も当時の最先端だったようで、上着・帽子・乗馬ズボンに長靴などを着用し、運動会をしたり近くに出かけたり、遠乗りをして楽しんでいました。女性で乗馬をする人もいました。



自宅前の乗馬クラブに参加していた父（吉村二郎）が自宅を背に馬に乗った雄姿です

3. 終戦後の松虫通

戦争中は疎開していて、家は空き家になり、町会の方が管理してくれていました。焼夷弾が3発落ちましたが、隣組で消してくれ、焼けることなく残りました。

戦後しばらくは進駐軍のブラウンという方が住んでいました。家の前の道は昔のまま細い道ですが、そこにジープを止めても何の邪魔にもならない位でした。

乗馬倶楽部の跡には馬2～3頭を使った馬車の運送会社が出来て繁栄した時もありましたが、やがて自動車の時代になり、会社もなくなりました。

その後、広場は野球グラウンドとなり、まわりに柵が出来、網がはりめぐらされ、子供たちが「シーホーク」という野球チームを作り、毎日走り回っていました。当時はプロ野球の南海ホークスがあり、近くには監督の鶴岡一人氏（北畠）や選手も住んでいたようで、影響を受けていたのだと思います。その後、不法建築といわれながらも次々と家が建てられ、昔の面影はなくなりました。

4. 松虫中学校の開校

戦後の混乱の中、阿倍野区第4中学校（松虫中学が開校しました。私は中学1期生ですが、学校には何もなく、金塚小学校の講堂を仕切った教室で、机や椅子は生徒全員で大正区まで「渡し」に乗って行き、歩いて運んできました。やがて松虫通三丁目に校舎が新設されました。最初は松林の小山を平らにし、運動場の土の足りないところは私方の清明通に持っていた土地の土をくずし、生徒全員で運び、盛り上げて完成しました。当時の校長は松田先生で、後に大阪万博の役員として転勤されました。松虫中学も今年で70年となります。

5. 松虫通の道路完成

現在、昔からの松虫通は一部細いまま残っていますが、道路が広がるまでは、店もなく、都会の僻地のような所でした。戦前から計画されていた松虫通の道路が西成の岸の里から東の平野まで片側二車線で完成して35年になります。少しずつ交通量も増え、マンションや新築の家も増え、昔の様子が残るところは少なくなりました。私宅も100年を経て、松虫住人4代目となり、5代目が育ちつつあります。



岡田様ご一家、上海より送られたものです

6. メタセコイアと福田美亮先生

戦後、カリフォルニア大学のチェイニー教授の依頼で、メタセコイアをアメリカから昭和天皇のもとに持ってこられたのが福田美亮先生（金光教サンフランシスコ教会長）でした。吹上御所に初めて植えられ、その後、東は東京大学、西は大阪市立大学植物園を起点として、全国に植えられ、広がっていきました。

福田先生は、奈良県吉野郡北上山村のご出身で、大和郡山市の郡山中学を卒業後、東京帝大文学部に進まれ、卒業後、金光教教師とされました。東京教会（教会長：畑徳三郎先生）のもとで修行され、米国に渡り、サンフランシスコの日本人街で金光教の教会を開き、在米日本人や現地

のアメリカの人達に金光教の教えを説き、布教活動に邁進されました。太平洋戦争が始まり、スパイ容疑で捕えられ、抑留生活は六年に及びました。

戦後、日本難民救済に尽くされ、昭和24年9月28日から12月20日まで日本に滞在し、その間、天皇皇后両陛下にお会いになりました。



左側：昭和天皇・香淳皇后両陛下 右側：福田氏
(出所)福田真子『忘れな草 (福田美亮先生追憶)』
金光教サンフランシスコ教会、1960)

金光教にとっても最大の功労者であり、『信者の心得』、『抑留生活六年』『忘れな草』(いずれも金光教徒社)など、多くの著書を執筆され、教信徒に広く知られています。

私の父吉村二郎との出会いは、金光教を通し、同じ郡山中学の同窓であることによります。父の闘病中(昭和32年頃)には、岡山金光教本部大祭に参拝された際、大阪まで来てくださり、我が家にも寄られ、お見舞いくださいました。

福田美亮先生亡き後、奥様が教会長を務めておられましたが、交通事故でお亡くなりになり、その後ご子息が協会長をなさっています。

隣家のメタセコイアはいつ植えられたものかわかりませんが、どんどん大きくなり、近所の方から倒れたら危ない

という声や落葉の季節になると毎日山ほどのゴミになり、これ以上大きくなると困るということで木の上を切って伸びないように止めていただきました。その後空き家となり、木も草も伸び放題になり、無用心になったため家主に許可を得て町会で切りました。6~7年前です。進駐軍の将校であったブラウンさんは戦後2年ほど住んでいたそうです。戦中は家族全員奈良の本家に疎開していましたので詳しいことはわかりませんが、進駐軍の偉い方だったと聞いています。



GHQに接収された洋館の右側に植えられた
メタセコイアが見えます



自宅開業だったため診察室も次第に広げました。
室内はできるだけ昔のものを残し改装しました

第6章

三木楽器・アポロ店

Miki Gakki and Apolo Building

田中 晴美 (Harumi TANAKA)

はじめに

昭和45年の大阪万博をきっかけに音楽産業も一段と活発になり、それまで軽音楽の楽器は心齋橋店のみで店頭販売をしていたが、もっと広く普及を望む声が多くなり、有力新店舗を検討していた。その中で、阿倍野にレジャービルができるとの情報が入り、学生や若者が多い地域でもあり、出店が決まった。

出店

レコード店として、昭和47年7月に阿倍野アポロビルの2階にオープンする。店長は山本 勉で、メンバーは笠谷 (男)、南谷 (女)、女子2名からなる。

また、3階には、楽器店として、同年10月にアポロビル3階にオープンした。店長は三木佐知彦、メンバーは植野、石井、佐藤、広畑 (以上男)、他女子2名



(写真は出店時の店内)

店舗合流

昭和50年には2階のフロアに隣同士になり、楽器部にガラス張りのスタジオができる。周辺は学生が多く、客として沢山の学生が入り出て、スタジオで練習をした。そのうち、沢山の小グループバンドが出来て、コンサートの気運が高まった。そのグループを三木にちなんでミッキーポップクラブと名付けた。フロア向いは毎日放送のサテライトスタジオがあり、アリスや上田正樹、バンバンなど、後には憂歌団も来ていた。

改装

昭和60年2月、オープンから10年以上が経過し、改装が必要となった。その理由は、近來、レコードよりCDの伸びがよく、新規メディア商品に対応する為に決断された。照明を明るく、感性豊かな店舗として、遊びの空間を設ける、など。



(写真は改装時の店内)

アポロ店で生まれた、高校・中学校軽音楽倶楽部「スニーカーエイジ」の発足

昭和54年 高度成長の中、若者や学生たちにバンド熱が高まり、多くのグループや学校の (1979年) クラブ活動として軽音楽が行われるようになり、アポロ店では練習場所を提供して その情報などを発信していった。その気運が高まる中、昭和54年高校生を中心とした第1回ウイ・アー・スニーカー・エイジ発表会を天王寺区の郵便貯金会館で行った。(スニーカーエイジとは、スニーカーを履く若者たち、の総称にした)

その後、毎年夏に予選会を行い、12月にグランプリ大会を行うようになる。場所は万博公園ホールを経て現在は港区の舞洲アリーナで行われ、全国的な一大イベントとなり、今年で第38回(38年)目を数えている。



(スニーカー・エイジ・コンテストのポスターとチケット)

閉店

梅田店出店（平成4年）に続き、アメリカ村店に進出。新しい若年層を取り込むため、平成6年やむなくアポロ店を閉店し、阿倍野からアメリカ村へとシフトを変更した。

第7章

懐かしい築港

「ビーハイブ」の記憶

Osaka Bay and Memories

江見裕子 (Hiroko EMI)

昭和20年6月1日、大本営のニセの報道に私達は負け戦になろうとは思ってもいなかった。この日、大阪大空襲に築港は跡形もなく焼け落ちた。海運の基地、港の機能を潰すのに爆撃は熾烈を極めた。

その頃母は、築港の中心部で「カブト屋」という帽子屋を開いていた。当時から折れ帽を戦闘帽に仕立直しをしたり、帽子のクリーニングをして、かなり繁昌していた。父はコックで、やはり築港の数少ない洋食店で「ベニヤ」という名店で働いていた。「近々空襲がある」という情報を親しくしていた海軍軍曹から得て、5月末に母の弟の家にとりあえず避難していた。

この叔父の家は東淀川区の上新庄で、当時はいまだ麦畑が広がる郊外であったので、空襲は免れていた。あの日、二女の秀代が学徒動員のために、唯一人朝から築港に行っていた。

そしてあの空襲！ 真っ赤に焼ける空を仰ぎ、家族はひたすら秀代の無事を祈った。次の日、母は気丈な長女幸子とともに歩いて築港に行った。母は娘をそして幸子は妹を探しに行った。病の癒えぬ父と私は唯々血のにじむ思いで祈った。夜になって、真っ黒に汚れ、疲れ果てて戻った二人から現場の凄まじさを聞き、もはや秀代の死を覚悟するしかなかった。二人は、まだ熱く爛れる焼け野が原に時折起こる不発弾の炸裂を身近に感じながら、命がけで死体の顔をのぞき回ったという。中にはまだ息をしている顔、顔が焼けて判別できない顔、「助けて！」の声を振り切って、日暮れまで探し続けたのである。地獄絵図の中から二人は生きて帰ってくれた。次女秀代は、一週間後に川田さんという築港の間口運輸（今も盛大で本社を築港に置き、地域の文化活動に貢献されている）の人に助けられ、伴われて帰ってきた。放心状態で口のきけなくなっていた秀代を助けてくれたのであった。彼は「カブト屋」も「ベニヤ」も

よく知っていたから捨てておかれなかったとのこと。私達家族は、彼に神を見る思いがした。それから私たちは風呂敷包み五つが全財産で福岡県の叔父の家で終戦を迎える。戦後は日本中が頑張った。私の家族も必死で生き抜いた。

再び築港に戻ったのは昭和24年である。長女の幸子は年頃で、疎開先の福岡で結婚。昭和26年、父は「喫茶料理・ビーハイブ」を開店。文無し借金で始めた店は一年足らずで全ての借金を返していた。時は朝鮮戦争の景気で日本経済が生き返った頃である。築港は大阪港と呼び名を変えて、進駐軍、G1、外国船のマドロスさんがあふれていた。キャバレーやバーの音楽は明け方まで鳴り止まなかった。



ビーハイブ

末娘の私は当時、市岡高校に通っていて、「ビーハイブ」の店の二階は、勉強には厳しい環境であった。そのため、遅刻と授業中の居眠りには定評があり、先生に「敗戦の犠牲者や」と居直ってマークされたりもした。大阪港は大きな台風の洗礼にもめげずに発展していった。かつてはヤクザが巾を効かせていたミナトに港湾労働法の法律が定められて、その施行のもと港湾は正常化していった。世界に対応するための船会社の合併により、下請けの小会社、組と名乗る店舗も合併集約が進んでいった。時流に反したり、乗り遅れた人たちは消えていった。

今大阪港は「築港」から大きく様変わりをしている。関

西汽船は天保山から消え、海遊館としてオシャレで楽しく大勢の人が来ている。

市電は地下鉄になった。それでもミナトの街はどこか潮の匂いがする。義理人情やお世話になったという恩義を意識する日本人ならではの心遣いが底に流れているように思う。

昔からの港湾を支えてきた古い看板の会社が今も港を支えている。そして築港高野山（お寺）・住吉神社も戦前と今も変わらない。

お祭りも相撲部屋の応援も、浪曲寄席も築港時代からの

会社のキモ入りで地元の人々が集まって続いている。

一昨年他界した夫も最後までミナトの男であった。私は奈良に居を移したが、大晦日には港に碇泊している船舶が、一斉に鳴らすあの除夜の汽笛がいつも懐かしく胸によみがえってくるのである。

次女秀代を助けてくださった川口氏のお孫さんは現在、大阪港に本社を置く(株)間口の常務取締役（三代にわたり間口の人）で、今も時々盃を交し時の流れを語ったりしている。

第8章

父母に聞く戦争体験

美章園駅と爆弾

Bishoen Station and Bomb

本田 浩二 (Koji HONDA)

太平洋戦争が始まったのは、昭和16年12月8日、母が小学校6年生の時であった。女学校に進んだ母は徐々に戦争が激化し、ついに学校から被服省・平野工場へ動員され、兵隊さんのはく靴底をぬう仕事をしていた。なれない仕事で、中学3年生ぐらいの女学生にとってはとてもつらい日々だった。

一番生々しい記憶として残っているのは、昭和20年、2月中旬頃、美章園にバクダンが命中した時のことだ。その当時、母は美章園駅前に医院を営む父（ぼくの祖父）と母と二人の兄と幼い妹と小守さんとの7人で住んでいて、バクダンがおちる日の前日、母の祖母がなくなったため、当日の夜は両親とも天満に出たので、美章園の家の防空壕に入ったとたん、ものすごい音がして土地がゆれ、30センチ位飛び上がり、しばらくはショックで誰とも口がきけなかった。母は母の兄さんに、「みんな、大丈夫？」とやっとなぞねたら、皆気をとりなおし、おじさんは外に出て様子を見に行っただ。暗がりの中で大さわぎとなり、隣組の人やいろいろな人が出入りした。祖父母は、美章園バクダン投下のしらせを、天王寺駅まで帰ってきた時、はじめて知ったそう。

警報中に走っていた電車めがけて、米軍機が3発バクダンを投下したらしく、高架線の柱はバクダンでたおれ、駅の階段は、途中からふっとび、美章園駅で20数名なくなったそうである。今もあの駅の下に柱がうまっているのだそう。

その頃から、本土に空襲がはげしくなり、とうとう昭和

20年、3月14日、大阪は大空襲をうけた。しょうい弾が、雨あられのようにふって来て、市内はたちまちやけの原と化した。にげ場を失ったひとは川に飛びこみ、戦災孤児も続出した。母の友人のお母さんも、この空襲で逃げおくれ、やけあとから見つかったそう。天満にあった祖父のもう一つの医院も、この時焼けてしまい、かけつけた技工士さんが二階にあった医療機械のくずれおちるのを目の前に見て大声で泣いたそう。

昭和20年4月、母の一家は大阪の郊外にある「みと」という所へそかいした。母はそかい先から工場へ通った。その頃から大都市は毎日のように空襲をうけた。食料や衣料も配給制度だったが、日々不足して、さつまいものつるや、なんばきびの粉などもたべたこともあった。

昭和20年8月6日、広島に原子バクダンが落とされ、ついで長崎にも落ち、8月15日、天皇陛下のおことばにより戦争は終わった。

「あんな悲さんな戦争は二度とおこしてはいけないことだけれど、皆が気持ちを合わせて一つの事に当たったからこそ、苦しいこともつらいこともたえてこられたのだと思う。あの時のように、皆気持ちを合わせて、平和のためにはげんだら、きっとすばらしい世界になるだろうと思う」と母は語った。

ぼくは母の戦争体験を聞いて、つくづく平和な時代に生まれた幸せを感じ、これからもいろいろなことで、がんばらなくてはならないと思った。

(常盤小学校2年5組時代の作文)

第9章

近代大阪・戦後復興・中華料理

明洋軒を通じた地域の結びつき

Modernization of Osaka and Chinese Dishes

松浦 一郎 (Ichiro MATSUURA)

岡野 浩 (Hiroshi OKANO)

近代大阪と中国料理：川口居留地

大阪の中華料理は、近代大阪の発祥の地である西区の川口居留地から生まれたことはよく知られている(横田 2007, p.91)。しかし、洋食の自由亭も川口居留地内の梅本町から生まれたことはあまり知られていない⁷。さらに、その先には長崎、山東省や福建省、シンガポールやマレーシアなどへと遡ることができる⁸。

本章では、福井県大野市に源流を持ち、戦前には川口居留地の中国系料理店で修業を積み、戦後には阿倍野区阪南町を拠点として大阪市内や福井市内を含むネットワークを構築していった「明洋軒」の事例を中心として、食文化の発展にとって阿倍野とはどのような場所であったのか、どのような役割を果たしたのかについて検討したい。

阿倍野・明洋軒のケース

戦前、初めて職業別電話帳において「明洋軒」(此花区玉川)の存在が明らかになるのは、土井啓助氏による店舗であった(昭和9年/1934)。さらに、昭和16年(1941)の職業別電話帳には、土井啓助氏による明洋軒は北区に支店を持つだけでなく、「中華料理材料卸」を営んでいることが分かる。さらに、これ以外に、昭和16年には、前掲の土井啓助氏による北区梅田の店舗、および別の経営主体による明洋軒が①西区阿波座、②天王寺区六万本、③西区仲之、において展開されていたことが分かる。

中国人サイドからの中華料理の展開については横田(2007)などに譲るとして、戦前における日本人サイドの

中華料理の展開については、断片的な伝聞が中心にはなるが、川口居留地での経験をへて、中央卸売市場の周辺から大阪市内のキタを経て、天王寺に広がっていったとみることができる。

戦後復興と中国料理

戦後、闇市の時代において「明洋軒」の名が世に出てくるのは、天王寺区から生野区にかけての勝山通にて屋台集団としてであった。ここから、阿倍野区阪南町、後に美章園や田辺⁹、今里、松虫などに店舗を展開する道上・松浦両氏の流れと、同じく勝山通の屋台から旭区に展開する氏の流れが見て取れる。



戦後の大阪

戦後、阿倍野の阪南町1丁目と2丁目との境界に第一号店(総本店)を中心として、多くの系列店を展開した中華

⁷ 川口近辺から発祥したものにガス、市電、鉄工業、金庫商、西洋式洗濯業、牛肉商、パンと牛乳商、ポン水(ラムネ)、豚肉商、石炭商、大阪府庁や市役所などがある。

⁸ 横田(2007)では、川口・梅本町の豊楽園が最初の中華料理店であり、「長崎から福建商人」への流れが詳細に考察されている。

⁹ 田辺には道上氏の系列以外に2店舗、布施にも2店舗(いずれも戦後設立)あった。

料理店の「明洋軒」。創業者の道上三作氏は明治44年生まれ、福井県大野市の出身であった。三男のため自立する必要があり、その場所として大阪を選んだ。まずは大阪の川口居留地（現在の西区）に出て、中国人が経営する中華料理店の修業した後、天王寺区勝山通の屋台を経て、終戦後、昭和27年9月、阿倍野区阪南町2丁目で、親戚を中心とした職人（6人程度）を雇いながら、職人がそれぞれの店舗の主となって「広東料理 明洋軒」（総本店）を創業することになる。



道上三作氏（左）と松浦守氏（筆者の父）

その後は、阪南町の総本店と美章園の本店を起点として、東住吉区田辺、東成区今里、阿倍野区松虫、福井市に支店を次々とオープンさせる。福井出身の親戚関係を中心として、それ以外の職人も加えた陣営であった。今里店のメニューから、当時の状況を窺い知ることができる。



阿倍野区美章園の明洋軒本店

中華麺（ラーメン）80円、五目麺100円、
蘭州巻（玉子巻揚）280円、

菜汁（チャブ汁）180円。

メニューとしては、中国人サイドでは一般的であった「共通の名菜」は扱われなかった。その他、当初のメニューには鶏のから揚げや餃子はなく、逆に長崎の痕跡を感じる「ちゃんぽん」は存在していた。芙蓉蛋や八宝菜などは日本料理における出汁文化の影響が感じられる。「春巻」の外側は卵で巻くタイプであり、餃子の皮で巻いて油で揚げる「春巻」ではなかった¹⁰。それぞれの地元顧客の嗜好に合わせて変化（⇔中国系との差）

山東料理との関わりを見出すことは困難であり、「八角」などの山東料理で一般的な調味料は使うことはなかった。しかしながら、食用油脂として「オランダラード」を用いていたことは重要であると思われる。これは、南蛮料理（テンペロ）から発想された「天ぷら」で「ラード」が使われていた影響によるものと考えられるし、川口で発祥した業種のなかで豚肉商が含まれていたことにも関係するかもしれない。

大阪の中華料理は山東料理をベースとして、明洋軒のように広東料理と銘打って開業された店でも、ルーツは山東料理を学んだ店が多いのではないと思われる。

さらに、それぞれの立地の状況に応じた価格やメニューの改変が見られる。修業の方法については、初めの3年間は皿洗いや出前が中心であり、それ以降は、1品ずつ順に見よう見まねで担当させるというOJT方式であった。総本店（阪南町2丁目）と本店（美章園）は任意団体時代の中華料理組合の活動に参加されていた。また、独立してからは、親睦のための集まりを行っていた。

¹⁰ 難波の一芳亭の春巻は当初豚の横隔膜で巻く形であった。

御 献 立 表

(一)、麵類の部

- 一、中華 麵 百八十円
- 二、雲 香 百八十円
- 三、雲 香 麵 百二十円
- 四、又 焼 麵 百五十円
- 五、又 焼 雲 香 麵 百四十円
- 六、又 焼 雲 香 麵 百四十円
- 七、五 目 麵 百三十円
- 八、五 目 雲 香 麵 百三十円
- 九、五 目 雲 香 麵 百七十円
- 十、名物チヤンボン 百三十円
- 十一、チヤンボンワンタン 百三十円
- 十二、チヤンボンワンタンメン 百七十円
- 十三、開 う どん 百三十円
- 十四、五 目 焼 麵 百四十円
- 十五、天 津 麵 百五十円
- 十六、菜 汁 (チヤン汁) 百八十円

(一)、御飯の部

- 十七、中 華 丼 百六十円
- 十八、天 津 丼 百六十円
- 十九、焼 飯 百三十円
- 二十、五 目 焼 飯 百五十円
- 二十一、ラ イ ス 切 付 百十円

一、お飲み物の部

- 一、ビ ー ル
- 二、お 酒
- 三、コ ー ラ
- 四、サ イ ター
- 五、ジ ン ー ス

(一)、スープの部

- 〇 三、ス ト ー プ 二十円
- 〇 三、玉子スープレ 八十円
- 〇 五、五目スープレ 百円
- 〇 五、五目スープレ 八十円

一、一品料理の部

- 二六、焼 餃 子 百円
- 二六、焼 餃 子 百円
- 二八、八 宝 菜 百六十円
- 二九、野 菜 いた め 百七十円
- 三〇、焼 豚 片 百八十円
- 三一、焼 豚 片 百八十円
- 三二、焼 豚 片 百八十円
- 三三、扶 老 杖 百二十円
- 三四、古 老 肉 百二十円
- 三五、又 焼 (やまふた) 百二十円
- 三六、焼 豚 丸 (肉巻団子) 百二十円
- 三七、蘭 洲 羹 (玉子巻揚) 百八十円
- 三八、焼 豚 牛 乳 片 百八十円
- 三九、焼 豚 牛 乳 片 百八十円
- 四〇、中 華 ランチ (三品) 百五十円

一、特別料理の部

- 四一、汁 米 百五十円
- 四二、焼 米 粉 百五十円
- 四三、ト ン カ ツ 百八十円
- 四四、若 鶏 の から 揚 百八十円
- 四五、盛 り 合 せ 四百円より
- 四六、火 鍋 (ホーコー) 小千三百円 大千四百円
- 四七、醃 丸 湯 時 飯

なおテーブル料理は

前日に御相談下さい

広東料理 明 洋 軒

大阪市東成区大今里町四丁目二〇の一〇
電話 二二八三番

第10章

信太の森の自然と信太の森ふるさと館

田丸 八郎 (Hachiro TAMARU)

信太の森は歴史的にも文化的にも多くのすぐれた遺産を残してきたばかりか、自然環境においても生物多様な里山的自然環境残すところとして注目されています。

歴史的には信太千塚といった古墳群や弥生後期の竪穴住居跡があり、須恵器発祥の地としても知られており、その窯址も現存しています。その周辺には弥生時代の遺跡「池上曾根遺跡」をはじめ国の重要文化財「景初三年」銘入りの神獸鏡が発掘された国の史跡「黄金塚古墳」があります。



豊かな自然が広がる信太山丘陵

文化的には「信太の森」として清少納言の枕草子や紫式部の源氏物語にも登場し、藤原定家や和泉式部など多くの歌人に詠われ、和歌の枕詞にもなっています。その後、陰陽師安倍晴明生誕にまつわる白狐伝説で知られる「葛の葉物語」が歌舞伎、浄瑠璃で演じられてきました。

これらの文芸を生み出した背景には、今日でも里山的自然環境を残す信太山丘陵（信太の森）の自然がいかに豊かであったかということが言えます。

信太山丘陵の自然

私たちは信太山丘陵（地質学的には台地）のことを「信太の森」と呼んでいます。その裾野には熊野街道（通称：

小栗街道・小栗判官が通ったことからの呼称）があり、枕草子に詠われた頃はその街道辺りまで森が広がっていたと思われます。



大阪府最大の湿地・惣ヶ池湿地

現在、台地の斜面は住宅地となり、台地上には日本住宅公団の鶴山台団地が広がっていますが、その一角に聖神社と信太の森ふるさと館があります。団地の南側（山手）は和泉市が所有する自然公園予定地と大阪みどりのトラスト協会が管理する惣ヶ池湿地があり、さらに南側には山の谷集落と自衛隊の信太山演習場があります。

この台地は浸食により多くの谷筋を形成し、そこには湧水湿地が点在していて、サギソウやカスミサンショウウオといった絶滅の危機にある湿地性の動植物が生息する場となっており、台地部分はアカマツ、モチツツジの二次林が広がり、そこには食虫植物のコモウセンゴケ、イシモチソウやキキョウやオミナエシといった絶滅が心配される草原性の植物が生息しています。

大阪府下では絶滅危惧種が多いホットスポットの5指に入り、そのホットスポットの上位4ヶ所が金剛山など大阪府の山間部にあるのに対して市街地に囲まれた中で生物多様な自然環境が残っていることから稀な存在となっています。



草原にはキキョウやリンドウが咲きます

現在、信太山丘陵では生物多様な自然環境を維持するために、惣ヶ池湿地では大阪みどりのトラスト協会とNPO法人信太の森FANクラブにより保全活動が行われており、それに隣接する里山自然公園予定地（和泉市所有）では公民協働で保全活動が行われているほか、定期的に観察会が行われています。

ふるさと館創立に至る経緯

信太の森ふるさと館（以降「ふるさと館」）は、地元の歴史、文化、自然の発信拠点として2002年6月「鏡池史跡公園」の資料館としてオープンしました。ここでは、その施設建設に至る経緯とふるさと館15年の取組みについて紹介します。

ふるさと館は、阪和線北信太駅を最寄駅とし、信太山丘陵の一部が造成されてできた鶴山台団地に隣接し、ふるさと館設立の発端となった聖神社と接したところにあります。

白狐伝説が生まれる信太の森の中心であったのが、和泉の国5社の一つである聖神社（信太明神）です。



聖神社本殿

聖神社は、江戸時代まで現在の信太山自衛隊演習場を含めた約300ヘクタールを所有していましたが、明治に入り

その大部分を陸軍の野砲演習場として国に上知され、現在は鶴山台団地の外れにある僅かな社寺林の中に本殿があります。聖神社は、白鳳3年（674年）天武天皇の勅願により建立されたと伝えられ、現存する本殿は慶長9年（1604年）に豊臣秀頼が命じて再建させており、桃山時代の建築様式を残した国の重要文化財に指定されています。また、この社寺林に接して歌舞伎や浄瑠璃で演じられる安倍清明生誕にまつわる葛の葉物語ゆかりの鏡池（御手洗池）があり、境内には相撲神事が行われる立派な土俵も備えています。

更にこの社寺林には、近畿地方を北限とする（ブナ科マテバシイ属）の純林があり、環境庁（当時）も「緑の国勢調査」で「北限線上に400本を越える纏まった純林は学術的にも貴重」とであると評価していました。



シリブカガシ

1983年、この社寺林にテニスコート建設とシリブカガシ純林を貫通する道路建設計画が持ち上がりました。そのことを知った当時自然保護活動を行っていた人たちが「貴重なシリブカガシ林を守ろう」と「シリブカガシを守る会」（「守る会」）を立ち上げました。同時期に社寺林に隣接する鏡池の売却問題も浮上し、守る会の人たちは葛の葉物語ゆかりの池で文化的価値の高いものとして鏡池の保存運動が展開されました。

テニスコートについては、大阪府が公聴会を開催し、その結果建設を認めなかったことから道路計画も立ち消えとなりましたが、鏡池売却問題については、守る会の人たちがその池の地権者でもある和泉市を相手取り訴訟が行われました。

この裁判闘争では、葛の葉物語ゆかりの鏡池の売却計画を知った文楽、歌舞伎、落語界の著名人が「上方ばなしのよりどころ」と鏡池の保存運動に奔走し、文学者、歴史学

者、著名な作家なども巻き込んで最高裁まで争われる9年に及ぶ裁判闘争になりました。

この裁判では、文化価値の高い鏡池売却の違法性などが争われますが、一審、二審とも原告敗訴となり最高裁へ控訴されました。ところが提訴された和泉市の市長が交替したことを契機に和泉市の文化財に対する考え方が大きく変わり、和泉市が鏡池を重要な歴史遺産と認めたことから控訴は取り下げられました。



鏡池史跡公園と信太の森ふるさと館

その結果、和泉市は1997年3月22日に和泉市文化財保護条例を制定し、鏡池を和泉市の史跡第1号に指定しました。

史跡指定後、史跡保存については「守り会」の人たちの熱意も反映され、鏡池は史跡公園として改修工事が行われました。更にもその敷地に「ふるさと空間づくり」ネットワークの一つの拠点と位置づけて、葛の葉伝説にかかる資料を中心として自然、歴史、文化の展示施設が建設され、2002年6月に「信太の森ふるさと館」としてオープンしました。



ネイチャークラブ：バッタのオリンピック

信太の森ふるさと館は開設当初より学芸員1人と地域ボランティアの「協力会」により運営されています。

総合グループは受付及び管内清掃と案内を担当し、管理

グループは史跡公園内の清掃、除草などを適宜実施。研究グループは地域の歴史、文化を研究してその成果を展示し、学習グループは信太山丘陵の自然をテーマに、小中学生を対象に会員を募集し「信太山ネイチャークラブ」(月一回)を開催するほか、四季折々に信太山丘陵の自然観察会を開催しています。語り部部会は地域の民話の掘り起し、それを紙芝居にして来館児童などに語り聞かせる活動を行っています。

ふるさと館には展示室と学習室があります。展示室ではその半分を常設展示として葛の葉ゆかりの絵画、資料と信太山丘陵の古墳群から出土した土器類、信太山丘陵に棲息するオオタカをはじめとした野鳥の剥製を展示しています。展示室の半スペースでは、信太の森の自然展、写真、絵画展のほか地域の歴史展や硝子玉展、近隣小学校児童の作品展などを開催しています。

学習室では、歴史、自然、文化関係の講座が開催され、語り部の会では近隣保育園、小学校の子どもたちを招いて「紙芝居」が行われています。

葛の葉伝説など地域文化の伝承のために子ども歌舞伎が組織され、毎年秋の芸能祭で演じられていましたが、2年前から子どもの希望者がなく歌舞伎教室が開けない状況が続いています。子ども歌舞伎あつての芸能祭もそのために開催できない状況にあり、少子化の影響がここにも現れています。

地域に根差した自然や歴史、文化の発信基地として子どもたちの声が弾むふるさと館にしていくことが求められています。



ふるさと館の庭を舞台に子ども歌舞伎・葛の葉子別れの段

第11章

タンゴと喫茶文化

西田辺のチ・ケの断章

Tango and Culture of Café at Nishitanabe, Osaka

中西 顕子 (Akiko NAKANISHI)

白い壁と、フランス窓を想わせる半円形の窓、両開きの
錠戸。扉を開けると、カウンターに向かう整列した椅子、
整然と並べられた棚のコーヒーカップ。目にとび込む壁い
っぱいの、演奏家とダンスの写真。耳をとらえる音楽。そ
れらはすべてタンゴ。



チ・ケ (建て替え後) (昭和45年)

地下鉄御堂筋線西田辺駅の北東出口から辻ひとつ、東に
入って突き当たるとその北隣に、珈琲専門店チ・ケがある。
珈琲とタンゴしかないこの店を始めたのは私の父、中西俊
二 (昭和34年5月27日)。そして一緒に守り通した母、
中西泉子。「que tal? Bien?」(どう? 元気?)

「Nakanishi! Qué tal? Bien? (やあ中西?)

「Mucho tiempo」(久しぶり) 「ジョ/コンシエルト/ト
ド/ミ・カサ」(私はコンサートを見てから、皆さんを私の
自宅に呼びたい) Tú casa? (あなたのお宅に?) Sí, sí. (は
いはい。)

コンサートの楽屋を訪ねると、身振りを交えたカタコト
とアブラソ(abrazo 抱擁)、それに満面の笑顔で、公演後の
約束は決まり、アンコールも済み、父は楽屋へ。車を出し
てくれるお友達と一緒に。長いお付き合いのタンゴ好きの
お客さんは間違い無く彼らをホテルまで送りとどけてくれ
た。

母と私はひと足さきに戻り、セッティング。朝の間にデ
リカテッセンで買い求めたローストビーフにサラダ、アッ
プルパイにバゲット。セルベサも少し。皆さんが着くころ
店には営業中と同じようにタンゴが流れ、コーヒーの香り
が漂う。

やがて車の音。はじめて訪れた人たちはドアを開いた途
端、驚いたように目をみはる。何度目かの人は、懐かしそ
うに。そして寛いでひとときを共にする。壁のメニューに
は『タンゴ楽団来日公演のおりは臨休の時もあります』の
一文が添えられている。

「彼らがせっかく地球を半周して、はるばる演奏しに来て
くれるのに聴きに行かないでどうする」と父はいう。大阪
市内で昼夜二公演あれば必ず両方。連日はもちろん。1987
年のタンゴ・アルゼンチーノ、1989年の続・タンゴ・アル
ゼンチーノ大阪公演は六日間で8公演すべて。毎日同じメ
ニューが用意されるディナーショー (1987年のホテルプラ
ザでのセステート・タンゴのディナーショー) できえ初日
から最終日まで通しで行き、ホテルのほうが(おなじ食事な
のにたいして)気の毒がってくれたが「(食べに行くのでは
なく)ショーを観に行くんやから」と連日彼らの生の演奏
に浸れることを喜んだ。大阪府下、神戸、京都、和歌山、
奈良、大津、姫路、岡山、名古屋、東京、常石……。



チ・ケでの談笑 (カルロス・ガルシアとタンゴ・オール・ス
ターズのメンバーと)

ただし、追っ掛けは父の専売特許。もちろん母もタンゴ好き（誰よりもエンリケ・マリオ・フランチェニの大ファンであった）で、年に何度かはコンサートのために臨時休業する。けれど、「あんまり休み過ぎるから.....(パパだけ行ってらっしゃい)」という。そうして母はチ・ケのコーヒーを飲もうと足を運んでくださる方に「せっかく来たのに.....」とならぬように店を守る。

母は父のことを『コーヒーの神さま』といい、自身を『パパに純粋培養された職人』といていた。「いつか追い越してやる!とってる」と。時たま「(コーヒーを)点てた数だけは負けてない」とも。これはきっと父が、コンサートに出かけたりアルゼンチンに行ったりあるいは他にもいろいろなこと、母が店を守っていた時間の長さを言っているのだと思う。それを父は「そおか」と笑いながら聞いていた。



コーヒーと父（ミナミの店）

けれど、実際にコーヒーを淹れた数云々ということになると父には十年以上の修業時代がある。昭和21年からチ・ケを開店するすこし前まで、アベノやミナミで働いた。それらの店についてMJB珈琲店の秋山悟堂さんが昭和43年に出された『喫茶と喫茶店』(株)しなの出版にこんなやり取りが載っている。

中西 私も店をやる前に今はもう無くなりましたがアベノに在った「ドン」やミナミの「カミン」や「やなぎ」などでバーテンもしているいろいろ研究してきましたが――。

秋山 ほう、なかなかしつかりしたお店におられたんですね。

繁盛店だったのだろう。当時はかなり忙しかったときいている。一日中コーヒーを淹れて、そして、店が終わって

から夜中に、もうお店で使えない粉を使ってあれこれ研究したとも。

開店した頃の店の前は殆ど人が通らなかったと聞いたことがある。その頃の写真がないかな、と思って開けた箱の中に一枚の全紙サイズの地図を発見(写真は見あたらず)。

『最新大阪精図』地理調査所発行25000分の1地形図によると書かれている。発行所も発行年も見あたらない。地図は大阪市全域が収められ、裏面には名所や路線図、大阪みやげなどと、昭和25年10月の国勢調査による大阪市人口表が載っている。地図をながめていると、地下鉄が西田辺終点になっていることに気付く。そんなことを、丁度みえた常連さんに話す。すると高校生の頃はチ・ケに入り浸っていたという昭和22年生まれのその方が、「店を始めた頃、西田辺は終点で...とママからきかされたわ。そういえば、ぼく小さい頃は地下鉄とちやうかってん。地面を掘ってあったからな、電車みえとったんや。そのあとあびこまでは地下掘っていったけどな。西田辺はあとで道路ふたしてん」。

その話しを今度は近くにお住まいのやはり開店当時からお客さんに話すと、「むかし長池はつながっててな、長池小学校の横のグラウンドのあたりも埋めてしまったんや。いつの間にか南港通りで呼ぶよおになったあの道路のとも橋が架かっててん。大領池いうのもあったしな」という。確かにこの地図には長池の橋も大領池もあるし股ヶ池だって大きい。

これまでもいろいろな人から「地下」ではなかった地下鉄のはなしは聞いていた。そこで少し調べてみると、1951年(昭和26年)12月に天王寺～昭和町間、翌1952年10月に昭和町～西田辺間を開業。戦前に掘り始め、資材不足で中断していたのが堀割りのようなかたちで整備される。その昭和町～西田辺は1958年(昭和33年)11月に全て埋められる。西田辺からあびこまではトンネルを掘って、1960年(昭和35年)7月に開業、1964年にはあびこ筋が全通したという。

チ・ケがオープンした昭和34年、西田辺が終着駅であったその年には長居の競馬場が廃止される。3年後の昭和37年には競輪場も廃止になり、長居公園が整備されていく。

1951年(昭和26) 天王寺～昭和町開通
 1952年 昭和町～西田辺開通
 1958年 昭和町～西田辺 全て埋められる
 1959年 チ・ケ開業 長居競馬場廃止
 1960年 西田辺～あびこ開通
 1962年 長居競輪場廃止 公園整備へ
 1964年 あびこ筋全通

※ 1965年版 続・大阪味覚地図 阿倍野区昭和町西5丁目
 ※ 1966年版 大阪味覚地図・南 阿倍野区昭和町中5丁目13
 ※ 1967年版 大阪味覚地図・南 阿倍野区長池町21-14

上の年表の※は創元社発行の毎年改訂して出版されていた味覚案内の本のタイトルとそこに書かれたチ・ケの住所で、この三年間毎年変わっている。

そして、本文にはこう書かれている。「西田辺と言えば開けた開けたと言ってもまだ大阪の場末の新開地、地下鉄の駅を挟んで十軒以上の喫茶店がひしめいているがその中であって、誇張して言えば宛然群鶏の一鶴の存在である」。

「それにしても、西田辺みたいな辺境の地(?)で誇り高くコーヒーを献てるマスターは立派だと言うほかはない」。

「場末の新開地」で「辺境の地」。母が幼い頃、郊外だった(だからこそ母の両親が堀江のほうから引っ越して来た)西田辺周辺がどんどん賑やかになっていくだろう。

郊外が新開地へと姿をかえていく頃、海外に渡航することも自由化される。1963年に業務目的、翌1964年には観光目的の渡航が年間500米ドルまでの持ち出し制限付きで一人年一回可能になる。「コーヒー屋と言う限りは大地に根をおろしているコーヒーの木を見てこんど(見てこなくては)」。



オメロ・マンシのお墓

そして1967年、父は駐日エル・サルバドル大使館、エル・サルバドル珈琲連合主催の1967年度エル・サルバドル・コーヒー視察団に参加する。25泊26日エル・サルバドル、グアテマラ、メキシコ、米国。だが父は10日目にパナマからブエノスアイレスに向かい19日目にロスアンゼルスで合流している。「せっかく近くまで行くからちょっと足を延ばしてブエノスに寄って来る」。



7月9日 ヌエベ・デ・フリオ大通りをのぞむ
 ミロ・ドーマンの自宅で、ミロ・ドーマン氏と父

それが一度目で、二度目はアルマンド・ポンティエルさんのお嬢さんの結婚式だった。それは1970年に現在と同じように有効期間中に何回でも出入国できる数次旅券が発給されるようになってやっと五年経った1974年。ある日、ポンティエルさんから結婚式の招待状が届いたのだ。「お祝い持って行かないといけない!」

二回とも本当にたくさんの方々から歓待して頂いたという。



父からのレクチャー

第12章

阿倍野の文化創造性

都市における市民知の文化編集分析

Stylizing, Improvisation and Rhythm in Abeno, Osaka: Sources of Urban Creativity

岡野 浩 (Hiroshi OKANO)

1. 序

これまで、主に大阪市立大学・都市研究プラザ発行によるレポートシリーズにおいて、都市と地域の文化を発展させ、生態系、社会、人々との調和を目指す都市・地域の立案・実施・評価（＝デザインすること：Designing）を意味する「社会デザイン」というコンセプトを中心として分析した（岡野 2012, 2013, 2014a,b, 2016）。そこでは、ヒトやモノ、コトや記憶をどのように編集するに注目し、動詞を用いてそれらの創造的組み合わせを見出すことの重要性を主張するとともに、「包摂する（包容力）」・「バランスをはかる」・「俊敏性」（パッチングする）という三つの動詞と創造性との関係性から検討した。

以下では、各章でなされた大阪・阿倍野に関する歴史や実例を用いながら阿倍野の創造性について接近したい。

2. 社会的持続性と述語的包摂

(1) 「引き裂かれ」への対応

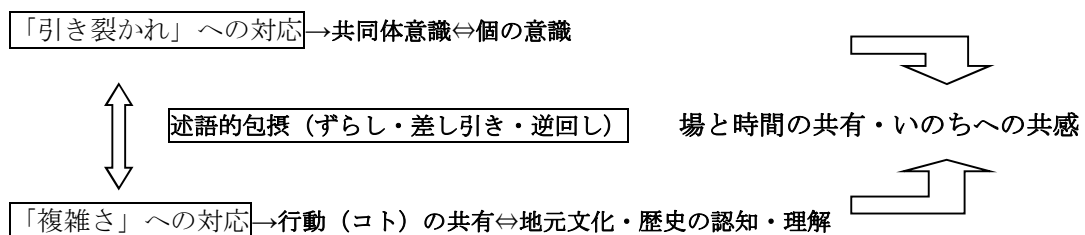
伊丹(1991)は、一人の人間が持っている三つの側面として、「消費者としてのヒト」「所得者としてのヒト」「共同体生活者・文化者としてのヒト」とに分けたうえで、グローバリゼーションによって、国と国との間、ひとつの国の中、ひとりの人間の中、のそれぞれにおいて「引き裂かれ」が生じることを指摘する。その上で、重要な点は国際的にひ

ろがる事業活動の「複雑さ」と、それがもたらす「引き裂かれ」にどう対処するかにあるとし、「グローバル統合」の必要性とその困難性を強調した。これに対して、岡野(2012)では、グローバル化による個人の「引き裂かれ」やグローバルガバナンスと公共空間についての議論からコスモポリタニズムの重要性について触れ、文化創造とビジネスとの関係性、グローバル都市のガバナンス（「共治」）のあり方、創造的でダイナミックな都市経営システムについて検討した（岡野,2009c, Okano & Samson, 2010, 岡野 2012a,b）。

共同体意識とともに、コスモポリタンとしての「個の意識」を掘り下げることは重要である。個人の「引き裂かれ」は、「グローバル」という折衷的なあり方ではなく、コスモポリタニズム（国際感覚）に基づきつつ、公共空間の4つの象限のポジショニングを広げることが重要であること、また、これまでのトップダウン的なガバナンスから脱却し、多様なステークホルダーによる社会レベルのガバナンスが必要となることを主張した。

伊丹(1991)では「共同体生活者・文化者」と一括りにされてきたが、近年、「共同体生活者」と「文化者」との間の「引き裂かれ」が顕著になってきた。自己の文化を長期的に理解し、共同体のなかで生活しているという実感を持ってなくなっているのである。地域の文化・歴史を感じ取り、理解し、人々と共有することを推進する試みが必要である。

述語的包摂による引き裂かれ・複雑性へ対応



(3) 文化編集と述語的包摂

社会における様々な行動様式や文化遺産、人々の営みなどが時代の流れの中で変容を加えられ、元々別のものではあったものが重なったり、複数あったものが他のものに埋没したり、まったく新たなものが突如として生まれたりすることを「文化編集」と呼んだ(岡野 2012a,b)。

日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながら領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶け合いなじみ合っ」てきた(藤原 2008)。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかった。

ヒトが重要なアクター(行為者)であることはいまでもない。ただ、「誰がやったか」という問題を特定するのではなく、述語に焦点を当てることによって、ある特定の集団や人々が排除されるのを避け、ものに籠められた想いや言葉、そして言葉にならない想いに焦点を当てることによって、そこから抜け出てくるものが浮かび上がるのである。ここでは、モノが重要な行為者であり、記憶やコトを動詞で捉えること(述語的包摂)によって、主体の議論を弱め、ともに形成してきたもの(共創のプロセス)を出土させることを目指したいのである¹¹。ヒト・モノ・コトとの関係性のみならず、それらの一体化を想定しながら、世代間をつなぐモノのエージェンシー化と捉えるのである¹²(図表3)。

¹¹ 鎌田(2010)は、それぞれの民族には、固有の言語体系ないし言語文化にとって、一語彙として使用頻度が高く、文法的にも概念的(意味論的)にも核(心)になる「根源語」が存在するとし、「モノ」(物・者)と「コト」(事)をあげている。日本語の「モノ」は物質的・人間的・霊的の三つの次元があり、その三層一体的な非二元論的思考の持つ創造性や可能性を探求すべきことを主張する。

¹² この思考の基礎にはアクター・ネットワーク理論(ANT)がある。ANTは、1980年代後半からフランスのM. カロンとB. ラトゥール、イギリスのJ. ローが中心となって発展させた理論であった(Amin & Cohendet 2004)。ANTの方法論的な特徴として、研究の初期段階から一切の前提を置かない点があげられる。ANTは西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギー的区別を超越しようとしていることにある。いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。こうした視点からすれば、内的意図を持ち合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との区別は単なるイデオロギーにすぎないとし、アクター(行為者)は近代的な人間主体を示すアクターではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェ

3. 文化編集による都市創造性プラットフォーム

(1) 文化の重層性とアーキタイプス(原型・かくれた形)

都市の創造性¹³を増進させるためのものが文化編集である。加藤ほか(2004)において、日本文化のあらゆる領域に成立した歴史発展の型として、新しいものが受容される場合、新旧の交替となっていくよりは、古いものに新しいものが加えられるという発展の型が原則をなしているとする。そして、日本人の世界観の歴史的な変遷は、多くの外来思想の浸透によってよりも、むしろ、具体的な感情生活の深層に働くところの土着の世界観の執拗な持続と、そのために繰り返された外来の大系の『日本化』によって特徴づけられるとする。

すなわち、土砂が堆積することにより地層が形成されるように、様々な異なる文化が堆積し、積み重なっていく「重層的な文化の地層」が出来上がってくるとしながらも、深層に働く世界観は「執拗低音」のように持続してきたのであるという。これを「かくれた形」として取り上げる丸山(2004)によれば、歴史が歴史形成に参加する人格の決定の積み重ねによって創り出されるものではなく、非人格的な、大きな時間の流れの「いきおい」として、「おのずからなる」ものと考えられる歴史観を問題にしている。すなわち、無窮の連続性、血脈の系譜的連続における無窮性が、日本人の歴史意識の「古層」として、永遠者の位置をしめてきたという¹⁴。「ことあげられないモノ」、「隠されているモノ」などを掘り起す必要があるといえよう¹⁵。

ンシー(行為能力)であるアクタント(actant)とみなされることによって、ヒトとモノの結合からエージェンシー(行為能力)が生まれ、アクター・ネットワークに分散されていると考える。

¹³ 創造都市の概念はLaundry(2000)、Florida(2002)などを嚆矢とするが、創造性そのものについてはそれまでも重要なテーマであった。たとえばde Bono(1970)、西堀(1990)などがある。さらに、都市の創造性についての最近の論考としてはCohendet, et al.(2010)、Okano and Samson(2010)、Heraud (2011)、Stolarick et al. (2010)などがある。

¹⁴ 丸山氏が「原型」という用語を諦め、地質学的比喩としての「古層」、音楽的比喩としての「執拗低音」を使ったかについては丸山(2004)を参照(144頁)。「かりにこの比喩を用いて日本思想史を見ると、主旋律は圧倒的に大陸から来た、また明治以後はヨーロッパから来た外来思想です。けれどもそれがそのままひびかないで、低音部に執拗に繰り返される一定の音型によってモディファイされ、それとまざり合って響く。そしてその低音音型はオスティナートといわれるように執拗に繰り返し登場する。ゲネラル・バスのようにただ持続して低声部の和音をひいているのではない。ある場合には国学の場合のように表面に隆起してメロディとしてはっきり聞き取れ、ある場合には異質の主旋律に押されて輪郭が定かではないほど『底』にもぐってしまう」。

¹⁵ 日本の経営システム、ひいては日本企業の行動様式の四つの

本章では、地層を断面から切ったり、はがしたり、パイプを打ち込んだりしながら、地層の状況を見つつ、地層の関連性・関係性を掘り起こす必要があると考えたい。ここには個人・個別レベルでの重層性も含まれるが、組織間や企業間、さらには社会レベルでのそれを含むものと考えたい。内包される多様性や多義性を含んだ概念として重層性を中心に捉えたいのである¹⁶ (岡野 2004)。さらに、様々な断層面¹⁷の時間と空間を超えた関連性を読み解くことが必要であろう。断層面の重なり具合に着目し、それらの断層面がどのような複合的な意味内容を持っているか、さらには、その意味内容がいかなるプロセスで単一の意味内容に収斂させられてしまうか、という問題点が提示される (岡野 2006a, 2008)。

さらに、日本的機能別管理、現場・現物主義、ボランティア性の強調、源流管理という日本の経営システムの特質についても、これらの特質を相互に関連させることによって、テクノロジーとしての制度を構成するプロセスの記述が必要となるのであって、このプロセスの変化・変容の記述が新たな「文化史」となる (岡野 2002, 2003)。

フーコー(1969)は、言説的実践の断層を切り離し、実践が生成され変形される法則の定式化を行ったうえで、様々な知の体系の間の不連続面を「出土」させ、これまで見えなかったものを見えるように変換する(可視性の創造)手法を「考古学」とよぶ。さらに、ある特定の主張・概念・真理がいかなるものであるかを分析し、連続的な「事実」の連鎖としての系譜において本質や根源的統一性などは存在しない、とする彼独自の「系譜学」を提唱した(岡野 1995)。これはある意味において、重層的な空間を設定し、その時系列での非連続な部分に焦点を当て、なぜそれがそこに関係性として存在しているのかを様々な「言説」(実践よりも)を通じて明らかにするところにフーコーの真骨頂があった。『ある「空間がどのようにして「歴史」の一部をなしていたかを理解するこ

特質を「動詞化」によって検討すれば、日本の経営システムやその底流にある日本の行動様式の端緒的な在り様、すなわちアーキタイプが見て取れるであろう。

¹⁶ ここで重要な概念は「社会的持続性」である。これは社会の「質」を反映し、自然と社会との関係を示すものとして捉えられ、社会における諸関係および経済活動やボランティアなど、様々な実践を通じて仲介されるものであり、人々の欲求を満たし、自然とその再生産的な能力が長年にわたり保持され、社会的正義や人々の尊厳や参画が満たされる方法に応じて形成される(Littig & Grief3ler, 2005)。

¹⁷ これについてはフーコーの歴史認識との親近性がある。詳しくは岡野(1995)を参照。

とが重要』というのはそのように理解すべきであろう。問題は、言説に焦点を当てることの是非である。本章では、「言説」を詮索しつつも、「実践」(レイブとウェンガーのいう)を遡上に乗せることとしたい。

(2) 文化編集の射程：編集行為と動詞化

様々な重層性を観察しながら各層の断層面の重なり具合に注目し、それを解体したり、別の層とそこから離れた別の層とを接合したりするようなことをここでは「文化編集」と呼ぶ。ANTでの「翻訳」の箇所でも検討したように、ある「翻訳」が失敗したときにはさらなる「翻訳」のため、既に安定化されたブラックボックスを開き、アクターの立ち現われ方が変幻自在に変容するプロセスを表現する概念として、さらに、丸山氏の「非人格的な、大きな時間の流れの「いきおい」として、「おのずからなる」ものと考えられる歴史観」に関わるものとして、「翻訳」を捉えたいのである。

岡野(2009a,b)では、製品の機能とコストとの関数として価値をとらえ、製品の改善を行っていくための手法であるVE (value engineering)を例にあげ、顧客が望む製品やサービスの「機能」を、静的な「名詞」としてとらえるのではなく、目的語と動詞とに分解して動的に捉え直すことによって、その静的な名詞が動きのある「改善行動」を示す「行動」(action)に変換させることができるとした。それらの行動をクロスファンクショナルな活動に変換させることにより、分業体制の高度化が図られる可能性があるといえよう。戦略から戦略的行動へのシフトがこれである。

これにより、VEの本質は、製品やサービスの機能を目的語と動詞に分けることによって、モノをコトに変換することを通じ、設計者ほかの開発担当者の過去の経験で潜在意識のなかに埋め込まれていたものを引き出し、そこにはいない、不可視の担当者や潜在顧客などとのコミュニケーションを促進させることにあることが分かる。

ここでは、コトがモノに埋め込まれ、動きを触発するものとして「想い」を捉えること、つまり、異質のものを共存させた、日本における重層的な文化的特質を表すものとして捉えたい。

あわせ・かさね：文化編集の典型

日本の「方法」に焦点を当て、あらゆる行為を「編集行為」に接近するものとして松岡(2006)がある。「日本の方法ではなく、日本という方法」という視点から、松岡は、日本文化形成の方法(編集法)に焦点を当て、二項

対立でなく二項同体（述語的包摂ともいう）として考えること、および言挙げされていない本質部分を暴き出そうとした。すなわち、日本という方法の特徴は、主語的ではなく述語的に繋げて行ったことであり、文化を抽出する方法として、「おもかげ・うつろい」（記憶し、投影する）あるいは「あわせ・かさね・きそい・そろえ」（並立させ、重ねて、競い合わせて、揃える）という独特の手法が強く反映されていると主張する。さらに、おもかげ（イメージネーション）・うつろい（移っていく、変化していく）、空・虚・洞の文化、想い・記憶の集積物として祈り¹⁸など、日本の編集との関わりから特質を示すのである。

また、この点は、主語を省略する日本語の特性にも関連するであろう。「てりむくり」は合わせや重ねの象徴である。唐破風といいながらも、日本独自の様式である（立岩 2000）。アワセやカサネは習合ではなく、混淆であることに留意すべきであろう。ズラシのほうがその特質を端的に表している。



てりむくり屋根

茅原（1999）は、新古今和歌集の選者である藤原家隆¹⁹が和歌の中に使った「心の果」や「しのぶの奥」という心奥表現²⁰に着目し、この表現の発生や流布、その特質を調査するとともに、当時の歌壇である「六百番歌合」でこうした表現が用いられた時代背景や、いかなる現象が生じていたかについて考察する。その過程のなかで、当時（建久4年ごろ、いわゆる新古今の時代）、観念的な空間認識を伴った「心の底」という語が流行し、「心の果」や「心の奥」、「しのぶの奥」などの広がりといかなる関係にあったのかを追求した。その背景には西行の入寂したことにあり、西行和歌の本質が仏教的な実相観に支えられた自己と自然との希求にあり、その根底に「観想」の態度が見られることを指摘する。さらに、西行の

¹⁸ 藤原(2008)は、重ねは日本文化の「基本作法」とであると主張する。

¹⁹ 彼は四天王寺周辺に「夕陽丘」の語源ともなった「夕陽庵」(せきようあん)を建てた。

²⁰ 心の内奥を、空間的な奥行や厚みとして表現しようとするものを示す。

和歌で象徴的に出てくる「心の月」と「心の空」は奥行を示す「果」・「奥」・「底」・「末」・「道」などの語を伴い、心の内部を覗くという密教的な月輪観を表象したものであるとした。

ずらし

性質の異なる二つ（以上）のものを重合させる「あわせ」や「かさね」とはまったく異なる文化編集の例として「ずらし」という手法がある。すなわち、視点や立ち位置、時代認識や時点を前後にずらすことによって、これまでとは異なるスペース（実体的・バーチャルの双方）を創り出す手法である。

Okano(2008)では、「あわせ・かさね・きそい・そろえ」という動詞に加えて、この「ずらし」によって日本的管理会計の歴史的特質を解釈しようと試みた。つまり製品開発段階におけるコストマネジメントの技法である原価企画をとりあげ、生産段階では原単位管理を中心とした実体管理や物量次元（課業レベル）を行い、原価管理の主軸としては生産段階から設計段階に時期を「ずらし」ながら、新モデルと旧モデルとの仕様の原単位の差異のみを金額換算する差額原価法を用いて成果をあげた。

佐々木(2010)は、美学の領域から「ずらし」の想像力について和歌を取り上げながら考察する。「おもかげ」「なごり」「なつかしさ」などは日本人にとって「詩」を感じる言葉であり、その多くは文化的な環境のなかで生まれ、個々の文化に固有の感性が生まれるとする。その上で、日本的感性の特性である「ずらし」と「触覚性」を明らかにした。

さらに、山西（2008）は、多文化社会コーディネーターの形成に関連させ、異なったものを「ずらし」ながら繋げていく能力の重要性を掲げている。行政・企業、学校・市民団体などの組織、教育・福祉、医療などの領域などが従来持っていた枠を変革するキーワードとして「ずらし」を重視する。「ずらし」とは読み替えであるとともに、関連させたものとして想いや偲びがそこに存在するといえる。

清水(2009)は、京都の空間意匠として、分けて繋ぐ、見立てる、巡る、奥へ、くずす・ずらす、組む、間をとる、透ける、光と闇、水を生かす、生けどる、墨絵の世界、といった動詞を中心としたコンセプトに分けた。とりわけ、「ずらし」によって新たなイメージが掻き立てられることを指摘し、建物単体ではなく、木々の緑と合わさった周辺環境の中でその建物を見ると、単体では作りえない空間づくりの巧みさ美を感じるとしている。建物

はシンメトリーではないが、別の要素でバランスを取りながら大きな緊張感を表出しているとする²¹。

「差し引き」と「逆回し」(リバース)

「差し引き」とは、龍安寺の石庭など禅宗の庭園の作法に端的にみられるように、重要なもの(石庭の場合は水)を差し引くことによって、逆にそれを想起させる手法である。すなわち、浮かび上がらせる一つの技法として、極端に沈ませるわけであり、水を徹底的に排除することによって、逆に水を浮かび上がらせる効果もたらされる。この「差し引き」は欧米で理解を得ることは難しい面もあるものの、この理解を促すことによってブレークスルーが起こり、日本文化のさらなる理解が進むことは間違いない。

また、「リバースモード」といういい方も重要であろう。テープレコーダーの逆回転を思い浮かべれば理解できる。「逆説」の連続性を続けることによって、強烈な順説を生来させるということである。原価企画は欧米では、「リバース・カリキュレーション」(逆計算)といわれているが、市場で顧客から評価された価格が製品開発段階での目標価格の計算するための出発点であることを想起すべきである(岡野 2006a,b)。

(3) シンクレティズム: 習合と補完

シンクレティズムとは、異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異質な神格や教義が混在・融合して一つ

²¹ また、自動車に竹による日本の伝統を埋め込み、職人の手作業を埋め込んだ事例として Lexus の CT200h がある。日本を象徴する素材であり、工芸品の材料とされることが多い「竹」がパネルに採用された。3年で成長し伐採でき、環境に優しい素材である竹はハイブリッドカーにふさわしい素材である。縦に裂き、重ねることで水平な直線模様を浮かび上がらせるとともに、塗装を施さずに「いぶす」ことで自然の風合いを表現しようとした。

さらに、漆器の表面のホコリを除去し、滑らかで艶を出すための伝統技法である「水研ぎ」という手法を車体の塗装面に用いた。漆を塗り、水研ぎを施し、その上に漆を塗る工程を繰り返すことで、漆器が日常品としての器から伝統工芸品に昇華される。また、塗装面を6層にして、噴射口の強い遠心力によって塗料を微粒子化し、きめ細かく塗ることで、色むらを最小限に抑えた。ここでチーフデザイナーが重視したのは、「正統派で本質的価値をベースにした、新しい価値観」を顧客に感じてもらうことであるが、これは日本の文化編集技法である「合わせ」や「重ね」を用いながらも、「ずらし」が埋め込まれているといえる。また、周囲の自然や素材を尊重しながら、そこに調和する美を獲得するための試みともいえ、背景の山や木を使いながら、庭園そのものには石や砂を用い、自然美を引き立たせる文化操作手法を用いた、「枯山水方式」と共通したものといえよう。

の宗教体系をなしている場合や、同一社会に複数の宗教体系が併存し人々が状況に応じて関与する場合などがある。

シンクレティズムは折衷主義ともされてきたが、混合という意味の「折衷」ではない。二つのものが外見上は合体していると見えたとしても、両者は区別されながら、保持・保存されること、区別されながらも併存しているのである。そのシンボルが「唐破風」の屋根であり、神社や寺院に共通して見られながらも、それをくぐって中に入れば、まったく異なった世界が広がっている。文字通り「唐」を「破る」ものであり、神仏とも共通している意味はいかなるものであろうか。

山折(1983)は、近代社会で主流になってきた「われ」という意識的自我は究極的な人間の根拠といえるかという問いを發する。その上で、西田幾多郎による「自己とか自我、主体性を否定し、そうしたものを成立させている根元的な場所²²の優位性を主張する「絶対無」の視点を援用する。そして、自我を支える母胎としての共同体や無意識の領域、ヒトの生命を大きく押しつむ自然環境というものから示される「場所」の復権を示す。さらに、この「無の場所」という考え方がわが国の伝統的な神々の在り方、すなわち、自己の存在のあかしを主張せず、森や山のような自然のふところ深く、幽暗の「場所」にひたすら鎮まりかえるという固有の伝承を残してくれていると主張する。

これに対して、藤原(2008)は、日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながらそれぞれ分をわきまえ領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶け合いなじみ合っ」てきたと述べる。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あくそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかったと主張する。

明治維新以降、政府による神仏分離や国家神道の成立などの史実はあるものの、庶民レベルにおける神と仏との関わり方、すなわち、日常生活に根差した習合と分離の在りようを見れば、藤原説の正しさを頷くことができる。

とりわけ神仏の補完関係を主張するのは末木(2006)で

²² 場所とは、われわれヒトの意識や判断が成立する根元的な場所のことを示す。

ある。すなわち、日々の生活のなかで、仏教だけでは解決のつかない問題があり、実質的に神道がその役割を果たしてきたことを受け止めながら、神仏関係を考える必要性を説く。

また、これまで否定的な意味合いで使われることの多かったシンクレティズムを、ここでは積極的な意味合いで取り上げることを目指している（Stewart and Shaw 1994）。井上(2011)も指摘するように、シンクレティズム（やハイブリディティ）という言葉によって「文化」や「宗教」が隠喩的に語られると、人々の日常の営みが見えなくなる可能性が高くなる。

鎌田（2009）は、モノとは物質性としての「物」から人間性としての「者」を経て、霊性としての霊（もの）にまで至る多次的なグラデーションを有するものであり、モノを知り、モノを使い、モノを食い、モノを語る人間の営みの総体を探求する学問を「モノ学」と称している²³。

（4）文化編集をベースとした都市創造性

「制度」と人々の活動との「双方向性」の歴史（連続性と非連続性）を記述するためには、単に経済活動における「事実」の記録・報告のための中立的な装置として「制度」を捉えるのではなく、今日われわれが生活している世界や社会的現実の類型、企業や個人に開かれた選択肢を見出す方法、多様な活動やプロセスを管理し組織化する方法、他人や自分自身を統治する方法などに影響を及ぼす一連の「実践」²⁴として理解すべきである（岡野

²³ これに関連して、岡野(1995)では、ヨハネ福音書の冒頭にある「はじめにロゴスありき」のロゴスを「言葉と行いの未分離の状態」であることを指摘した。はじめにコトありきであり、ロゴスは言葉と行いの結びついたモノ・コトの集合体であると理解したい。

²⁴ 実務についてド・セルトーは次のように述べる。すなわち、「こうした『モノのやり方』は、幾千もの実践をつくりなしており、そうした実践をとおして使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間をふたたびわがものにするのである。それらが提起する問題は、フーコーがあつた問題と似てもいるし、またその逆である。似ているというのは、数々のテククラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の『細部』にかかわる多数の『戦術』を駆使してその構造の働きかたをそらしてしまうような、なかま微生物にも似たもろもろの操作を明るみに出すことが問題だからである。また、逆だというのは、秩序の暴力がいかんとして規律化のテクノロジーに変化していくかをあきらかにするのはもはや問題ではなく、さまざまな集団や個人が、これからも『監視』の網の目のなかでことらわれ続けながら、そこで発揮する創造性、そこそこに散らばり、戦術的で、ブローラー・ジュにたけたその創造性がいったいいかなる隠密形態をとっているのか、それを掘り起こすことが問題だからだ。消費者たちが発揮するこうした策略と手続きは、ついには反規律の網の目を形成していく。それこそ本書の主題である」（ド・

2008,2009a,b)²⁵。

「実践の歴史」を叙述するためには、社会史や文化史の様々なアプローチからの知見を受容しなければならないこと、とりわけ、「文化」は個人や集団が創り出し、また享受するものであり、創り手、文化財、およびそれを享受するものの三者の相互関係に配慮しつつ文化の発展を追跡するのであるが、それが生み出された社会のありかたと切り離して論ずることはできない（阿部・西垣 2002）。ここにおいて、「創り出す」アクターと「享受する」アクターとのコミュニケーションが緊要点となる。文化編集はこの局面に作用するのであり、「翻訳」によって従来含められることのなかったアクターが含められ、アクター間の役割が変わるのであり、「翻訳」の中身が文化編集であるといえる。

さらに、経営手法は計算「実践」の制度化された「構築物」として理解され、経済的現実を映し出す「鏡」（技法）としてではなく、現実を構築する「テクノロジー」であると認識しながら、各自が持っている知識、場の認識、および社会が「当然のこととしている」認識によって制度が「社会的に構成される」とみなされるが、どのように構成されるかは状況依存的であるといえる。こうしたプロセスの歴史的記述についても、上述した特質を相互に関連させることによって、主体的なテクノロジーを構成するプロセスの記述が必要となるのであって、このプロセスの記述そのものが「新たな歴史」となる（岡野 2002, 2003)²⁶。

ここで、ワイク(1979)によるイナクトメント（保持された過去の経験）、さらには加護野(1988)による「組織の慣性」の議論が深く関係するといえる。すなわち、環境の変化に対応して変化すべき組織行動が変化することなく、旧来の行動パターンが継続されてしまう現象であるが、ワイクにいわせれば「適応が適応可能性を排除する」ということであろう。「適応が適応可能性を排除する理由としては、最近有効であったやり方をヒトが記憶しているからである。記憶はイノベーションを殺ぐ」（Weick 1979）。

これに対して、加護野(1988)は、ワイクと同様、組織の認識（認知）レベルに着目し、「見る、見分ける、感じる、

セルトー 1987, p.17-18)。

²⁵ 実務史と理論史との相互関係については岡野(1995)を参照。

²⁶ 制度的特質と変化：適応・変態・進化・革新の異同関係については、Meyer, Brooks and Goes (1990)に詳しい。彼らは、連続と非連続、そして組織と組織フィールド（組織・人が置かれている関係のネットワーク）の4つの関係性によって、適応（組織内の連続的変化）・変態（組織内の枠組みを超越するような変化）・進化（確立済の組織内の連続的変化）・革新（創発・変容・フィールドの衰退）に分けた。

分かる、信じる、考える、解く、選ぶ、学ぶなど」(p.60)の動詞が「概念を知識の利用と獲得にかかわる心的な活動である」としている。その上で、「日常の理論」を通じて情報の意味を読み取る主観的認識が存在することを強調する。

新制度主義における同型化プロセス、さらにはデカップリングの状況が起こらないようにさせることが重要であろう。同型化で一见すると同じような形態で体裁が保たれていることで安心するようなことが頻繁に起こる。このことによって問題の発見が遅れ、明示的になったときは手遅れということが起こる。こうした逆機能の長期的な潜伏を止めることが重要であって、実践コミュニティはこれを未然に防ぐものになりうるのである²⁷。

4. 創造性を高めるための動詞

(1)「包摂する」: 社会的持続性と包摂力

ここでは、創造都市・文化創造・社会的包摂を連結する概念として、ポレス(M.Polese)とストレン(R.Stren)による「社会的持続性」を取り上げたい。

ポレスとストレンによる *Social Sustainability of Cities*(2000)では、ジェイコブズ(J.Jacobs)やフロリダとは異なり、都市化による「ダイナミクス」を記述している²⁸。

都市はパブリックセクターの後退や労働市場の再構築によって社会的持続性への脅威を経験するが、移民の増加によってもたらされる多様性と通じ、新たな「機会」が得られると捉えるのである。

また、ポレセとストレンは、しばしば見逃されることの多かった、都市の多様な部分を「相互に結合した一つの全体」として紡ぎ、公的サービスと雇用へのアクセスのしやすさを増加させる、ローカルな「場のマネジメント」政策の役割を重視する。

より具体的には、ハウジング、食物の配給、保健、近隣計画に関する新たな試みを行いながら、社会・経済的なネットワークを有する地域社会を出現させることを目論むのである。

²⁷ Sternberg (2003)は、創造性の類型として、「写し取る」、「再定義する」、「前進させる」、「さらに前進させる」、「方向を変える」、「再構築する(逆・分岐)」、「再始動する」、「統合する」という8個の動詞を提示する。

²⁸ J.ジェイコブズは、「創造都市」の主役である職人企業というマイクロ企業のネットワーク型の集積が示す「柔軟性、効率のよさ、適応性」のすばらしさに驚嘆し、その特徴を輸入代替による自前の発展とイノベーションとインプロビゼーションに基づく経済的自己修正能力あるいは、修正自在型経済と把握している。

(2)「バランスをはかる」

都市の創造性の源泉を追求する場合、バランスをはかること(balancing)が求められる。ブラッドフォード(Bradford,2004)は、こうしたバランスの一つの有り様を示し、カナダやイギリス、さらにはオーストラリアの都市をケースとして、それらのバランスの取り方について検討している。創造都市であるためのバランスとして、次の9点をあげる。

- ・「地域コミュニティに根差したモノやコト」と「グローバルなコスモポリタンの影響」
- ・「遺産」と「新奇性」
- ・「国際的な関心を引くような大規模なフラッグシップ的プロジェクト」と「創造的な基盤を奮い立たせる小さなプロジェクト」
- ・「公式的な高度な文化」と「非公式のストリート・シーン」
- ・「非営利のアーティスト」と「創造的な産業クラスター」
- ・「ローカルな知識」と「プロフェッショナルな専門技術」
- ・「規則に準拠した説明責任(アカウンタビリティ)」と「草の根の実験」
- ・「全体的な思考」と「戦略的な行動」
- ・「近隣の再生」と「社会包摂」

「地域コミュニティのルーツ」と「グローバルなコスモポリタンの影響」はこれまでの論稿(岡野 2009c)で取り上げたものであるし、「遺産」と「新奇性」はUNESCOの世界遺産と創造都市ネットワークとの関係性を検討していることを想起させる。また、社会的持続性に密接に関連する項目として、「フラッグシップ的プロジェクト」と「小さなプロジェクト」とのバランス、「ローカルな知識」と「専門知識」とのバランスは重要である。

問題は、こうした「バランスをはかる」をどのような手段を用いて達成し、どのような状況になれば達成したとみなされるかにある。政策的にいえば、単純にプロジェクト別の予算配分のバランスによって達成できるものではない。

一方が他方の文化基盤として優先されるべきものも存在する。また、上であげた各項目内のバランスだけでなく、各項目間のバランスも重視すべきである。たとえば、業績評価尺度(バランススコアカード)を組み込んだ人事評価制度と教育システムとの融合された人事教育制度があげられよう。このバランスを達成するための一つの重要な思考がシンクレティズムである(岡野 2012a,b)。これは異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異なる神格や教義が混在・融合して一つの宗教体系をなしている場合や、同一社会に複数の宗教体系が併存し、人々が状況に応じて関与する場合などがある。ただ、シンク

レティズムは折衷主義ともされてきたが、混合という意味の「折衷」ではない。二つのものが外見上は合体していると見えたとしても、両者は区別されながら、保持・保存され、併存しているといえる。

(3)「パッチングする」: 俊敏性とダイナミックケイパビリティ

ダイナミックケイパビリティは、経営学の資源ベースドビュー (resource based view) という競争戦略論の流れから生まれたものである²⁹。とりわけ、主に 80 年代以降の日本企業の台頭を背景として、その戦略行動の理論化を行うプロセスで定式化された。

資源ベースアプローチでは、企業が保有する資源に価値 (valuable) があり、稀少で (rare)、真似ができません (inimitable)、代替できない (non-substitutable) 場合、それらの資源が当該企業の持続的競争優位の源泉となるとされる (Barney, 2002)。

しかしながら、一度獲得した資源は長期間維持されるのを前提としており、変化の激しい動的環境は考慮に入っておらず、資源特有の固着性が逆に変革の足かせにもなるというパラドックスも内包されていた。

これに対して、ダイナミックケイパビリティの議論では、持続的競争優位というものは存在せず、資源の束を絶え間なく組み替えながら、新たな競争優位の獲得を頻繁に繰り返さなければならないとし、特定の資源そのものではなく、その時々で相対的に出現する「資源」を俊敏に組み替える能力がダイナミックケイパビリティであると定義される(例えば、Eisenhardt and Martin, 2000)。

また、ティース等(Teece *et al.*, 1997) は、急激な環境変化に対応するため、企業内部や外部のコンピテンシーを統合・構築・再構成する能力であるとする。すなわち、新たな資源構成を実現する企業内のプロセスが重要であると考えられるようになってきた。

こうした思考の変化は、資源の束を組み替える能力だけでなく、戦略的提携などによって他社の価値ある資源や知識を自社に取り込む能力、異質な文化を持つ提携パートナーとの相互作用によって、新たな知識を生み出すケイパビリティ (knowledge creating capability)、すなわち組織学習がその前提として位置づけられるのである (野中 1990)。

²⁹ 経営戦略論において、ポジショニングから、資源ベース、ダイナミックケイパビリティへの重点変化については岡野(2003)およびダイナミック戦略、とりわけパッチングについては Eisenhardt and Brown (1999)および Brown and Eisenhardt(1998)を参照。

さらに、アイゼンハートとブラウン(Eisenhardt and Brown, 1999)では、ビジネスチャンスの変化や移動に合わせて、絶えず事業をマッピングし直す、戦略的プロセスである「パッチング」(patching)³⁰の重要性を主張する。パッチングは変化の少ない市場よりも環境変化がめまぐるしい市場で効果的であると、パッチングの条件として、各事業ユニットがモジュール構造 (共通単位を持つ部品を組み合わせたもの) で、完成度の高い業績評価指標があり、一貫した給与体系が組み込まれていることをあげている。

5. 創造性の構成要素

それでは、創造性はどのようにして捉えればいいのか。ド・セルトーは、モノが幾千もの過去の実践を生来させ、実践を通して使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行っている「モノ」に焦点を当てるべきであるという(ド・セルトー 1987, p.17-18)。

さらに、さまざまな集団や個人が、これからも「監視」の網のなかに囚われ続けながらも、他方でここここに散らばっており、戦術的で、ブリコラージュに長けた「創造性」が隠れた型 (隠密形態) をとっているか、この在り様を掘り起こすことが必要であるとする。こうした策略と手続きを行う主体はあくまで「消費者」であり、彼らが反規律の網の目を形成していくと主張する。この点は、M.フーコーの「考古学」的理解とはまったく逆の発想であることに留意しなければならない。

都市の創造性と促進・伝達要素：記憶と道

都市創造性を考察するに当たり、大阪の歴史を紐解くことにしたい。アフリカで誕生した現生人類が、6 万年前から世界各地に拡散し³¹、北方ルート、朝鮮半島ルート、南方ルートなどを辿って³²、5 万年前には日本へと到達し

³⁰ パッチングとは、(応急的に) 手当てする、鎮める、調停する、などの意味がある。「鎮める」や「調停する」については、原始宗教や神道との関連性が浮かびあがる。これまでの組織改変との差異については Eisenhardt and Brown (1999)を参照。

³¹ 現在、この「アフリカ単一起源説」が最も有力である (Stringer & McKie 1996)。

³² 次の四つのルートも非常に興味深い。「北方系農耕文化の伝播ルート」(あわ、きび、大麦、かぶ、からしな、ねぎ、ごぼう、そば、豚の飼育や竪穴式住居など)、「チベットからの作物の伝播ルート」(えん麦や大麦)、「照葉樹林文化の伝播ルート」(稲・

た³³。旧石器時代のことである。南北にのびた日本列島では、大陸からの流入ルートを源流とし、人類・文化・習慣が融合して、日本の基礎が形成された(帝国書院 2010)。

現代まで連続と続いてきたヒトの行動や営みを顧みるとき³⁴、我々の祖先の大いなる努力に気づかされる。シルクロードや海の道を通じて、様々な文化が流入した。積極的に持ち帰ったもの、それを支配者や権力者、文化人、様々な人がそれらを吟味・評価し、取捨選択を行ってきた。

人類にとって、道は交通の手段のみならず、定住し、その地に根を張りつつ、別の方向に向かい、人類の進出する方向を辿っていくなど、様々な活動を行う際になくしてはならないものであった。宗教的な要因をはじめとする「文化的な要因」が非常に大きな意味を持っていた(Oppenheimer 2007)。

大阪は、山根徳太郎教授の難波宮・発掘によって、古都として位置づけられることになった³⁵。シルクロードの終着点であり、かつまた遣唐使の出発点として大阪・住吉津があるが、その正面にあるのが海の神を祭る住吉大社である(住吉大社 2008)。住吉の神はわだつみ=海の神で、住吉の地は瀬戸内のみならず朝鮮半島・中国大陸に至る門戸であり海上交通の要衝であり、古代以来、国家の保護を受け多くの人々の厚い信仰をうけてきた。

さらに、淀川から都・飛鳥や奈良、そして京都へ接続されるとともに、京都から、四天王寺・住吉大社と一心寺、そして熊野神社を結び付ける道として熊野街道が形成されていく。都市は文化や知識の集約点であり、文化の「増幅機」(拡声器)、さらにはその逆の「減幅機」(縮声機)の役割も果たす。道や街道は「文化の道」として、またヒトや物資の通る動脈として大きな役割を有するのである。

ここで道とオープンスペース³⁶の含意は「ただ開いている」・「空いている」ということにはとどまらない。保存

し、育み、発酵させ、熟成させることであり、道は通り道として、終着点として、出発点として、その空間のグローバルな広がりや京都の祇園祭などを見ても明白である。道は「記憶装置」としての役割だけでなく、他の地域とを繋ぐ重要な文化の増幅機として機能するのである。さらに、街のそれぞれにヒトとモノのなかに「想い」が埋め込まれていることを前提として、「想い」や「記憶」、見えるモノ、そして現在目の前で行われている活動から、過去の活動を類推することを通じて、その埋め込まれたものを解きほぐしていく作業が求められるのである³⁷。

ここにおいて重要な役割を果たすものがオープンスペースとしてのギャラリーである。現代アートや自動車など現代において創作されたモノの中にさえ伝統的技術が埋め込まれており、時間的な広がりの中で、ギャラリーの多重の含意に気づかされる。

まちづくりと文化の相互浸透にむけて

道は、人間の文化的な生活になくしてはならないものであり、人々の「想い」が重層的に埋め込まれたものである。

都市の創造性に関わる、様々なアクターの相互関係を探りながら、オープンスペースとしてのギャラリーや寺院の在りようを見ることによって様々な発見をすることができる(岡野 2012)。こうした、都市の記憶、現代人による新たなイメージの創造、ズラシなど動詞による文化編集に焦点を当てることによって、いかに活性化するかについてのヒントが得られるであろう。スペース・余白として、また大事だからあえて入れ込まないことも重要な文化編集である。ヒトとモノ、コトとの距離感をはかるためにも、空間やオープンスペース、そして記憶を呼び起こす「仕掛け」の重要性が大きくなっている³⁸。

目に見えない様々なモノやコトがスペースによって可能になる。しかし、結局はそうしたモノやコトを感じられるヒトが育つことが求められるのである。

6. 阿倍野の歴史と創造性

(1) 「ヒト・モノと創造性」

あわ・きび、大豆、ささげ、えごま、しそ、温帯系のさといも、養蚕、もち米の栽培、こんにやくづくり、麴を利用した酒の醸造、「海の道による作物の伝播ルート」(南方系の稲、熱帯系のさといも、やまいも)の四つである。

³³ 日本人の起源についての最新の成果はニュートンプレス(2009)に詳しい。なお、フーコーの系譜学、「起源」の拡散、雲散霧消についての考察は岡野(1995)を参照。

³⁴ 遣隋使・遣唐使、朝鮮通信使などはその端的な例である。これらの文化的側面については仲尾(2007)を参照。

³⁵ 難波宮(前期・後期)の「おもかげ」を見ることによって「古都・大阪」という表現を理解することができるであろう(追手門学院上町学プロジェクト 2011)。難波宮を発掘したのは山根徳太郎氏(大阪商科大学教授)である(山根 1962)。

³⁶ オープンスペースについてはホワイト(1971)を参照。

³⁷ 記憶・場所・身体と祭りとの関係性については中野(2007)に詳しい。

³⁸ 「時代に置き去りにされていたような狭い路地にも人が訪れ移り住んで、物を作るかすかな音、子供たちの声が聞かれるようになったのも大きな変化であろう。街は心地よい風吹き抜け今までと違った柔らかな表情をみせてくれている。同時に近代的オートロック付のマンションも林立していった。ふるさと新しさの共存が望まれていった」(三島 2012)。

村野藤吾の建築

村野藤吾(1891-1984年)は1918年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、大阪の渡邊節建築事務所で設計実務を学び、1929年に独立して阿倍野区阿倍野筋に事務所を設立し³⁹、天王寺から事務所への途中に居を構えた(村野1981)。



綿業会館を共に設計した渡邊節(左)と村野藤吾

代表作には「^{てりむくり}照起屋根」(唐破風)を36体配した「大阪新歌舞伎座」(1958年)や「都ホテル佳水園」(1959年)などがあり、独自の世界を生み出してきたと評価されている。近鉄グループなど、同じクライアントから継続的に設計を依頼された。



36体の照起屋根を配した大阪新歌舞伎

(現在は上本町6丁目で数百体のミニチュア版により再現されている)

村野氏は、『資本論』をはじめ、経済学や会計学へ大きな関心を持ち、旧制の大阪商科大学および大阪市立大学教授であった木村和三郎による『減価償却論研究』(1947)も愛読書としていた。これは設計事務所を運営する村野が、戦後、建物の減価償却実務の理論的基礎を迫っていたことは明らかであり、マルクスの労働価値説を減価償却実務に援用した木村教授の理論に共鳴したことは想像に難くない⁴⁰。労働価値説に基づいた減価償却に重きを

置きつつ、価値回収計算に終わっている現実の会計実務を批判する。



村野氏の蔵書『資本論入門』(河上肇)と『減価償却研究』(木村和三郎)

(出所) 大村ほか編(2008)

阿倍野の創造性とのかわりでは、日本基督教団南大阪協会は、村野の処女作の塔屋(教会塔)と最晩年の新礼拝堂(改修)とが同時に見られる場所として重要である。先日のヒアリングでも、当時の牧師との強固な信頼関係を想起させるエピソードに事欠かないことが看取された。

創造性のアクターとしての天王寺蕪

「野沢菜のルーツは「天王寺蕪」であり、野沢温泉村の人々はそのことを知っていたという。昔からの伝統野菜は、栽培・イベントなどの地道な取り組みの過程で、人々の心をつなぎ、地域の歴史や文化を再発見して味わう機会を与えると同時に、現代の社会や生活の在り方を振り返らせてくれている

宝暦6年(1756)、野沢温泉村・健命寺の8代目住職・晃天園瑞和尚が京都遊学の折、天王寺蕪の種子を持ち帰り、裏の畑で栽培し「蕪菜」と呼んでいたが、昭和に入り、温泉客やスキー客でにぎわうようになると、「野沢菜」として土産に持ち帰られるようになり、「野沢菜」の名は全国に知れ渡ることとなった。まさしく自分もそれを実行していたことを思い出す。

なによりも重要なことは、野沢では子供時代から天王寺蕪のことが話題にのぼり、村のパフレットや野沢菜のしおり、野沢菜の種子、野沢菜漬の袋などに天王寺蕪と野沢菜の歴史が紹介されていることであろう。そこには感謝の気持ちが見え隠れしている。健命寺には「野沢菜発祥の地」碑と、種子を持ち帰った晃天園瑞和尚の顕徳碑が建立されていることも重要である。

さらに、「和尚が天王寺蕪の種を持ち帰らなかったら今の野沢菜がないわけだから、昔、和尚が種子を持ち帰っ

³⁹ これは2017年現在も存在する、心斎橋に置いた事務所分室はいまは存在しない。

⁴⁰ 全くの偶然ではあるが、筆者が大阪市立大学商学部の専門ゼミで輪読したのも木村教授の『減価償却論』(新版)である。減価償却(実践)があるべき労働価値説(理論)から逸脱(木村教授は「転倒」と表現している)していることを歴史研究によって明らかとし、さらに当時の会計研究の世界的権威であったPaton教授およびLittleton教授の『社会会計基準序説』を真っ

向から批判されたことは、一介の学生に過ぎなかった私から見ても圧巻であった(木村和三郎『会計学研究』を参照。)

た道を歩こう」とし「野沢菜伝来街道ウォーキング」が始まった。すなわち、天王寺蕪発祥の地である四天王寺を出発し野沢温泉村までをリレーで歩くイベントが、平成21年には530kmを25日かけて、平成25年には約600kmを30日かけて行われたのである。まさしく「野菜を通じた地域交流の深まり」が見て取れる。

こうした野沢の動きに呼応して、大阪でも平成7年、信州出身の料理研究家から、「天王寺蕪は野沢菜のルーツ」という情報を得て、天王寺蕪が復活することになる。

創造性のアクターとしてのメタセコイア

ヒノキ科の樹木メタセコイアは、大阪市立大学の三木茂教授が化石で発見され、1941年に英文論文で世界中に発送されたが、戦時中のこともあり、多くは届くことはなかった。しかし、1945年に四川省で生きた原木が発見され、戦前から交流のあった中国植物学会の泰斗の胡先驌教授が「三木が化石で発見したメタセコイア（水杉）である」とし、同じく戦前から交流のあったカリフォルニア大学バークレー校のチェニー教授の仲立ちで、植物学者であった昭和天皇や日本政府に苗木100本が送られた（斎藤1995）。

これとGHQ自らが植えた苗を元にして、日本の各地で植えられていく。近年、滋賀県高島市などでは「メタセコイアの並木道」として町おこしにも利用されている。同様の取り組みは中国・南京市や上海市などにおいても見られ、中国の高等教育機関ではアカデミズムのシンボルとして位置づけられている（岡野・塚腰2015）。

ここでは、1970年に大阪で開かれた「人類の進歩と調和」をスローガンとした日本万国博覧会（EXPO'70・大阪万博）とメタセコイアとの関係、そして陶器で有名な滋賀県信楽町との文化的関係について触れてみたい。

岡本太郎が制作した芸術作品であり建造物である太陽の塔は、大阪万博のテーマ館のシンボルとして建造され、万博終了後も引き続き万博記念公園に残されたが、メタセコイアがその周りを取り囲んでいることは様々な意味において象徴的なものである。

まずは、太陽の塔の裏面には信楽で取れたメタセコイアなどの化石や養分が含まれた「土」によって創られた信楽焼であるという点である。岡本太郎を信楽に招き入れたものは、太郎の求めていた「脈動する心臓の血の色」であり、「生命を凝縮した太陽の色」であった。これを完成させるための（木節粘土と石英が混ざり合った）信楽の土とそれに合致した（ガラスを使った低火度釉とは異なる深みと光

沢のある）釉薬、そして、こうしたイノベーションを達成しようとしたヒトの存在である。こうしたヒトやモノ、そしてコトをつなぎ合わせる創造性の要素として次の3点が挙げられる。①定型性と自由度とのバランス、②即興性、③リズム、がこれである。

岡本太郎と信楽との関係性に即していえば、まず、縄文という型を歴史のなかから「出土」させながら個人や社会の自由度を獲得すること、すなわち、伝統の中に拘泥する（法隆寺を維持することを一義的に考える）のではなく「自分が法隆寺（のような存在）になる」（岡本2005,51頁）という方法の提示である。第二に、太郎の望む「赤」を信楽では出せるとする一見無謀なやりとりを通して得た太郎の信頼とそれを独自の釉薬を編み出すことによって「赤」を実現に導いた近江陶業の技術陣の即興性と長年の高い技術力をあげることができる。

三木教授と学会発表した夕陽丘高校の引田茂教諭

三木教授（大阪市大）が当時共同で研究していた夕陽丘高校の引田教諭に次のように言われた（夕陽丘高等学校創立80周年記念誌1986）。

君、メタセコイアが生きていたんだよ！中国の奥地に。論文が生きたメタセコイアに審判されることになる。すぐにも生きた植物と突き合わせたい。

その時の感動が今でも蘇えるようである。まだその続きがある。引田教諭はチェニー教授から送られた葉の形態と組織を分担して遺体と現生種を比較し、1940年4月に名古屋大学で開かれた日本植物学会で発表された。

発表を終わってふと気がつくその後方上段の席で数人の若い学生が盛んに拍手を送ってくれていた。よく見ると夕陽丘高校生物研究部の男子部員で、全く驚いた。

1950年といえば戦争が終わって5年しか経っておらず、高校生が大阪から名古屋大学まで駆けつけるのは容易なことではなかったであろう。同校の現在の校長先生に聞くと、「当時の学生は自主性を持って行動していた」という。教師真利に尽きる思いであったに違いない。その研究が実って、三木教授と引田教諭との研究が翌年の学術雑誌Science誌（Jan 5, 1951）に掲載されることになった。学会報告の応援のため駆け付けた高校生はこの偉業を知ってどれほど励まされたことであるか想像に難くない。

その他、中国との関わりでは、1956年、同高校に中国

教育視察団が来訪した際にメタセコイアを記念植樹したことや、1982年の日本植物学会100周年大会で中国からの来賓挨拶で「三木教授が名づけたメタセコイアが絶滅寸前、特に日本で保護育成されており、日中友好の木である」と述べたことなどがあげられる。こうしたエピソードの奥底になにがあるか、まだ解明すべき事柄は多い。

桃が池・万代池とメタセコイア

阿倍野と東住吉との境界に位置する桃が池にもメタセコイアがある。桃が池は「百が池」あるいは「股が池」ともいわれ、聖徳太子の使いが大蛇退治をした池として、近年では田辺古墳群との関連も指摘されている。また、都市計画に基づく区画整理による公園として日本初といわれている。神仏習合の様相を色濃く残す「股が池大明神」は町内会が管理しているが、こうした様々な歴史の中でメタセコイアが存在することとの間には様々な見えない糸がありそうである。



桃が池のメタセコイア

この桃が池公園の一角に昭和中学があり、そのグラウンドには4本の大きなメタセコイアがあった。その内の3本が2015年暮れに伐採されることになるが、以下の写真はその直前に筆者が撮影したものである。詳しくは本書・第7章に譲るが、第6章には近隣にある大阪府立農芸高校の藤澤純教諭が植えたとの記述がある。その時期が日本に再上陸してから数年以内のことでありことから、今後、さらに掘り下げていく必要がある⁴¹。



昭和中学のグラウンドとメタセコイア

また、住吉区の万代池にもメタセコイアがあるが、ここにはかつて東住吉区で開校した関西外国語大学のキャンパスがあり、現在は枚方に2つのキャンパスに移されている。その中の一つの学研都市（穂谷）キャンパスには万代池から移植されたメタセコイアがあり、木のラベルにそのことが記載されているとともに、新たな「万代池」が谷本貞人前理事長によって作られた。まもなく、枚方市御殿場に移転する予定であるが、計画案には正面入り口に10本以上のメタセコイアが配置されている。



大阪市住吉区の万代池から移植されたことを示す銘板
(関西外国語大学学研都市キャンパス内)

(2)「知と創造性」：知の中継地・編集地・発信地

医師であった中野操氏(1897-1986)は、大阪における医史学の権威として国際的に知られている存在である。京都府に生まれ、京都府立医専(現京都府立医大)を卒業後、陸軍軍医から日赤大阪支部病院に勤務をへて、戦後、周防町で開業し、後に阿倍野晴明通に移った。自宅も阿倍野区松崎町から晴明通に移され、医療活動につとめる傍ら、昭和13年、医史学普及のため杏林(きょうりん)温古会を設立し、機関誌『医譚』の発行や『増補医事年表』の編纂、『大阪蘭学史話』の執筆など、大阪の医学史研究に邁進された。蔵書の中には天文21年(1552)の『黄素妙論』など室町時代に遡る医学書、1733年オランダ刊の『セウユルスフラーカコンスト』を蘭方医新宮涼庭(1787~1854)が写した日本最古のオランダ文法書、江戸時代大阪の医事年表のほか、『医譚』編纂に関する資料など、日本医学史上比類ない歴史資料である。「中野操文庫」(13461点)として2014年に大阪市の指定有形文化財に指定された。

上述のように、出身は京都でありながら、大阪で開業し、大阪の医学の歴史研究に生涯を捧げられたが、その動機を探ることによって、阿倍野の創造性に接近できるであろう。『大坂名医伝』のあとがきにおいて「大阪に住んで半世紀以上、生を受けた京都以上に愛着を感じる大阪」あるいは「第二の故郷、大阪」と記すなど、大阪への愛着を述べられている。中野先生に直接インタビューされた榎原氏によれば、「権力に反発し、自己の力のみをたよりにすべてを切り開いて来た大阪町人の不屈の意気

⁴¹ 昭和中学の南側には「ピース通り」があるが、周辺にはGHQが接収した住居などが多く、沢之町公園(現在は住吉区役所)とともにメタセコイアが植えられている。

に先生が心を惹かれたわけであって、先生の御性格がその学問の針路を決定したものと見える」とされている⁴²。



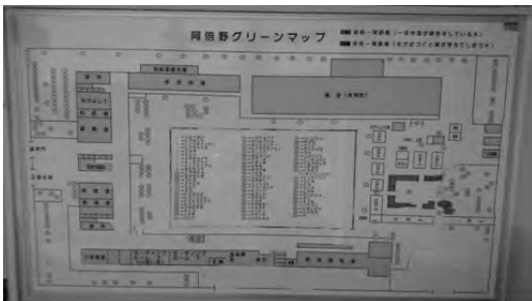
阿倍野小学校・校庭にあるメタセコイア

また、阿倍野小学校の校庭にある4本のメタセコイアはある時期、伐採の危機にあったが、いまでは「アベノッキー」というマスコットも作られ、PTA 会報などでも活躍している。



阿倍野小学校 PTA が作成したメタセコイアの
マスコット「アベノッキー」

さらに、校庭にある花や木を紹介した「グリーンマップ」があり、授業にも活用されていることは注目できる。



阿倍野小学校の「グリーンマップ」

⁴² これは1976年の夏、中野氏の自宅でのインタビューからそのように結論づけている。榊原聰彦「私の祝詞」『中野操傘寿記念誌』105頁。また、同じことは山本四郎氏も同記念号において述べている。

晴明丘小学校の創立100周年記念事業として2000年に作られた「自然学習観察園」と「地域園芸クラブ」の活動も重要であろう。「観察園」の土地そのものは1953年に当該校の土地となり、1954年にはプールとして、1956年には修養室として「晴樟館」が寄贈され、庭園と茶室が設置された。



晴明丘小学校フィールドアスレチック

これを一つの契機として、児童に対し自然とのふれあいを促進させる目的で1980年には「フィールドアスレチック」や「木かげの広場」が、そして2000年には「アスレチック」のあとに人工ビオトープと学習園からなる、稀有な存在としての「自然学習観察園」が造成されることとなった。



さらに、「天王寺蕪」をはじめとする「なにわ伝統野菜」の植え付けや田植えや稲刈りの実習のための田んぼの設置、池の新設や川の改修工事など、様々な自然との関りを体験できる施設になり、まさしく創造的空間となっている。



(3)「場・みちと創造性」

西区の川口居留地から大阪の中華料理は生まれたことはよく知られている(横田 2007, p.91)。さらに、それ以前では長崎から大阪、そして山東省から大阪へと遡ることができた。

15章では、戦後、第1号店(総本店)を阿倍野区阪南町に構え、その後多くの系列店を展開した中華料理店の「明洋軒」を取り上げた。戦前の勝山通の屋台を経て、終戦後、昭和27年9月、阿倍野区阪南町2丁目、福井県大野市の親戚を中心とした職人を雇いながら、6人程度の職人とともに「広東料理 明洋軒」を創業したのであった。

阿倍野筋とあびこ筋を結ぶ都市計画道路として昭和50年頃には「松虫通」が開通するが、それまでは道幅5メートル程度しかない一方通行の通りであった。周辺には阿倍野小学校や阿倍野高校や阪南高校、住吉高校などがあり、熊野街道がある閑静な住宅街が広がっていた。



八尾の庭樹園に残されていた朝陽館の写真

清明通の近くにある「朝陽館」は、道修町の薬商小西久兵衛氏(3世)が明治後半に大阪の財界人が広大な別荘を構えた一つであるが、大隈重信侯など政府や軍、皇族関係の要人が滞在した場所として有名である。八尾・服部川に最盛期は160件以上ある造園業が作られたが、その一つで今年創業140年を迎える「庭樹園」を創業した當内廣吉氏はこの朝陽館の庭の管理を任されることになる。この写真は久兵衛翁より廣吉氏に戴いたものとされ、陸軍大将福島安正男爵と宮内大臣土方久元伯爵が訪れた際のものであるという。これは、庭師で近代日本庭園の先駆者として有名な小川治兵衛(植治)が天王寺で住友家の「慶沢園」を造庭したのも同じ時期であるが、廣吉氏は植治とも交流があった。當内廣吉氏が所有していた正嘉元年(750)につくられた十三塔を植治に売却しており、その十三塔は京都南禅寺界限にある別荘「野村碧雲荘」(八尾・久宝寺出身で文化人でもあった野村証券の二代目野村徳七氏の創建)に設置されている。また、庭樹園の當内家の旧宅離れ座敷も「朝陽館」の建て替えに伴って下賜されたものといわれている(岡野ほか2017, 55頁)。

自然と造園文化や産業を媒介とした創造的ネットワークの事例として興味深い。

(4)「集り・交流と創造性」

美章園の「大阪スポーツマンホテル」と長居球場(サッカー場)

JR美章園駅前の鉄筋4階建の和洋折衷建築「美章園旅館」から「大阪スポーツマンホテル」への変更により、鉄道管理局など企業の営業マンやサッカー関係者や受験生などにとって必須の施設となった。昭和61年4月に廃業した後、平成17年秋に「ティールーム&アートギャラリー・エムズ」をオープンし、4~5回の企画展のほかグループ展や個展でアート作品の発表の場として利用されている。

この場所が、1993年のJリーグと直接繋がっていたとはだれも想像できないに違いない。父親である濱崎都雄氏とサッカーの記憶、さらにメキシコ五輪のゴールキーパーであった兄である濱崎昌弘氏もその記憶の中にある。今では日本で有数のテニス場を持つ韮公園にはかつてサッカーグラウンドがあり、「大阪スポーツマンクラブ」が存在していた。美章園の「大阪スポーツマンホテル」はその記憶と重合する。

また、ドイツのデットマール・クラマー氏(Dettmar Crammer)が1964年の東京オリンピック日本代表チームの指導のために来日、ベスト8の成績を残して4年後のメキシコオリンピックでは銅メダルを獲得する。同年、長居競技場(現在のヤンマースタジアム)が完成しサッカーの大会も多く開催されて日本におけるサッカーの認知度も上がった。

美章園(北田辺)の川村塾

阿倍野区にあった自宅から阪和線の高架をくぐって「川村塾」に通った。「Mine, yours, his, hers its に whose!」「well」は「井戸・上手に・良く」、”effect”は「結果・効果・趣旨」と叫ばれていたことが思い出される。

川村先生は生野工業高校では数学の先生。応援歌を作曲され、声楽コンテストも優勝をされているという。声楽家に英語を教えてもらっていたのだ!この定番のリズミカルな繰返しに加えて、テンポよくコンパクトに色々な内容を盛り込まれ、「川村塾ノート」が出来上がった。とりわけ品詞の定義やその機能を重視し、暗唱するよう指導された。「日本の英語教育は文法をしっかりとやる」ということがよく言われてきたが、川村塾では徹底していた。先生の奥様もやはり声楽家で、先生に劣らない腕前

であったと思えたし、土曜日には音楽理論の授業をしていただき、#とbの数と長調・短調の名称を「トニイホロヘ・ヘロホイニト」と唱和する方式は川村先生の英語と同じ方式であった。美章園の創造性を垣間見た思いがした。

7. 3つの軸：バランス・即興性・リズム

(1) 阿倍野の道(道路・河川・水路)：定型性と自由度のバランス

これは、型を歴史のなかから創り出しながら、個人および社会の自由度を獲得することを意味する。自然からヒトから、過去の文化的なエッセンスを消化し、過去の様々な遺産や思考法を借りながら、編集しながらこれを定型化することによって、一方では自由度を獲得する方法がこれである。

まず、「阿倍野の軸」といえるようないくつかの軸がある。一つは南北に通じる歴史的な熊野街道であろう。八軒屋から南に下る熊野街道は上で指摘したように、「道は交通の手段のみならず、定住し、その地に根を張りつつ、別の方向に向かい、人類の進出する方向を辿っていくなど、様々な活動を行う際になくてはならないもの」であったし、文化的にも非常に大きな意味を持っていた。

しかし、たとえば1980年前後における松虫通の開通によって多くの文化的「遺産」が消えてしまったことも事実である。それらを取り戻すことはもはや不可能であるが、これまで大阪の文化を形作ってきたヒトやモノ、コト、そして道の「記憶」を掘り起こし、蘇らせる仕掛けを構想し、実現させることは重要である。

(2) 阿倍野の即興性

第二のファクターとしてあげられるのが即興性である。即興(improvisation)とは「構図(作曲)と実行(演奏)の行為が不可分であり、構図(作曲)/実行(演奏)のそれぞれが過去のそれらとは異なること」(Bastien and Hostager, 1992)、「自発的な方法で行為を導く直感」(Crossan and Sorrenti, 1996)などと説明され、アドリブと同義とされる⁴³。

「即興性」の分野はジャズ音楽を引き合いに出されることが多いが、ジャズの象徴への接近は避けることができず、ジャズは即興がさらに大きく洗練されたものに発展した静かな現象の一つとなった事実がある。探究へと

⁴³ 即興演奏は「演奏の過程において作品が創作されること、あるいは演奏過程において作品に最終的な形が与えられること」と定義される。

進歩させた団体の有効性は、学者が徹底的に調べた比喩的なアリーナと交響楽団の演奏会ほど違いが見られる(Kanter, 1989; Sayles, 1964)。

「即興による創造性」とは、価値の創造、効果的な新製品、もてなし方、ひらめき、行動、複雑な社会的組織の中での個人の働きによるプロセスに関係するとする(Woodman et al 1993)。また、Miner et al(1996)によれば、行動とは、変化を起こすこと、改正すること、創造すること、変更したりつけ加えたりすることよりも、より純粋に即興で新たな発見をすることであるという。

それでは、阿倍野において、この即興的に新たな発見に導くようなものとはどのようなものであろうか。

(3) 阿倍野のリズム⁴⁴

「リズム」(律動)とは時間軸における二つの点を置くことにより、その二点間の時間に長さを感じるようになるが、その「長さ」をいくつか順次並べたものをいう。すなわち、「時間的現象要素の規則的反復である」といえる。これに対して、「拍子」は、弦を一樣に叩くこと、あるいは弾くことである。

「リズム」と「拍子」の対立は、運動の持続性がリズムとして体験されるためにはまず拍子がそれに加わらねばならないということと矛盾しない(クラークス 1971)。それゆえ、運動が少なからず[リズムの]決定的要因としてとどまる。しかし、他方で、「リズム」と「拍子」が本質的に異なる発生源を持つにもかかわらず、人間のなかで互いに融合しうる⁴⁵。「繁栄と衰退、受容と放棄、邂逅と離別など、人間生活にとって避けることのできないこれら転変とともに、あらゆるリズム的脈動を、ことさら人間の生命の非常に感動的な反映たらしめているものはまさにこれのみである」。

⁴⁴ クレストン(1968)は、リズムの要素として、拍子・速度・アクセントおよび型をあげ、アクセントがリズムの生命であるとす。「それ(アクセント)なくして、拍子は単調な鼓動拍の集合の連続にすぎず、速度は全く動きの感覚をなくし、型は雲をつかむようなぼんやりしたものになってしまう」(35頁)。

岡(1987)は、リズムが音楽・芸術・文化をはじめ、日常生活の隅々にまで浸透しており、東と西の文化が各民族の「リズム的風土」の上にとしっかりと根付いていると主張する。

⁴⁵ クラークス(1971)は、昼と夜、明と暗、夏と冬、生長と衰弱、生誕と死亡、貯蔵と分配、逗留と放浪、拘束と放逐のリズム的交替のなかに、また、天と地、太陽と太陰、火と水、男と女、上と下、前と後、右と左のリズム的交互性においても、生成と消滅へと対極化する万象の姿を明らかに見出そうとする。

このような諸現象のリズム学は現象世界の領域内にとどまり、直接現象するリズムの本質的特徴を拡大することによって、原則的に測定可能な中間ではなく、上がり下がりと下がり上がりの質的対立によってリズム的な交替現象になっているという。

「リズム」と「拍子」、および創造性との関係性についていえば、時間的および空間的に「ずらす」(文化編集)ことによってリズムが生まれ、創造性が生みだされる可能性がある。異なる地域における文化の重なり、時間の重なり、ずらしの文化編集によって、新たなリズムが生まれ、創造性に繋がっていくといえよう。世代の感性の違いにより音頭に変容が加えられる。問題はその変容に対して支持が得られるかどうかであろう。ただし、この支持については、短期的な評価ではなく、長期的な尺度でみていく必要がある。

8. おわりに

阿倍野の歴史的推移の奥には、河内湾・河内潟、河内湖時代の重なりと変化、街道と一般道、古道と新道などの関係性、そのプロセスにおける神木の伐採など、様々な文化編集の在り様、多様な見えないアクターの関係性の変化などが埋め込まれていることがわかる。

都市の創造性を「デザインする」ためには、都市に関わる人々を動機づけるための信頼関係をいかにして構築するかが重要であり、都市において本来持つべき包容力・バランス・俊敏性を確保する総合的システムの構築が求められる。この核心は「いのちへの共感」である。創造性の源泉もここに看取できる。包容力・バランス・俊敏性もその中にあり相互に関連している。フェスティバルを維持し、時代を先取りするモノに変容させる力、地域間のネットワークを感じ取る「こころ」のグローバルな共有、ヒト・モノ・コト・道の関係性の「共創」が都市創造性の源泉である。

参考文献

- 伊丹敬之(1991)『グローバル・マネジメント：地球時代の日本企業』日本放送協会。
- 上田正昭(1988)『住吉と宗像の神：海神の軌跡』筑摩書房。
- 近江俊秀(2013)「大和と河内の峠道」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店、所収)。
- 大阪府・歴史街道ウォーキングマップ
(<http://www.pref.osaka.jp/attach/1464/00002290/K01-16.pdf>)
- 大手門学院上町学プロジェクト(2011)『上町学 再発見・古都おさか』学校法人・大手門学院。
- 大村理恵子ほか(2008)『村野藤吾：建築とインテリア ひとつをつくる空間の美学』アーキメディア。

- 岡 利次郎(1987)『リズム考：東と西の文化の源流』草楽社。
- 岡野 浩(1995,2002)『日本の管理会計の展開：「原価企画」への歴史的視座』(初版(第2版)中央経済社)。
- 岡野 浩(2003)『グローバル戦略会計：製品開発コストマネジメントの国際比較』有斐閣。
- 岡野 浩(2004)「日本の管理会計の変容：社会的・制度的アプローチからみた原価企画」『会計』第166巻第5号。
- 岡野 浩(2006a)「日本管理会計史研究序説：社会史・文化史としての方法」『経営研究』第56巻第4号、2006年2月。
- 岡野 浩(2006b)「管理会計の受容と創造：計算モデルとしての原価企画とABCとの差異」『経営研究』第57巻第1号、2006年5月。
- 岡野 浩(2008)「日本の管理会計史の断層面：文化の重層性とアーキタイプス」『会計』第173巻第5号、2008年5月。
- 岡野 浩(2009a)「日本の管理会計の連続性と非連続性」『会計』第175巻第3号、2009年3月。
- 岡野 浩(2009b)「管理会計戦略の実践的射程」『企業会計』第61巻第6号、2009年6号。
- 岡野 浩(2009c)「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」(佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、所収)。
- 岡野 浩(2003)『グローバル戦略会計：製品開発マネジメントの国際比較』有斐閣。
- 岡野 浩(2009)「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」(佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、所収)。
- 岡野 浩(2012a)「都市創造性と文化編集」岡野 浩・三島啓子編『都市創造性プラットフォームとしてのアートギャラリー：大阪空堀をめぐる文化ネットワークの形成』大阪市立大学都市研究プラザ。
- 岡野 浩(2012b)「原価企画の文化史的含意：動詞化・述語的包摂による文化編集の視点から」『会計』第182巻第4号。
- 岡野 浩・三島啓子(2012)『都市文化プラットフォームとしてのアートギャラリー』(レポートシリーズ)大阪市立大学都市研究プラザ。
- 岡野 浩・塚腰 実(2015)『メタセコイアと文化創造』大阪公立大学共同出版会。

- 加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子(2004)『日本文化のかくれた形』(現代文庫) 岩波書店。
- 鎌田東二(2009)『モノ学の冒険』創元社。
- 鎌田東二(2010)『モノ学・感覚価値論』晃洋書房。
- クラークス, L. (1971)『リズムの本質』(杉浦實訳) みすず書房
(原著出版年 1923 年)
- クレストン, P. (1968)『リズムの原理』(中川弘一訳) 音楽之友社。
- 榎原聰彦 (1977)「私の祝詞」『中野操傘寿記念誌』(『医譚』第 49 号)
- 佐々木健一(2010)『日本的感性: 触覚とずらしの構造』中央公論新社。
- 清水泰博(2009)『京都の空間意匠: 12 のキーワードで体感する』光文社。
- 高口恭行(1996)『都市のたくらみ・都市の愉しみ: 文化装置を考える』日本放送協会。
- 立岩二郎(2000)『てりむくり: 日本建築の曲線』(中公新書) 中央公論新社。
- 武田清子(2004)「まえがき: 日本文化のかくれた形」加藤周一ほか(2004)所収。
- 茅原雅之(1999)「家隆における西行歌受容考: 『心の果』と『しのぶの奥』」(日本大学文理学部人文科学研究所)58 号。
- 寺田 透(1978)『道の思想』創文社。
- ド・セルトー, M. (1987)『日常の実践』(山田登世子訳) 国文社。
- 中野紀和(2007)『小倉祇園太鼓の都市人類学: 記憶・場所・身体』古今書院。
- 中野 操 (1983)『大坂名医伝』思文閣。
- 中野 操 (1977)『中野操傘寿記念誌』(『医譚』第 49 号)
- 西堀榮三郎(1990)『創造力: 自然と技術の視点から』講談社。
- 日本医史学会関西支部 (1985)『中野操先生米寿記念誌』(『医譚』第 54 号)
- ニュートンプレス(2009)『ニュートン: 日本人の起源』ニュートンプレス。
- ファビオ, G. (2011)「行為者としての『モノ』: エージェンシーの概念の拡張に関する一考察」『同志社社会学研究』No.15。
- フーコー, M.(1969)『知の考古学』(中村雄二郎訳) 河出書房新社。
- 藤原成一(2008)『かさねの作法: 日本文化を読みかえる』法蔵館。
- 松岡正剛(2006)『日本という方法: おもかげ・うつろいの文化』(NHK ブックス) 日本放送出版協会。
- 丸山真男(2004)「原型・古層・執拗低音: 日本思想史方法論について私の歩み」(加藤ほか 2004 所収)。
- 三島啓子(2012)「楓ギャラリーの設立と経過」(岡野・三島 2012 所収)。
- 山根徳太郎(1962)『難波の宮』学生社。
- Bastien, D.T. and T. J. Hostager (1992)“Cooperation as Communicative Accomplishment: A Symbolic Interaction Analysis of an Impovised Jazz Concert,” *Communication Studies*, 43.
- Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, S.L. & K.M. Eisenhardt (1998) *Competing on the Edge: Strategy as Structured Chaos*,” Boston: Harvard Business School Press. (佐藤洋一訳『変化に勝つ経営: コンピューティング・オン・ザ・エッジ戦略とは』トッパン、1999 年。)
- Cohendet, P., D. Grandadam & L. Simon(2010) “The Anatomy of the Creative City,” *Industry and Innovation*, Vol.17, Issue 1, Feb.
- de Bono, E. (1970) *Lateral Thinking: Creativity Step by Step*, NY: Harper & Row.
- Eisenhardt, K.M. & S.L.Brown (1999) “Patching: Restitching Business Portfolios in Dynamic Markets,” *Harvard Business Review*, May-June 1999. (DIAMOND ハーバードビジネスレビュー編集部訳『「選択と集中」の戦略』ダイヤモンド社、2003 年。)
- Eisenhardt, K.M. & J.A. Martin (2000) “Dynamic Capabilities: What are they?” *Strategic Management Journal*, Vol.21, No.10-11, October.
- Farias, F. & T. Bender (2010) *Urban Assemblages: How Actor-Network Theory Changes Urban Studies*, London: Routledge.
- Florida, R. (2002) *The Rise of the Creative Class*, NY: The Basic Books.
- Giddens, A. (1984) *The Construction of Society*, Berkeley: University of California Press.
- Heraud, J.-A.(2011) “Reinventing Creativity in Old Europe: A Development Scenario for Cities within the Upper Rhine Valley Cross-border Area, *City, Culture and Society*, Vol.2, Issue 2, June.
- Kanter, R.M. (1989) *When Giants Learn to Dance*, NY: Simon & Schuster.

- Landry, C. (2000) *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*, NY: Earthscan. (後藤和子『創造的都市：都市再生のための道具箱』日本評論社、2003年。)
- Litting, B. & E. Grief3ler (2005) “Social Sustainability: A Catchword Between Political Pragmatism and Social Theory,” *International Journal of Sustainable Development*, Vol.8, No.1/2.
- Miner, A.J., C.Moorman, C. Bassoff (1996) *Organizational Improvisation in New Product Development*, unpublished manuscript, University of Wisconsin, Madison, WI.
- Nicolini, D., S. Gherardi & D. Yanow (2003) *Knowing in Organization: A Practice-Based Approach*, NY: M.E.Sharpe.
- Okano, H. (2008) “The Cultural Significance of Management Accounting in Asia: India, China and Japan,” *Congress Proceedings, Vol. 1, 12th World Congress of Accounting Historians, July 20-24, 2008, Istanbul, Turkey, Avcio*.
- Okano, H. & D.Samson (2010) “Cultural Urban Branding and Creative Cities: A Theoretical Framework for Promoting Creativity in the Public Spaces,” *Cities*, Vo.27, Supplement 1.
- Okano, H. (2010a) “Building Business for Poverty through Cultural Creativity,” *The 8th Academic Forum on Empowering Urban Culture and Creativity: Art, Publicity, and Transformation*, Chulalongkom University (Thailand), March 9-10, 2010.
- Okano, H. (2010b), “Building Businesses for Poverty Through Cultural Creativity: BOP (Bottom of the Pyramid) and Social Sustainability,” *Proceeding of CCS Workshop at University of Manchester*, 9 November, 2010.
- Oppenheimer, S. (2003) *Out of Eden: The Peopling of the World*, London: Constable & Robinson. (仲村明子訳『人類の足跡10万年全史』草思社、2007年。)
- Stolarick, K., B.J. Hrats & R.Florida (2010) Occam’s Curse, Dialectics and the Creative City, *City, Culture and Society*, Vol.1, Issue 4, Dec.
- Stringer, C. & R. McKie (1996) *African Exodus: The Origins of Modern Humanity*, Henry Holt & Co. (河合信和訳『出アフリカ記：人類の起源』岩波書店、2001年。)
- Woodman, R.W., Sawyer, J.E. and R.W. Griffin (1993) “Toward a Theory of Organizational Creativity,” *Academy of Management Review*, 18(2).
-

第13章

メタセコイアが織りなす文化創造

埋め込まれた（隠密形態の）創造性と文化編集（倍音・酵母）

"Learning from cultural creativity"

岡野 浩 (Hiroshi OKANO)

1. メタセコイアの記憶と知のコミュニケーション：三木茂と引田茂

三木が当時共同で研究していた夕陽丘高校の引田に次のようにいった。

君、メタセコイアが生きていた、中国の奥地に！論文が生きたメタセコイアに審判されることになる。すぐにも生きた植物と突き合わせたい（夕陽丘高等学校 1986、16 頁）。

その時の感動が今でも蘇えるようである。まだその続きがある。引田はチェイニーから送られた葉の形態と組織を「遺体」と「現生種」との比較をし、1940 年 4 月にその成果を名古屋大学で開かれた日本植物学会で発表した。

発表を終わってふと気がつくとき後方上段の席で数人の若い学生が盛んに拍手を送ってくれていた。よく見ると夕陽丘高校生物研究部の男子部員で、全く驚いた（同上）。

1950 年といえば戦争が終わって 5 年しか経っておらず、高校生が大阪から名古屋大学まで駆けつけるのは容易いことではなかったであろう。同校の現在の校長に聞くと、「当時の学生は自主性を持って行動していた」という。教師冥利に尽きる思いであったに違いない。その研究が実って、三木と引田との研究が翌年の学術雑誌 *Science* 誌 (Jan 5, 1951) に掲載されることになった。学会報告の応援のため駆け付けた高校生はこの偉業を知ってどれほど励まされたことであるか想像に難くない。

中国との関わりでは、1956 年、同高校に中国教育視察団が来訪した際にメタセコイアを記念植樹したことや、1982 年の日本植物学会 100 周年大会で中国からの来賓挨拶で「三木が名づけたメタセコイアが絶滅寸前、特に日本で保護育

成されており、日中友好の木である」と述べたことがあげられる。

2. メタセコイアとコミュニケーション：日中米の専門家から少数民族まで

(1) 進駐軍からの贈り物？

ここでは、大阪市立大学の田中記念館前にあるメタセコイアに焦点を当て、数年前から温めてきた一つの仮説を示したい。チェイニー（カリフォルニア大学バークレー校）が培養した 100 本の苗が進駐軍を経由して日本政府に送られたほか、進駐軍が自らの手で植えたものが田中記念館の玄関前の庭、さらには自衛隊の駐屯地などにいまも存在しているという仮説である。

植えられた時期としては、朝鮮戦争が始まる 1950 年から 1951 年にかけてであるが、これはアメリカを起点に欧州をはじめとする世界各地に送られた時期にあたる。また、京都の桂や宇治にある自衛隊駐屯地では多くのメタセコイアを見ることができるが、現地調査と広報に残されている史料などから、占領軍が植えた可能性が高いと思われる。さらに、オレゴン大学に所蔵されているチェイニー文書から、日本政府に送られた 100 本の苗木のほかに、GHQ が主体的に日本に植えたものが存在していたことも窺われる。

その他、植えられた時期は少し後になるものの、東富士演習場やその近くの富士教育研修所にもメタセコイア並木が見られるし、東京・立川基地に隣接する昭和記念公園にもメタセコイアが植えられ、公園の敷地内にある昭和記念館の正面には 4 本のメタセコイアが均等に配置されている。

また、桂支所のシンボルマークとして 3 本のメタセコイアが使われている。桂駐屯地の HP の筆頭にもメタセコイアを掲げていることを合わせれば、非常に重要な意味を持っていることは確かである。

(2) 大学史資料室に所蔵の写真による説明

写真 6-1 は、占領軍から返還直後の大阪市立大学の全景 (1956 年) である。左下のグラウンドのへりに沿って 9 本程度のメタセコイアが占領軍によって植えられたことが見て取れる。現在、そこには田中記念館が建てられ、玄関前には同窓生にとって懐かしい「桜花爛漫月朧ろ」の歌碑があるが、それを取り囲むように 23 本のメタセコイアが植えられている。

JR 阪和線の杉本町駅南踏切の東側から占領軍「キャンプ・サカイ」のゲートを望む写真 6-2 (1954 年) には 3 本のメタセコイアが見える。右奥に映っている本館の位置関係からすると、2 本のうちの右側は後の「田中記念館」の名板の後ろのメタセコイアの可能性がある。



占領時代の大阪市立大学 (1954 年)



返還直後の大阪市立大学 (1958 年)

また、写真 6-3 は返還後の通学風景 (1958 年) であるが、植えられた年次が上記通り 1951 年とすれば 7 年程度経過しており、街路樹らしく成長している様子が見られる。写真 6-4 は現在の状況であるが、この風景がいつまで続くか、見守る必要がある。



現在の踏切から見た杉本キャンパス (2017 年)

(3) チェイニーと胡、三木との結びつき

胡先驌 (北京・静生生物研究所) は、生きているメタセコイアの存在を、恩師であるアメリカ、ハーバード大学のメリル (E. D. Merrill) に伝えた (岡野・塚腰 2015)。メリルは種子を採集してもらうために胡やチェイニーに資金を送るとともに、三木が付けたメタセコイアという名前は使わないように伝えた。

これに対して、胡は共同研究していたチェイニーにもメタセコイア発見の情報を伝えるとともに、チェイニーの四川省での採取を側面から支援する。さらには、三木が付けた名前を踏襲し、メタセコイアとしたのである。これは結果的にハーバードの恩師の方針に背くことになったが、この胡の行動をどのように考えたらいいであろうか。

さらには、中国随一の植物学者であるとともに詩人であった胡は、亡くなる数年前に『水杉歌』を書き、三木教授をその歌に詠みこんでいる (胡 1962)。

水杉大国成曹邵 四大部洲绝经济 仅余川鄂千方里 遗子
残留弹丸地
劫灰初认始三木 胡郑肇几继前轨 亿年远裔今幸存 绝域
闻风剧惊异

チェイニーは三木に「中国でメタセコイアの保存に努めてはいるが、気候の似た日本で組織をつくって苗木を育成し、保存に一役買ってくれるなら 100 本の苗木を送る」といった。三木はGHQの天然資源局長スケンク氏 (終戦までスタンフォード大学教授であった) を含む「メタセコイア保存会」を作り、1950 年 2 月 28 日に 100 本の苗木が到着した。今後、研究者相互間で交わされた私信⁴⁶など現存する史料を分析する必要がある。

⁴⁶ オレゴン大学が所蔵するチェイニー文書など、近年その利用が容易になっている。

(4)日中米の協力、そして少数民族からの贈り物

上述のようなメタセコイアをめぐる植物学者間のネットワークの重要性もさることながら、メタセコイアそのものが持つ「隠れた意味」を考える必要がある(岡野 2016)。すなわち、絶滅することなく残っていた中国・湖北省(当時は四川省)の社会関係や習慣、文化など、どの部分が欠けても、われわれの眼前にあるメタセコイアは存在できなかったのである。日本やカリフォルニアでは第三紀に絶滅してしまったメタセコイアが、中国で神木として保存されたことについての少数民族(土家族や苗族)の役割を解明する必要がある。「創世記」とメタセコイアとの関係性である。

また、メタセコイアは石炭の原木として、産業革命において重要な役割を果たした。植物の知識を得ることを超えて、三木の主張した植物の「本性」を捉えようとする態度が求められるのである。



メタセコイアを神木として祭っていた祠(1948年)と近隣住民親子(1948年)

(出所) Gittlen (1999) 136, 113 ページ

3. フランクフルト大学(ゲーテ大学)の占領とメタセコイア

市内中心部にあるフランクフルト大学は、戦後GHQに接収され、附属植物園は1949~52年まで高等弁務官事務所(HQ)が置かれた。また、弁務官であるJohn McCloy氏は1949年の着任後、「セコイアデンドロン」(Sequoiadendron giganteum)の植樹セレモニーを行った。彼の住居も敷地内に建てられ、その周辺にはメタセコイアが植えられ(1956年)、今も成長した姿を見ることができる。

さらに、高等弁務官事務所の横にもメタセコイアが植えられている。驚くべきことに、大阪市立大学が返還されたのが1955年であったのに対し、同大学の本部棟(IG Farbenハウス)の返還は2001年になってようやく実現された。



フランクフルト大学のメタセコイア

4. リンネからツンベルク、世界遺産、EU、揭示版の意味

ここではメタセコイアなど植物のアイコンを創造的に用いた事例として、①国を跨いだ世界遺産、②文理芸術の融合と滞在型コレジウム、③メタセコイアを主役とした世界遺産の提案、④揭示板の意味、について述べていこう。

トランスナショナルな(1)国を跨いだ世界遺産

植物と文化の近代的な関わりの探索は、植物分類学の泰斗であるカール・フォン・リンネに遡ることができる。弟子のカール・ツンベルグは徳川時代にオランダ東インド会社の医師として来日し、日本の植物をオランダや本国に持ち帰り、その学問的成果を世界で初めて出版した(彼は大阪を日本のパリと称し、人々と草木との距離の近さを絶賛した)。それから200年以上の後に、ウブサラ市は、世界遺産の候補として箱根や長崎(出島)、パリやケープタウンなどを含めた連携型の形で提案され、暫定リストに含められた。



トランスナショナルな国を跨いだ世界遺産の例:「リンネが構築した体系的生物学の生成による世界遺産の提案」

近年、ユネスコ文化遺産や記憶遺産などの審査プロセスや認定後において、国際的な紛争や対立が散見されてきた。これは一つには「ユネスコの国内委員会で決定したものしか審査のテーブルに乗せない」という手続き的な問題にも起因しているし、教育制度や教育内容が硬直化し、遺産や文化に関する理解や寛容性が低下していることも大きく影響している。だが、このウプサラ市の国を跨いだ文化遺産の提案は見直しがなされ、ウプサラ市を中心とするスウェーデン国内だけの提案に縮小されてしまった。

(2) 文・理・芸術の融合と潜在型コレジウム

こうした状況を打開する一つの方策として、国際問題を文化や芸術、社会・人文・自然科学の融合により、新たな理論・実践を生み出すとともに、国際機関の職員や国際公務員、社会起業家、NPO 代表などを志望する人材を育成することが必要である。ここでは、UNESCO、ICOMOS、UNDP、UNEP（大阪・鶴見緑地）などの国際機関やスウェーデン王立科学院、ウプサラ大学、チューリッヒ大学、NYU などとの提携による「都市・文化デザイン コレジウム」(Collegium for Urban Culture and Design, UCD)の設立を提案したい。ここでコレジウムとは、大学など従来の研究機関には存在しなかった先端的な領域の第一級の研究者を（半年程度）招聘し、社会・人文・自然科学、および芸術・文化を融合する研究の推進と生活（食・住）との連結を実現するための組織体であり、中長期的な視野によって新たな研究を推進する組織を意味するものである。ここでは科学の諸領域を結びつける「連結環」として芸術・文化に最大の価値が与えられる。これは教員と学生が寝食を共にしながら論文(essay)で知の交換を行う、オックスフォードやケンブリッジの「カレッジ」での世界レベルの市民や芸術家と協働する仕組みを援用したものともいえよう。



ウプサラ大学リンネの庭に隣接するスウェーデン国立先端研究コレジウム
(メタセコイアがこの奥にある)

(3) メタセコイアをアクター（主役）とした国際ネットワークの構築

上述したウプサラ市による国を跨いだ世界遺産の頓挫を受けて、以下では樹木や植物園などを主役（アクター）とした国際ネットワーク型の世界遺産に向けての研究プロジェクト案を以下に述べたい。

ここでは、吉野杉やメタセコイアをはじめ様々な樹木、植物由来の素材（柿渋や漆、藍など）や型紙など旧来は道具とされてきたもの、楽器製作などの活動を研究対象とし、モノやコト、それを支えるヒトや記憶などの関係の高度化を目的とするものである。すなわち、「健康増進」や「防災」、紛争解決に資するための「文化創造性」の活用などを地球規模で行い、国際機関や大学などの研究機関、行政やNPO などの間のネットワークの構築を通じ、都市や地域の復元力を高めることを目指す。ポリシーとしては、経済活動の基底にあり続ける植物をアクターであり媒介環として位置づけ、芸術や文化と生産・販売活動との接点を模索する「植物社会デザイン」および「利他主義」（他を利することによって自分の存在意義を見出すこと）である。

その候補都市としては、大阪市、交野市、枚方市、八尾市などの大阪府下の各市町村、吉野町や各務原市、上海市、杭州市、ソウル市、釜山市、チューリッヒ市やバルセロナ市などの欧米の諸都市、これをサポートする UNESCO 創造都市と世界遺産プログラム、および EU 文化首都とそれらへの日本の支援団体 (EU ジャパンフェスト日本委員会や日本 UNESCO) などである。

(4) メタセコイア掲示板の意味：大阪市立大学・田中記念館前の看板

田中記念館が 40 年ぶりに改装された。竣工は 1974 年(昭和 49 年)、開館は 1975 年 8 月 11 日であった。私の入学の前年のことであり、大学生の生活をスタートさせる年に完成を見た。その門前には四季折々の姿に変化する「生ける化石」のメタセコイアがあった。現在は 1F レストラン「メタセコイア」になっている場所は開館当初は学生のための自由な場として、事務所からオセロや将棋などを借りてきて遊ぶこともできたし、2F は午前から夕方まではゆったりとした空間のカフェとして、学生の人気の場所であった。

この度、大学史資料室と全学同窓会から、老朽化したメタセコイアのパネルを一新するので原稿を書いてくれない

かという依頼を受け、大阪市立自然史博物館・主任学芸員の塚腰実氏と共同で作成した。

「生きた化石」として親しまれ、四季折々の姿を見せ、樹形がリズムカルな「メタセコイア」(和名：^{あけぼのすま}曙杉、Dawn Redwood)。この美しい木は、日本—中国—アメリカの人々のつながりによって 100 万年の時を経て、現在その雄姿を見せている。本学理学部教授であった三木 茂博士(1901~74)は 1941 年に、新生代新第三紀から第四紀にかけて落羽松(ヌマスギ)やセコイアと分類されていた植物化石に異なるものが混じっていることを見出し、「メタセコイア」と命名した。だが、中国・四川省磨刀溪(現在の湖北省)で地元住民に祀られていた樹木が、三木教授の命名した化石と同一であることを、北京師範大学の胡先驪教授と中央大学(南京)の鄭万鈞教授が 1945 年に明らかにする。アメリカのチェイニー博士(Ralph W. Chaney)は、混乱状態であった 1948 年に現地を訪問し、種子を採集しパークレーに持ち帰って苗木を育てた。その上で、旧知の間柄であった三木教授にもし保存会を設立すれば苗木を送ると伝えた。GHQ 天然資源局長であり、保存会のメンバーにも名を連ねていたスタンフォード教授のスケンク氏の配慮もあってか、1950 年、占領下の日本に 100 本の苗木が到着し、その前年には皇居にも届けられる。当時、杉本キャンパスは GHQ に接収されていたが、保存会は挿し木から苗木を作り、小・中学校などに配布された。現在、交野市私市の附属植物園には、1950 年にアメリカから贈られた苗木が大木となっている。



田中記念館のメタセコイアと大阪市立自然史博物館・塚腰実氏と筆者による掲示板

5. 文化創造のフレームワークとメタセコイア

岡野(2015)では、アクターネットワーク理論(ANT)を用いて、ヒトとモノ、知、場・道、集り・交流、記憶の 5 つのフェーズから文化創造について分析してきた。ここでアクターネットワークとは、1980 年代後半からフランスの

M. カロンと B. ラトゥール、イギリスの J. ローが中心となって発展させた理論であり、その特徴として次の二点に集約できる(Amin & Cohendet 2004)。

第一に、方法論的な特徴として、研究の初期段階から一切の前提を置かない点あげられる。いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。こうした視点からすれば、内的意図を持ち合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との区別は単なるイデオロギーにすぎないことがわかる。ここで日本語では「者」と「物」の意味を含んでおり、絶対的な区別はなかったことに注目すべきである。

ANT の核心として、西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギ的区別を超越しようとしていることにある。すなわち、アクター(行為者)は近代的な人間主体を示すアクター(acter)ではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェンシー(行為能力)であるアクタント(actant)とみなされる。これにより、ヒトとモノの結合からエージェンシー(行為能力)が生まれ、アクターネットワークに分散されていると考える。旧来のパラダイムでは、人間だけが行為の中心者であったが、アクターネットワーク理論では、非人間物にもエージェンシーを認めることによって、同等のアクターとして研究対象に含められる。

第二に、意図(intentionality)を行為から分離することによって、「物のエージェンシー化」(行為主体性)を可能とする。「意図」というのは行為の基準でなくなる。ANT は、社会的事実としての「意図」は、行為の原因ではなく、逆に「意図」をネットワークが生じる行為の結果と捉える道を開くことになる(ファビオ 2011)。

さらに、ANT を基礎づけるものとして「翻訳」(translation)がある。すなわち、「アクターが他のアクターを取り込むための方法」あるいは「種々のアクターが変化し結びつけられていく過程」と意味づけられよう。

次に、岡野(2013)で取り上げた分析のフレームワークである「ヒト・モノと創造性」、「知と創造性」、「場・みちと創造性」、「集り・交流と創造性」を要約し、自然と文化創造性・復元力の考察を行ってみよう。

アクター (アクタント)	メタセコイア
ヒト・モノ (両者の結合)	進駐軍 (大阪市立大学・ゲーテ大学・家族住宅 など) 駐屯地 (桂・宇治など) 野球場 (神 宮第二 松島) テニスコート (東京ローンテ ニスクラブなど) 芸術・映画 (春川市・「冬の ソナタ」) 聖イグナチオ教会 (上智大学) 福 田美亮
知	リンネ ダーウィン 植物学者のネットワーク チェイニー 胡 鄭 三木茂 天然資源局長 (スケンク) 中国・土家族の「創世記」
場・道・広場	人類の来た道 (出アフリカ) 世界航路 公園 (靱、浜寺、平和公園、大阪城公園 沢之町公 園など) 住居 植物園 (パリ、ライデンなど) 博物館 飛行場 (各務原など) 平和公園 ピー ス通り 遺跡 学校 (大阪市立大学・夕陽丘高 校・市岡商業・住吉高校・昭和中学・阿倍野小 学校・オックスフォード大学 ⁴⁷) 冬のソナタ
集り・交流 (コト)	メタセコイア保存会 イベント 結婚 (土家 族・ご成婚) 祈り 日想観
記憶	古墳 (五色塚古墳・禁野車塚古墳など) 葬式 (土家族) 祠 (神木) 家族の記憶

アクタントの各カテゴリーは「主役」になるだけでなく、(その意図とは別に)他のアクタントの間の「緩衝材」として機能する場合もあり、意図に反し逆機能的なスペースを創り出すことになる。時には過去の事実や記憶が進展を妨げることになることもある。

それらの植物の由来や各国における文化的な意味の共通点や差異を中心に、その樹木を守ってきた市民や農民、世界に伝えた日本・中国・韓国・アメリカなどの研究者間のネットワークについて、時空を超えた創造的空間としての都市を仏教や儒教の文化において捉え、都市においての生活からもたらされる文化の多様性や拡張・広がりを研究してきた。

銀杏とともに「生きた化石」とされる「メタセコイア」は、中国では「水杉」と称され、上海や南京、杭州などにおいてアカデミックなシンボルとして大学の本部棟の中心に植えられてきた。これに対し、日本の場合は恐竜時代に

47 オックスフォードについては、大学附属植物園、それに隣接するマートンカレッジ (皇太子様留学)、TS エリオット記念館などに植えられている。

絶滅したこともあって、中国の生きたメタセコイアを上述のようにアメリカを経由し、大阪市立大学附属植物園を生産基地として西日本に広げられた。成長のスピードが速いため「すくすくと健やかに育てほしい」という願いから小・中学校の校庭に植えられたほか、古墳の発掘の終了後にその周辺を囲むように植えられ「太古の森」の象徴として位置づけられてきた。

約1億年前の中生代白亜紀の温暖期には、グリーンランドまでメタセコイア林が分布し、その後の寒冷化で、北アメリカ、アジア、ヨーロッパ東部にまで南下した。そして、日本からは約100万年前に消滅したが、中国では生き残っていた。超大陸パンゲア時代には、生きたメタセコイアが発見された南中国と日本やカリフォルニアは一直線で結ばれていたことも重要な意味を持っている。つまり、日本やアメリカでは絶滅したメタセコイアが、なぜ中国で生き延びたのかという問題を解くためには、古生物学、植物学、地質学、地形学、民俗学を統合した学際的研究が必要である。

仏教や儒教の伝播とともに重要な植物として、仏像や寺院に使われる樹木の種類の比較や発展プロセス、さらには各地域の民族や宗教と仏教・儒教との融合や独特な文化の醸成の理解と寛容性との関わり、それらによるビジネスのあり方への影響、なども重要な論点である。仏像というモノが、異民族の文化や技法の変遷に影響を受け、それぞれの民族の生活において独自に変化し伝播していったとみることができるのであり、商業 (ビジネス) と文化の密接な関わりとシルクロードなどモノの道と宗教の道との関係性なども教材に盛り込む必要がある。また、歴史の断面の一つ一つが現代のわれわれの生活に直接的な関係性を持っていることも重要な問題意識である。

「メタセコイア」は、都市研究プラザがこれまで提案してきた「持続的で包摂的な創造都市」の在り様を体現している。すなわち、発見した人々とそれを学術的に検証し、世界的なネットワークでその存在を知らせるとともに、中国の内戦下にアメリカの市民団体である「レッドウッド保護団」の資金的援助を受けて採取した種を持ち帰り、終戦後、生育環境の類似した日本に苗木を大量に送るというチェイニー教授 (カリフォルニア大学) の行動力と、生きたメタセコイアを神木として信仰の対象にしてきた四川省の農民家族 (少数民族) と地域のネットワークなど、持続的で包摂的な社会の在り様を観察し、現状の社会と比較し、

多様な知見を得ることができる。

こうした事例は、決定後に国際的な紛争や対立が起きている最近の文化遺産や記憶遺産の状況に一石を投じるものであろうし、インドを発祥としながら東アジアを核とする仏教や儒教と樹木・植物との関わりについてのエピソードなども永く人々に伝えるべき事柄である。上述したように、昨年に文化遺産に認定されたシンガポール植物園は、戦時中、郡場寛氏（元京大教授、メタセコイアの三木茂の指導教官）等が E.J.H.コーナー氏（後年、ケンブリッジ大学教授・ロンドン・リンネ協会幹部）とともに観察・研究し、園を破壊から守ったものであるが、時を経るにしたがってそれを知る人も少なくなってきた。また、科学博物館や自然史博物館では植物学や地質学など自然科学の学問そのものに焦点が当てられ、国を跨いだ文化的意味合いなどについては取り上げられないことが多い。

参考文献

大阪府立夕陽丘高等学校 (1986) 『大阪府立夕陽丘高等学校創立八十周年記念誌』

コーナー, E.J.H. (1982) 『思い出の昭南博物館: 占領下シンガポールと徳川侯』 (中公新書) 中央公論新社。

Gittlen, W. (1999) *Discovered Alive: The Story of the Chinese Redwood*, Pierside

Invited Paper

Metasequoia from the past offers music to the future

D. W. Larson

Department of Integrative Biology, University of Guelph

Abstract

Old-growth forests around the world were once the source of wood for a wide variety of cultural objects including musical instruments. Amongst stringed instruments the guitar remains as the world's most popular form, yet the supply of excellent guitar tonewoods has declined and that pattern is predicted to continue to exhaustion in the next century. *Metasequoia glyptostroboides* (Dawn redwood) was 100 million years ago the planet's most abundant tree but by 20 million years ago its range had been reduced and in the early 1940's was only known from the fossil record. Living *Metasequoia* was rediscovered in China in 1944 and seeds of this species were distributed globally by 1947 leading to large-scale plantings around the world in the temperate zone. Trees of this species by 2010 were up to 2 m in diameter and fully capable of being milled into lumber. To investigate whether horticulturally produced *M. glyptostroboides* could be used in the supply chain for guitar builders now and in the future, a large local specimen of this species was milled. Quartersawn bookmatched panels were then prepared for use in building 3 instruments. Two additional instruments were built to the same dimensions but using old-growth *Thuja* and *Picea*. Simple experiments were conducted to determine the mechanical properties of the wood after drying. Also, different bracing patterns were used on the guitars to determine if stability and tone produced by the wood would make it a suitable replacement for old-growth *Picea*, *Thuja*, and *Sequoia* typically used for instrument tops. The experiments suggest that horticulturally produced *M. glyptostroboides* is a good tonewood for guitar tops plates, and they further suggest that there is no limit to how much tonewood could be produced from this species in the future.

Evolutionary history, original global distribution, and near extinction

Richard Dawkins (1982) has argued that despite the decline in the importance of biological evolution to success in the human species, cultural evolution continues to accelerate as new ideas overcome old ones at an ever-increasing rate. This paper deals with one tiny aspect of this cultural evolution and asks how people in the future will build stringed instruments such as guitars, if the once-abundant supplies of traditional old-growth tonewoods have been driven to extinction? Specifically, this paper addresses the question "Can horticulturally-produced *M. glyptostroboides* be used in the supply chain for instrument makers now, and in the future?"

Angiospermous plants have dominated the biodiversity of our planet only for the past 70 million years or so. Prior to that, gymnospermous plants represented all of the terrestrial vegetation on the earth. Starting about 250 million years ago the planet experienced rapid range expansion of coniferous trees and by one hundred million years ago in the Jurassic virtually all the terrestrial surface of the earth was covered by them. *M. glyptostroboides* appeared at that time (Hewes 1981) and at its peak abundance 45 million years ago it formed dense forests in what is now the Canadian high arctic (Jahren 2007). Incidentally, some of these forests were never glaciated and hence coarse woody debris from this forest including logs, stumps, branches, foliage, and seeds are still entrained in strata at Axel

Heiberg Island and visible on the surface (Basinger (1991).



Fig. 1. Logs of compressed 45 Million year old *Metasequoia* on Axel Heiberg Island. Photo courtesy of Ian MacNeil.

In the Miocene by about 20 million years B.P., however, *M. glyptostrobooides* disappeared from almost all of its range as global climate cooled. It was thought to have gone extinct at about this time and was only known from the fossil record until 1944 when it was rediscovered.

People who lament the loss of wilderness because of human activity sometimes overlook the significance of the rediscovery. While it is true that humans during the Anthropocene have appropriated over 83 % of the terrestrial surface of the earth (Sanderson et. al 2002), the remaining wild areas of the planet provide organisms and ecosystem services of great value to humanity (Balmford et al. 2002) Wang and Hu's rediscovery of living of *M. glyptostrobooides* in 1944 (Hu and Wang 1948, Hu 1948, Chaney 1948, Merrill 1948) and the subsequent global redistribution of its seeds starting in 1947 is a great example of how small patches of wilderness can add great value to human culture.

Rediscovery

Of course *Metasequoia* was itself not even named until 1941 when a Japanese paleobotanist Shigeru Miki (Miki 1941) reinvestigated 20 million year old fossils of a previously unidentified species of redwood. Ironically about the same time a local Chinese forestry worker Tsang Wang had come across some living trees in Sechuan Province that he could not immediately identify. A specimen was sent to Wan Chun Cheng who forwarded the specimen first to his colleague H.H. Hu, who in turn sent samples to his friend paleobotanist Ralph Chaney at the University of California, Berkeley. Cheng also sent samples to E.D. Merrill of Harvard University at about the same time. Chaney (1948) confirmed the existence of living *M. glyptostrobooides* after visiting the site. At the time the rediscovery of a fossil species was considered one of the great scientific events of the century. Shortly thereafter and in subsequent years there was massive collection and world-wide distribution of seeds. Trees were planted in both the north and south temperate zones around the world starting in 1948. Such plantings have produced trees that are now sometimes 2-3 m in diameter and close to 35 m tall. Interest in the rediscovery of this species was sufficiently intense that academic warfare almost broke out in China pitting Wang, Cheng, and Hu against each other with respect to who made the initial discovery (in my opinion they all did). Warfare also swept up the teams from Berkeley headed by Chaney and Harvard headed by Merrill – both of whom had been in contact and had made trips to China to have seed collected. Again, credit in the author's opinion should be assigned to both teams for successfully alerting the horticultural world to the existence of this fine coniferous living fossil species.



Fig. 2. Rosette of the Storyteller Guitar showing the dark rings of 45 million year old *Metasequoia* on the outside of the rosette, and light coloured rings of recently harvested *Metasequoia* from a tree growing in Guelph, Ontario, Canada.

Axel Heiberg Island and the Storyteller Guitar

While I have spent my academic life immersed in the ecology of cliff ecosystems and their ancient forests (Larson et al. 2000, Kelly and Larson 2008), I have also been active in science teaching and guitar building. My goal had always been to use musical instruments to inspire students to see the union of art and science (Larson 2011) as advocated by Jacob Bronowski (1973). In 2006 I started collecting scientific artifacts with the intension of building one instrument composed entirely of these artifacts. The resulting Storyteller Guitar was composed of 3,562 separate pieces included artifacts from six continents, thirty-five businesses, and sixty-eight people. Having discovered the ancient cliff face forests of the Niagara Escarpment in 1988 (Kelly and Larson 2008), other researchers with experience with ancient forests would often seek me out the topic of ancient trees. One such person was Ian MacNeil of the Canadian Parks Service who had been working on Axel Heiberg Island's 45 million year old *Metasequoia* fossils. During one conversation MacNeil offered a sample of the compressed wood from the site to be used in the Storyteller Guitar project. It was decided to include this wood (looking very much like rosewood) in the rosette of the instrument. It was joined with some newly cut wood of the same species grown locally.



Fig. 3. A living 50 year old *Metasequoia* growing on the campus of the University of Guelph, Ontario, Canada.

A single large *M. glyptostroboides* harvested in southern Ontario.

Once the Storyteller Guitar book was published interest was generated in all aspects of both science and art as discussed in the book. Andrew Poynter at the time was the owner of a company (A & M Wood Specialty) in Cambridge, Ontario and he called one day with a request to identify a massive bole from a tree he had purchased from a landowner in Paris, Ontario. The tree was about 60 feet tall and over 1 m diameter at the base. I identified the tree for him as a specimen of *M. glyptostroboides* that had obviously been planted very early in the history of the

distribution of seeds in southern Ontario, Canada. I made a request to Andrew that he provide me with a small amount of the best quartersawn material in the log when the wood was dry. I explained that I wanted to build a series of instruments using this species because as far as I could discover, no one had ever tried using *Metasequoia* as a tonewood. The reason for this is probably related to the time required to grow stems to a sufficiently large size. Trees planted in the late 1940's and early 1950's are just now just big enough to harvest for use in instruments. The possibility was exciting of using horticulturally produced wood of this new species at a time when supplies are declining of old-growth spruce, cedar and redwood (the typically-used top tonewoods for guitars). So with this exciting possibility in mind, Andrew agreed. Two years later his colleague Peter MacSween met with me to select, cut, and resaw three sets of bookmatched quartersawn panels from one single large board and so the experiments and the building began.



Fig. 4. Stages in the processing of the wood from the *Metasequoia* harvested in Paris, Ontario, Canada. (a) air-dried milled lumber at A & M Wood Specialty, (b) since board selected for extraction of quartersawn bookmatched panels, (c) three bookmatched sets of top tonewood.

Processing and measuring the properties of the wood.

The panels continued to dry further while simple experiments were set up to determine the mechanical characteristics of the wood in comparison to samples of *Picea sitchensis*, *Picea abies* and *Thuja plicata* cut to the exact same dimensions. These experiments were very unsophisticated and not intended at the time to represent stress-loading trials of a type that would be used in mechanical engineering research (Bennett 2016). To test the mechanical properties of the wood parallel to the grain, samples of each species were prepared in strips measuring 2.5 cm in width, 0.7 cm in thickness and 46 cm in length. Each sample was quartersawn and had zero runout – meaning that all wood fibres were parallel to the surface of the wood in both the x and y planes. Despite the lack of runout of the grain, there appeared to be no literature on the microfibril angle of tracheids of *M. glyptostrobooides* unlike the situation described by Hori et al. for other species (2002). In that paper, for example, it was shown that sitka spruce (*Picea sitchensis*) is an excellent wood to use for soundboards on acoustic instruments because it shows little or no acoustic damping and hence the wood propagates sound waves better than other species. Damping is normally caused by cellulose microfibrils that are not parallel to the axis of the tracheids: string vibrations in such

wood convert more energy to heat and less to tone. Steeper angles cause greater damping but at present there is no information available on microfibril angles in the tracheids of *M. Glyptostoboides* hence one cannot predict the extent of acoustic damping in this species.

A second set of wood samples was prepared to test the mechanical properties across the grain. These samples measured 2.5 cm in width, 0.7 cm in thickness and 15 cm in length. In all trials, a spring scale was attached to the centre of the sample while the ends of each sample were supported. A force of 1000 g was applied to the scale and the downward deflection of the centre of the sample was measured.



Fig. 5. Illustration of simple setup for measuring strength of wood samples.

would behave like very weak and fast growing *Thuja*. Hence the construction of the first guitar took place with this in mind.

Construction of the first guitar

The woods selected for the construction of the first *Metasequoia* guitar are shown in **Table 2** along with the woods chosen for the subsequent 4 guitars made for comparative purposes. It must be understood that conducting a controlled experimental build of guitars is almost impossible. Proper experimental design requires that the effect of one ‘treatment’ be tested on two populations of items that vary only with respect to the single ‘treatment’ variable . The two populations should be as large as possible to permit random variation unrelated to the ‘treatment’ to be accounted for statistically. In most experiments, the population sizes of test items is often between 5 and 20 (yielding between 4 and 19 degrees of freedom in statistical tests) but the absolute minimum number of samples within treatment is 2 (yielding 1 degree of freedom). Any experiment conducted with only 1 degree of freedom is extremely weak and is therefore ill advised. The implications of such statistical common sense is that to test how guitar parts function, multiple instruments should be constructed that are identical in all respects except the one component considered to be the ‘treatment’. Clearly this would be an exceptionally challenging and expensive requirement for any guitar maker and I suspect this challenge explains why research of this type has never been done. The usual approach is to select only one separate component of an instrument – for example the bridge material, the fingerboard material etc. and then conduct experiments just on the isolated part rather than as part of a complete instrument. Of course such an approach permits proper experimental design, but does not permit whole instruments to be tested as performing machines.

To solve this problem as an amateur builder who is aware of the weakness of anecdotal evidence, the first guitar was constructed knowing that two more whole guitars could be built from the remaining two panels that were serial sectioned adjacent to the first set of panels. Hence the woods used for the three instruments were as identical to each

other as possible. The first and second guitars were identical to each other except for the bracing pattern for the top. The sides were both constructed using *A. saccharum* (sugar maple), the back was *Prunus serotina* (black cherry) and the neck was *Swietenia macrophylla* (*South American mahogany*). The second and third guitars were identical to each other (both used scalloped bracing) except that *Dalbergia nigra* (Brazilian rosewood) was used for the back and sides and *Rhamnus cathartica* (common buckthorn) was used for the fingerboard. The fourth instrument was dimensionally equivalent to the first three units, but traditional woods were used such as *Picea abies* for the top and *Acer saccharum* for the back. The fifth unit included a *Thuja plicata*, *A. saccharum* sides, a *P. serotina* back, and a *S. macrophylla* neck.

Once the first guitar was completed, it was allowed to rest before the other units were started. Hence there is additional variability in the time that has lapsed since completion. All 5 of the instruments were fitted with passive K & K piezo electric pickups and all of the units have been used in live performances of the author’s music.



Fig. 6. Collection of three guitars with *Metasequoia* top tonewoods, from left to right: #1 with tall bracing, #2 with scalloped bracing, #3 with scalloped bracing and *Dalbergia nigra* back and sides, #4 with scalloped bracing and *Picea abies* top, #5 with scalloped bracing and *Thuja plicata* top.

The results of these experiments are presented in **Table 1a**. The specific gravity and mean ring width was also measured for all samples and those values are presented in **Table 1b**. The results of these simple tests were very clear. The downward deflection was least in *Picea*, greater in *Thuja* and greatest by a wide degree in *Metasequoia*. This was true for both orientation parallel to the grain and orthogonal to the grain. Specific gravity was greatest in *Picea* (0.40), less in *Thuja* (0.35) and least in *Metasequoia* (0.30). Ring widths in the *Thuja* and *Picea* used were small varying between 0.1 and 5 mm, whereas for *Metasequoia*, ring widths were extremely large varying from 6 to 12 mm.

Taken together, the differences between *Metasequoia* and the other traditionally used top tonewood species predicted that this species might be unsuitable to use as a top tonewood for guitars. Both Bennett (2016) and Wegst (2006) have provided very detailed acoustical engineering reports on woods traditionally used in guitars and other stringed instruments, but unfortunately there appears to be no formal information available in the wood database to permit proper comparisons between *Metasequoia* and other species. What can be concluded from the simple experiments conducted, was that *M. glyptostrobooides*

Performance of the guitars and implications for the future of lutherie

The first instrument had the thickest top plate and one additional lower face brace.



Fig. 7. Bracing pattern of the top plate for *Metasequoia*#1.

Additionally, the braces were not scalloped. Once the instrument was strung up, there was no indication that the top would belly towards the soundhole. Three years have passed since construction and still the top is stable. The instrument is loud with a strong midrange but restricted bottom end. It remains easy to play, stays in tune, and does not change shape, warp, or buckle in any way from season to season. It does not have a pickguard attached to the top to protect from abrasion. As a result from energetic performances in concerts, the top has been scratched. A short video <https://www.youtube.com/watch?v=JxnxTP4qkhQ> is available allowing the instrument to be heard.

The second instrument was nearly identical to the first but included scalloped bracing.



Fig. 8. Scalloped bracing of the top plate for *Metasquoia*# 2.

This instrument has also proved stable over time, has undergone no structural distortions and the top has shown no signs of bellying towards the soundhole despite weaker bracing on the top. The sound is still well defined on the high frequencies but the bottom end is much more pronounced than for unit 1. Unit 3 was constructed with scalloped bracing as well, but Brazilian rosewood was used for the back and sides in order to test the long-held claim that this hardwood species – now severely restricted in terms of harvest and international trade – is the superior tonewood for stringed instruments. When units 2 and 3 are compared, no significant differences could be detected by live audiences. An oscilloscope may indeed show tonal differences between units 2 & 3, but since audiences rarely come equipped with oscilloscopes attached to their laps, the experimental units seem to suggest that claims of the superiority of Brazilian Rosewood may be based more on dogma and history than evidence.

Units 4 and 5 used traditional tonewoods but were otherwise very similar to the three *Metasequoia* instruments. Conventional thinking would suggest that the tone produced from the old growth timbers used for the top plates of

these instruments would provide much more balanced, rich and strongly projecting tone. Instead what the collection of the five instruments suggests is that the differences among them are very small indeed. Further, this similarity of tone, playability, stability, weight and appearance suggests that *Metasequoia* is a perfectly suitable wood for use in guitar making at the present time.

Conclusions

At the beginning of this paper the question was asked how will people in the future build stringed instruments, if all the once-abundant supplies of tonewoods have been driven to extinction? Can horticulturally produced *M. glyptostrobooides* be used in the supply chain for guitar builders now and in the future? The answer to this question is ‘yes’. If the *Metasequoia* units continue to show structural stability despite pronounced changes in the humidity and temperatures that are experienced in the eastern Canadian landscape, the results of this work suggest that *Metasequoia glyptostrobooides* will be a suitable additional source for luthiers worldwide. How significant a source can this species be? The widespread plantings of this species in horticultural settings around the world, the rapid rate at which it grows, and the enormous sizes that it attains in suitable locations suggests that small and medium sized plantations of *Metasequoia* can be planted today for use in the supply chain at the end of this century. The dependence of guitar makers on an endless supply of old-growth spruce, cedar and redwood is a shortsighted feature of their business plan that can be compensated for by investing now in plantations of the species they harvest from the wild. And now it can be asserted that *Metasequoia glyptostrobooides*, a species once thought extinct but then brought back from the dead by farsighted scientists - can be one of these species.

Acknowledgements

The author thanks Andrew Poynter and Peter MacSween from A & M Wood Specialty, Cambridge Ontario for supplying beautifully seasoned and sectioned wood. Mark Stutman from Folkway Music, Waterloo, Ontario provided valuable constructive feedback on the design of unit 1 after having seen and played it. **Table 1a.** Strength comparison of the wood of *M. glyptostrobooides*, *Picea sitchensis*, *Picea abies*, and *Thuja plicata* parallel to and orthogonal to the grain. Values are mm. of deflection. Samples for parallel treatment were 2.5 wide, 0.7 thick and 46 long while those for the orthogonal treatment were 2.5 cm wide, 0.7 cm thick and 15 cm long.

Treatment	M.g	P.s	P.a	T.p
Deflection under 1.0 kg centre load parallel to grain	11.5	6.0	6.0	8.2
deflection under 1.0 kg centre load orthogonal to grain	8.5	4.0	3.6	5.1
b. specific gravity and ring width/ring count properties of the woods used				
specific gravity	0.30	0.45	0.40	0.35

g/cm³

average ring width	9.5	1.28	5.2	1.16
ring count to centreline	19	280	70	310

Table 2. Construction details for the five guitars used. : Three units used *M. glyptostrobooides* (M.g), one unit using traditional old growth *P.abies*, and one using old growth *T. plicata*. Abbreviations: M.g, *Metasequoia glyptostrobooides* (Dawn Redwood) , P.a., *Picea abies*, (European spruce), P. s *Picea sitchensis* (sitka spruce), Pr.s, *Prunus serotina* (Black Cherry) , A.s, *Acer saccharum* (Sugar maple), D.n, *Dalbergia nigra* (Brazilian Rosewood), D.l, *Dalbergia latifolia* (Indian rosewood), C.s, *Castanea sativa* (American chestnut), R.c, *Rhamnus cathartica*, S.(common buckthorn), S.m *Swietenia macrophylla* (south American mahogany), O.p *Ocotea porosa*, (Imbuia) , A.m *Acacia melanoxyton*, (Australian blackwood), X- xbracing, scal- scalloped bracing, LFB – lower face brace.

Component	Guitar				
	M.g. 1	M.g. 2	M.g 3	P.a.	T.p
Top species	M.g	M.g	M.g	P.a	T.p
thickness (mm)	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9
Bracing sp.	P.s	P.s	P.s	P.s	P.s
Bracing pattern	X+2 LFB	X+scal	X+scal	X+scal	X
Back sp.	Pr.s	Pr.s	D.n	A.s	Pr.s
thickness (mm)	2.5	2.5	2.2	2.3	2.4
Bracing pattern	ladder	ladder	ladder	ladder	ladder
Side sp.	A.s	A.s	D.n	C.s	A.s
thickness(mm)	2.2	2.3	2.2	2.2	2.4
Neck sp.	S.m	S.m	S.m	A.s	S.m
Fingerboard sp.	D.l	D.l	R.c	R.c	O.p
Bridge sp.	D.n	D.h	R.c	R.c	A.m
Total weight (g)	2040	2120	2060	1960	1870
Scale length (mm)	625	625	625	625	635
Max length (mm)	1000	1000	1000	1000	1000
Max width (mm)	360	360	360	360	360
Comp. date. (m/y)	03/13	06/13	07/16	08/16	06/11

References

- Balmford, a., Bruner, a., Cooper, P., Costanza, R., Farber, s., Green, R.E., Jenkins, M., Jefferiss, P., Jessamy, J., Munro, K., Myers, N., Naeem, S., Paavola, J., Rayment, S., Rosendo, S., Roughgarden, J., Trumper, K., and Turner R.K. 2002. Economic reasons for conserving wild nature. *Science* 297, 950-953. et al. 2002
- Basinger, J. 1991. The fossil forests of Buchanan Lake, formation (early tertiary), Axel Heiberg Island, Canadian Arctic Archipelago: preliminary floristics and paleoclimate. *Geol. Surv. Canada Bulletin*, 403, 39-65.
- Bennett B.C. 2016. The sound of trees: wood selection in guitars and other chordophones. *Economic Botany* 70, 49-63.
- Bronowski, J. 1973. *The ascent of man*. (Boston, USA, Little Brown)
- Chaney, R.W. 1948. Redwoods in China. *Nat. Hist. Mag.* 47, 440-444.
- Dawkins, R. 1982. *The Extended Phenotype*. (Oxford, U.K., Freeman)
- Hewes, J.J. 1981. *Redwoods*. (New York, U.S.A., Gallery Books.
- Hori, R., Muller, M., Watanabe, U., Lichenegger, H.C., Fratzl, P., and Sugiyama, J. 2002. The importance of season differences in cellulose microfibril angle in softwoods in determining acoustic properties. *J. Mat. Sci.* 37, 4279-4284.
- Hu, H.H. 1948. How Metasequoia, the "living Fossil". Was discovered in China. *J. New York Bot. Garden.* 49, 201-207.
- Hu, H.H., and Cheng, W.C. 1948. On the new families Metasequoiaceae and on Metasequoia glyptostroboides, a living species of the genus Metasequoia found in Szechuang and Hupeh. *Bull Fan Mem. Inst. Biol. New series* 1, 153-163
- Jahren, A.H. 2007. The arctic forest of the middle Eocene. *Ann. Rev. Earth Planet Sci.* 35, 509-40.
- Kelly, P.E., and Larson, D.W. 2008. *The Last Stand*. Toronto, Canada, Dundum).
- Larson, D.W. 2011. *Storyteller Guitar* (Toronto, Canada: Dundum)
- Larson, D.W., Matthes, U., and Kelly, P.E. 2000. *Cliff Ecology*. Cambridge, U.K, Cambridge University Press.
- Merrill, E.D. 1948. *A living Metasequoia in China*. *Science* 107, 140.
- Miki, S. 1941. On the change of flora in eastern Asia since Tertiary period. *Jap. J. Bot.* 11, 237-303.
- Sanderson, E.W., Jaiteh, M., Levy, M.A., Redford, K.H., Wannebo, A.V., and Woolmer, G. 2002. *The Human Footprint and the last of the wild*. *Bioscience*, 52, 891-904.
- Wang, G.Q. 1948. Before and after of Metasequoia's discovery. *Forestry Newsletter.* 4/5, 5-6. (in Chinese)
- Yang, H. 1998. From fossils to molecules: the Metasequoia tale continues. *Arnoldia* 58, 60-71.
- Wegst, U.G.K. 2006. Wood for sound. *Am. J. Bot.* 93, 1539-1448.

Part 2

2017年大阪市立大学国際学術シンポジウム「人と植物の共生」

Osaka City University International Conference 2017

Symbiosis of People and Plants for the Future of the City

第2部「植物と文化創造性」⁴⁸

都市生態学への道

Part 2 : Plants and cultural creativity

Road for Urban Ecology

⁴⁸ シンポ直前の6月7-8日には秋篠宮様をお迎えし、日本植物園協会の年次大会も私市植物園および杉本キャンパスで開催され、私市植物園のメタセコイアの下で撮られた記念写真は地元の方々に大きな反響を及ぼした。

趣旨説明

Introduction

第2部では、都市緑化と環境問題、林業の衰退をいかに止めつつ、健康増進、都市の文化的創造性を向上させるというテーマを中心に据え、国内外の研究者や政策担当者、芸術家、市民団体などと共に、緑化政策や文化産業の方向性を考えたい。

まず、ミシェル・フーコーは、言説的実践の断層を切り離し、実践が生成され変形される法則の定式化を行ったうえで、様々な知の体系の間の不連続面を「出土」させ、これまで見えなかったものを見えるように変換する（可視性の創造）手法を「考古学」とよんだ（フーコー1969）。彼はある特定の主張・概念・真理がいかなるものであるかを分析し、連続的な「事実」の連鎖としての系譜において本質や根源的統一性などは存在しない、とする彼独自の「系譜学」を提唱した（Okano 2015b）。重層的な空間を設定し、その時系列での非連続な部分に焦点を当て、なぜそれがそこに関係性として存在しているのかを様々な「言説」（実践よりも）を通じて明らかにするところにフーコーの真骨頂があったといえる。

これに対し、ド・セルトーは、モノが幾千もの過去の実践を生来させ、実践をとおして使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行っている「モノ」に焦点を当てるべきであるという（ド・セルトー 1987, p.17-18）。

さらに、彼はさまざまな集団や個人が、これからも「監視」の網のなかに囚われ続けながらも、他方でいたるところに散らばりながら、戦術的な意味での「創造性」が隠されたかたち（これを「隠密形態」という）をとっているか、この在り様を掘り起こすことが必要であるとする。こうした策略と手続きを行う主体はあくまで「消費者」であり、彼らが反規律の網の目を形成していくと主張する。この点は、フーコーの「考古学」的理解とは逆の発想であるといえる。

第2部の報告セッションでは、ド・セルトーの「隠密形態」を、「倍音」と「酵母」に焦点を当て、国産材を使ったギターやバイオリン、さらに、最近キリンビール研究所が明らかにした「認知症に有効である」との評価が高まっているホップを取り上げる。レセプションではメタセコイア・や吉野杉を使ったギターやバイオリンを示すこととしたい。

学術界からの3つの論文、実務界からの3つの事例から構成されている。まず、自然・植物（樹木）から創造性や復元力を学ぶための仕組みを中心に、植物園と市民との接点の持ち方、内モンゴルの乾燥植物と生活、絵画とマーラーの交響曲との関わりなどの報告か

ら、植物や健康、防災を結びつける文化の多様性について議論する。

まず、トムセン教授からは、欧州のメタセコイアと都市との関係性について、情報アクセスの重要性についてご報告いただく。馬教授および潘教授からは、内モンゴルの乾燥地域の植物の創造性との関わりが報告される⁴⁹。李教授による「大地の歌」は、李白をはじめとする唐の詩に触発された作曲家マーラーの楽曲に触発されたものであり、音楽と絵画との関連性についての理論化が試みられる。

実務界からは、奈良県が開発した「杉」を使ったバイオリン、昭和天皇が愛され大阪市大のシンボルツリーである「メタセコイア」のギター、「ホップ」を利かしたクラフトビールなどを例にあげ、埋め込まれた「倍音」や「酵母」の働きを見据えつつ、新産業やまちづくり、地域活性化について議論を行いたい。

ここで重要な論点として、木材と倍音のメカニズムや、力木（バイオリンでの「バスバー」とギターの「ブレーシング」）の役割と調整のあり方に焦点をあて、音を通した自然の創造性を現出させる在り様について論じる。最後に、ビール醸造におけるホップの役割に着目し、食文化の創造性と「微生物」のコントロールについて議論する。

最後に、招待論文として、植物学者であり、かつギター製造家でもあるダグラス・ラーソン教授（世界で初めてメタセコイアでギターを製作）による論考、および全体の企画・構成に関わる岡野の論考を掲載する。

企画構成・司会 岡野 浩

（大阪市立大学・都市研究プラザおよび経営学研究科）

Chairperson: Hiroshi OKANO

Professor, Urban Research Plaza / Graduate School of Business,

Osaka City University

⁴⁹ ここで想起されるのが、箕面市にある教学寺の三島法城の長男として生まれ、モンゴルで馬の発酵搾乳と出会い、「カルピス」を創り出した三島海運である。また、吉野の山林王土倉庄三郎の次男として生まれ、1917年にカルピスの前身のラクトー株式会社を三島が設立する際に尽力した土倉龍次郎（カルピス社長・会長）も思い出される。

チューリッヒのレッドウッド :

都市環境との統合

Redwood in Zurich:

Integration of Exotic Trees into Urban Environments

ハンス・トムセン (チューリッヒ大学 教授)

Hans Bjarne Thomsen (University of Zurich, Professor and Chair)

スイス・チューリッヒにおけるメタセコイアの植栽の状況を見ながら、どのように採用された都市の重要な部分になったのか、そして他の植物の種がどのように近代ヨーロッパの都市における都市計画の重要な部分となったかについて検討する。とりわけ、緑の空間を管理する市政府の一部門である Grüne Stadt Zurich の事例を紹介し、樹木についてのイベントや病気が原因による大木の伐採など、様々なニュースが共有される。どの樹木がどこにあり、何本あるのかを正確に市民が調べることがなるのに加え、樹木に誇りを持ち、周辺の樹木との身元を特定し、主要な樹木が死んだときに記念儀式を開催したりすることが可能となる。伐採した理由を明確にし、伐採された後のその場所の状況など、市民の理解を得るための情報開示がなされている。こうした透明性は、人間と植物との関係を扱う際の重要な部分である。

キーワード : 都市計画、生物多様性、都市のランドマーク、生物圏、人・植物関係

By examining the case study of Zurich, Switzerland, the presenter will look into ways of how the trees were integrated, not only into city parks, but also into residential areas, major public sites, and in the planning of major thoroughfares, becoming, in time, key landmarks of the city. Towering above all the other tree species, the redwoods of the city have become key representatives of the close ties between humans and plants within urban spaces. This remarkable relationship is further exemplified in the workings of the Grüne Stadt Zurich, a part of the city government that take care of the green spaces within the city. This public organization consists of gardeners, urban planners, and botanists. They plan and guard the green spaces of the city, sending armies of gardeners and workers across the city every day in order to manage its plants. They keep a close account of the all the trees across the city, compiling and updating the data in a homepage that numbers the trees and plants across the city.

Remarkably, this site is open to the public, enabling private persons to search for specific tree species, finding its number

and exact addresses of locations in the city. Not only is the action explained, but the reason for the action and the aftermath: what will happen with the site after, for example, the felling of the tree. This opaqueness is a key part of its handling of the human-plant relationships.

Keywords: Urban planning, biodiversity, urban landmarks, biosphere, human-plant relationships

Redwoods into Europe

Metasequoia glyptostroboides (dawn redwood), *Sequoia sempervirens* (coast redwood) and *Sequoiadendron giganteum* (giant sequoia) are three exotic species that, although they do not originate in Europe, have had resounding success in entering into the biosphere of their adopted habitat.

Starting with early experimentation in controlled places, such as the island of Mainau, redwood species were integrated into the city planning of numerous locations across Europe. This paper will examine how they have become integral parts of their adopted cities and how they - as well as other plant species - have become an essential part of urban planning in modern European cities.

Mainau facts



Metasequoia on Mainau



The title of this slide can take up two lines

Landmarks of Zurich

Redwood Trees and Mass Media

Personal Identification with Redwood Giants

Redwoods as Landmarks

Baumkataster, Zurich



Case Study Three: Tunnelstrasse

Death of Redwood Trees

In addition, when major events occur, for example the felling of a major tree due to disease, the public is

included in the news: announcements are placed on the internet homepage and the news appear in newspapers and television interviews. Not only is the action explained, but the reason for the action and the aftermath: what will happen with the site after, for example, the felling of the tree. This opaqueness is a key part of its handling of the human-plant relationships.

Case Study 1: Rieter Park, Zurich



Case Study Two: Rämistrasse



Case Study Three: Tunnelstrasse

Conclusion

Through the case study of the redwoods of Zurich, we can see an example of how a city can plan and accommodate both humans and plants, how trees become integral parts of the cityscape and of the mentality of its citizens, and how exotic trees can be accepted as citizens in places far away from their origins.

Towering above all the other tree species, the redwoods of the European cities have become key landmarks and true representatives of the close ties between humans and plants within urban spaces.

植物で砂嵐をコントロールすることは人類最良の選択

Using Plants to Control Sandstorm is the Best Choice for Mankind

馬 玉明 (内モンゴル農業大学 教授)

MA Yuming (Professor, Inner Mongolia Agricultural University)

潘 山海 (大阪市立大学 特任准教授)

PAN Shanhai (Adjunct Asso. Professor, Osaka City University)

中国において、砂嵐は近年のホットな話題である。砂嵐は、強い風で地面にある大量の砂塵物質を空中に吹き起こし、空気を悪化させ、人間の生活や生産に深刻な損害を与える。砂嵐は乾燥地区や砂漠に遠く多くの都市住民の生活と建設にも深刻な障害を及ぼしている。砂嵐の発生背景はますます深刻化する砂漠化である。それゆえ、砂嵐の制御が砂漠化をコントロールでき、都市を救うことができる。これは人類が直面している重要な課題の一つである。我々の研究によれば、砂嵐を制御するのに肝心なことは、大風が含塵物質の多い地面に接触し作用するのを防ぐことである。大風が砂嵐を発生させる原動力であるため、これを地面に接触させない限り、砂嵐は発生しないからである。これは、地面に植物が多ければ多いほど大風の発生率も低くなることが分かった。さらに、砂嵐とその起因である砂漠を制御するための現在の世界的な対策は三つのカテゴリー（化学制御、エンジニアリング制御と植物による制御）に分類されているが、比較研究を通して、植物による制御が一番長持ちであり、経済的で有効的であると判明した。

キーワード：植物利用、砂嵐・砂漠、制御、最良選択

砂漠文化は世界の主要なもののひとつである

文化は非常に重要な人間現象である。人が活動する分野がある限り、対応する文化も存在する。文化は人間社会の発展と進歩の重要な内容と精神的な原動力である。世界各地の学者によれば文化は160種類以上の定義があり、1000を超える程の文化現象があるといわれる。しかし、このカラフルで奇妙な多くの文化の中には、砂漠の文化がないのは不可能であろう！

砂の化学成分は主にシリカ(二酸化ケイ素)であり、その含有量は地球の地殻の重量の12.6%を占めている。天然のケイ酸塩鉱物も自然界に非常に広範に存在し、既知の鉱物種類の約1/3を占め、重量に換算すればケイ酸塩類物質は地球の地殻の総重量の約75%を占めることになる。これに、シリカの占める重量を加えれば、ケイ素(シリコン)類物質が地球の地殻の87%以上を占めることになる。こう見

れば、私たち人間は砂とシリコンの世界に住んでいるといえるし、人間の文化も砂に緊密な関係を持つ砂漠文化にかかわっている。

地球の5つの大陸のすべてに砂がある。ヨーロッパの表層植生は良好であるが、植生の下には砂もある。また、アフリカの砂嵐は、ほこりと雪片をピンク色に混ぜて、コスモポリタンな都市にロマンと驚きを絶えずもたらしている。

過去20年間で、世界の砂漠化した土地が拡大し続けている。国連環境計画の統計によると、世界で約110の国、12億人以上の人口が砂の被害や危険に直面している。これらに砂嵐の訪れと影響を受けている地域と人口を加えると、世界人口の半分(40億人以上)の人々が砂=シリコンの世界に住んでいることとなる。これほど多くの人々が砂の世界に住んでいる以上、これに対応する重厚な砂漠文化があるのも当然のことであろう。それにこの文化は、世界のさまざまな地域や国をカバーし、世界中のさまざまな民族や文化を包摂していることから、砂漠文化は世界の主流文化の一つといえよう。砂漠文化とは、砂漠の自然環境またはその影響の中で形成された人々の思考方式、行動様式とこれらの成果の総和と定義する。

本論文は、馬玉明氏と呂榮氏による「敢えて庫布其(砂漠)に問う」というドキュメンタリ作品から砂漠文化の内容と特徴を探るものである。「敢えて庫布其に問う」という著作はマルチテーマの作品で、多方面から砂漠とその特徴を描写している。例えば、砂漠は地球上で最も美しい地形であり、砂漠は資源の宝庫であり、砂漠は制御可能なものであり、砂漠は人間の未来の生活空間である、など。以下は砂漠文化の内容と特徴を探る。



成功した砂制御モデルと最新の砂制御技術は砂漠文化の代表的特徴

砂漠文化の成果は、時代の最前線と世界の砂漠文化の高みに立ち、

中国スタイルを保ちながら、時代の要請と歴史的発展を反映したものである。「敢えて庫布其に問う」という著作の文化的成果の一つは、庫布其砂漠をガバナンスする上での成功した砂の制御モデルと最新の砂の制御技術を要約したことにある。これは、グローバルな砂制御事業のために新鮮な、アクセスしやすい内容と砂漠文化の事例を提供している。例えば、庫布其砂漠のガバナンス実践で成功した砂制御方法として、「植生を封じて育成のために放牧活動を移転することで、世界難題を解決」、「飛行機による空中播種で、迅速な砂漠制御を実現」、「エンゲベエの生態学モデルがグローバルな関心を引く」、「風水梁技術が風水を変えて、特色のある養殖業を発展」、「林業が典型的なデモンストラーションの成果を及ぼす」、「企業が主戦力になるのは、砂漠制御の究極の道」などがあげられる。これらの砂制御モデルと砂制御技術は、今日の世界的な砂漠ガバナンス領域の黄金律であり、内蒙古オールドスの人々が砂漠の世界を再構築する努力活動の文化的な成果の集約でもある。砂漠文化の代表的な特徴である。



砂と中国人を結びつけて、両者間の驚くべき文化的共通性を比べて見ると砂漠は”人間性”文化の特徴を持つ

古代の人々は、中国人は散った砂のようなものだとしばしば言っていた。そして今、世界の人々もまた、中国人は散らばっている砂のようなものだと言っている。実際、これらの言い方は皆正しい。中国人は、人口数量から見ても数が多すぎてあちこちに散布しているし、中国人の性格や気質、趣味や嗜好、行動様式や思考方式や彼らの理想と目標などから見ても、散らばっている砂とほとんど同じである。

二者の間の素晴らしい類似点を見てみよう。中国の14億人を含める地球上の70億人の人々は、約240万年前から起源と進化を遂げてきたが、これは砂にも当てはまる。砂は、高温高圧を経ても温度と圧力の足りなさで岩石となつてはいないルースな物質の集約であり、何度もの高温高圧の困難な時代を過ごしてきた。人類も同じである。240万年前の時から地球の表面に住んでいた人々から計算すると、20年ごとに一代として、今の私たちは12万世代を経ているだろう。考えてみよう。12万世代の遺伝子伝承が、240万年を経ても、その遺伝子の連鎖が断つことなく続いている。その過程でどれほど多くの自然災害や人為的災害を経験してきただろう。理論的には、今生きている遺伝子はみな優れていて、幸運な寵児であり、壮大でカラ

フルな砂と同じである。

中国人は、「類は友を呼ぶ」とよくいう。しかし、古代の人も今の人もいい忘れたのは、散らばっている砂は一つの「状態」、「レジャー」や「生活様式」ということである。ところが、この状態にある砂は、いったん外部の干渉がはいると、すぐに一つになり、誠実に団結し、苦しみと恐怖を恐れず、勇気と犠牲を持って、世の人々に、その強くて壮大な、広大無限かつ無敵の一面を示す。砂は本当に中国人のような文化的特徴を持つ。



砂漠文化は儒教文化の完璧な解釈

儒教文化は、世に溶け合うための思想で、実用主義者の哲学である。儒教は人々に“滑らかで洗練されたように”になる方法を教える。砂粒の真円度は砂利の鋭さと鈍さの程度を指し、砂の物質形態においての儒教の重要な特徴である。砂丘は、砂漠の世界のニーズを満たすために、適切な時期に、独自のエッジや角、不規則な縁をできるだけ滑らかにし、洗練された形で砂漠の世界舞台に優雅に立ち入る。それにもかかわらず、砂粒はその”遺伝的特性”が依然としてざらつきの特徴を決定づけている。砂粒物質を組成する鉱物の種類が割と多く、石英砂の硬度は7で、ダイヤモンド(硬度10)の次の硬さをもつ物質として、風がいくら大きくても、ぶつかり合いがいくら強くても、石英砂粒はなかなか壊れないものであるから、地球上に大量で独特の石英砂粒が生まれている。

砂丘になることのできる砂は、すべてがベテランであり、何百年もの以上にわたって大風や大波の中で戦って来たものである。彼らは砂丘形成に成功してキャリアを持っているにもかかわらず、英雄の本姓を変えられず、いまだ角度の形を維持している。

広範で深遠な中国文化は、儒教文化をバックボーンとし、自然と人類を組み合わせた結果であり、巨大な宝物でもある。そうであるならば、天と砂の組み合わせによる砂漠文化もまれで素晴らしいものである。砂は砂漠文化と天砂結合文化の物質的基礎であれば、風は砂の魂と精髓であり、砂の文化である。風の「中庸」と「仁愛」があるからこそ、砂に緩やかで怠惰な天才を慣性から目を覚まさせ、砂の良心と責任を意識させ、人間性を昇華させ、人格を完成させ、倫理的、民主的、科学的な文化特性を理解させ、兄弟姉妹間の結束と調和をさせ、最高の道徳的領域への追求と理想的な価値創造を悟らせたのである。この点において、砂や砂漠は儒教文化の特徴を持つ。

水墨画と自然:

新たな絵画の考え方とパフォーマンス

Ink Painting and Nature: A new painting thinking and performance

李庚 (京都造形芸術大学 教授)

Li Geng (Professor, Kyoto University of Art and Design)

世界はめまぐるしく変化し、現代美術においても、美的判断の栽培に基づいて並べ替えて理論的には新しい方法、過去を再構築し、新しいアート作品を作成する必要がある。抽象的な概念を使用することによって、私たちが自然の魂との対話を開くことに役立つだけでなく、より敏感な内部理解な宇宙を引き出す新たな分野へ私たちをリードしてくれる。直感的な、主観的な感情から私たちの靈感の継続的なインスピレーションを生み出すことが重要であり、芸術的創造性を生み出す感情がアーティストの原動力で、自然への洞察力はその根幹のものである。思考の中に有形・無形のインタラクティブな画像を介して動作と直感が生成される。私は、マーラーの楽曲から多くのものを得たが、マーラー自身も李白など中国の漢詩に大きな影響を受けた。

キーワード: 自然の魂、芸術的創造性、インタラクティブ、マーラー、李白

1950年に北京で生まれ、6歳で李苦禅から水墨画を学び、1959年雑誌「人民中国」(英文版)の表紙に「女起解」を発表。1960年水墨と色彩を混合した抽象画により、中国青年画コンクールや世界青年友好芸術祭で入選した。この頃から「老子」や「史記」の研究を始めるが、1966年から1978年までは文化大革命により蒙古で遊牧生活を体験することを強いられた。この経験が後の画風に大きな影響を与えたかもしれない。

1980年に来日し、上村淳之教授に師事し、1985年には京都市立

芸術大学大学院に入学した。この間、阪急百貨店や高島屋など大阪や全国の百貨店で展覧会を開催しながら、西ドイツ・ミュンスター専門大学に客員教授として招聘される。

方法論としては、写意重彩(1958)、文人画主義(1972)、撥墨主義(1974)、宋詞を描く(1983)、心境山水(1984)、元曲入画論(1984)、写意画復興(1985)、新古典主義(1988)、淡墨山水(1992)など水墨画の方法に関する提唱を行ってきたが、1990年の展覧会「心を写し、意を描く」は、それまでの方法論を総合するものであった。

このなかで、「撥墨主義」とは、画面に墨をそそいで一気に着衣の人物像や山・石・樹木などの形を描くと同時に、その濃淡で立体感を表すものであるのに対し、「淡墨主義」とは、淡墨で描いた上に、さらに濃墨で手を入れて立体感や全体の趣などを表すものである。

1997年には、日中国交正常化25周年記念の水墨画展「東と西の絆」で、グスタフ・マーラーの交響曲「大地の歌」で歌われた唐詩の世界を水墨画により解釈した。

マーラーの交響曲「大地の歌」は李白、王維、孟浩然、錢起に作曲のヒントを得て作られたものであり、絵画の新たな境地を切り開こうと試みた。マーラーの音のリズムと李庚の筆のリズムとが同期し、抽象的な水墨画が完成したのである。

その後、1997年の夏頃からは、氷上町立植野記念美術館からの依頼により、兵庫県氷上町を頻りに訪れた。加古川の風景を水墨で描いたが、それは主として加古川の下流の風景であった。

メタセコイア・山桜ギター

Metasequoia/Wild cherry tree Guitar

武田 雅史 (株)ドルフィンギタース社長)

Masashi TAKEDA (President, Dolphin Guitars)

ギターに使用される木材の使用規制が世界的に一層厳しくなり(特にローズウッド系)、さらに規制される木材が増えるなか、今後新たにギター製作に適している木材を見つけ出すことは容易ではない。今回の「メタセコイア」は、ギター製作に採用している製作者はいるものの、まだまだ未知の木材であった。しかしながら、今回完成したギ

ターを確認すると、独特の木目、粘りと低音域の再現性を持ち、本格的に採用されるのもそう遠くないと確信した。今回は、トップ材(表甲)のみに採用しましたが、サイド&バック(側板)への採用も期待出来る材であろう。経年変化も楽しみな材でもある。

塩崎 雅亮 (エム・シオザキ弦楽器工房 工房長)

Masaaki SHIOZAKI (Director, M Shiozaki String Company)

今回のギターで初めて使用したメタセコイアと山桜は、何の問題もなく活用できた。メタセコイアは、振動を吸収するのが少ない材で、

倍音を入れるのに支障がなく、ギターの表板として狙った音が作りやすい材料である。今後、メタセコイアは積極的に使用したい材料であり、山桜と共に国産材を使用したギター製作の可能性を十分に広げるであろう。

杉田 健司 (スギ・クラフト代表)

Kenji SUGITA (Director, Sugi Craft Co.)

木材をギタートップ材として製作する際、考慮すべき点のひとつは板厚といえる。一見大差ない様に思える板厚の決定過程は製作家によって異なる。今回使用したメタセコイアの板厚を決めるにあたり、過去にスプルース等において良好な結果を得たギターの製作時に測定した剛性データを参考にしている(剛性の高い物は板厚が薄くなり、低い物は厚くなる)。

測定方法は独自に決めた型枠にはめたトップ材に、ある一定の加重をかけた際の“たわみ量”による。求める“たわみ量”まで慎重に板厚を落とす。その結果、メタセコイアは1.2~1.3倍の厚みになり、通常使う材より剛性は低いといえる。これは良い悪いという話ではない。私自身は剛性の高い物を薄くして使う傾向にあるが、より低い剛性の

物を使って良い結果を得ている製作家も居る。

次に内側のカ木(響棒、プレーシング)はトップ材と同じ物を使うのが通例と思われるが、今回は違う材を使った。剛性を考慮すると、より大きなカ木にする必要があることと、木目が粗いため、細いカ木は均一な剛性を保てないと考えた。カ木を施し完成したトップを先述の測定装置により計測すると、スプルーストップと同等の数値が得られた。比重について、ギタートップ材としては非常に軽い。サイド・バックに使用した山桜もギター材としては軽い。このため立ち上がり早い軽快なサウンドとなる。これはひとつの特色として十分な価値のあるものといえる。楽器として見た目の審美性については、賛否別れる所でもあるかも知れない。塗装において着色、仕上げ方法等の工夫といった点が考えられる。

佐野 博士 (株)寺田楽器・工場長) Hiroshi SAN0 (Head of Factory,

Terada Musical Instrument Co.)

通常ギターのトップ材は樹齢数百年の物を使用するが、今回製作されたギターのトップ材のメタセコイアは樹齢六十年ほど。木目の目幅は広く成長が非常に速いと思われる。目幅が広いがギターに必要な強度は充分にあり、また、比重も非常に軽い為、特有の音色が得られる。木材の乾燥も通常は数年かけて行すが、今回は製作期間の都合上数か

月ではあったが、十分な乾燥が得られ、この点においても非常に早く加工することができ、メリットを感じた。今後製作されたギターの経年変化なども注目し、国産のメタセコイアを使用した楽器の普及に期待したい。

キーワード: 国産材、プレーシング、倍音、乾燥、教育と楽器

奈良県産優良スギ材を用いたバイオリン開発プロジェクト

Developing a Violin of Cedar Planted in Nara Prefecture

有山 麻衣子 (奈良県森林技術センター 主任研究員)

Maiko ARIYAMA (Chief Researcher, Nara Forest Research Center)

密植・多間伐・長伐期という細やかな施業体系で育林された奈良県産スギ材は、緻密な年輪構造を有して、強く、美しいという優れた特徴をもつ。奈良県では、この特徴を活かす新たな用途として、楽器利用に着目し、県産スギ材の音響特性等を調べるとともに、バイオリンを開発した。開発にあたっては、バイオリン製作家、バイオリニスト、木材の振動特性の専門家らの意見を元にプロジェクトを進めた。バイオリン製作に先駆けて、スギ材の接着性能試験や振動特性等の各種試

験を実施した。接着性能試験の結果から、スギ材と、通常、バイオリンに用いられる材の性能は同程度であるということが判明した。また、振動特性の結果からは、県産スギ材の中には、通常バイオリンに用いられる材の性能と同程度を示すものがあるということが明らかになった。

キーワード：奈良県、吉野スギ、県産材の利用拡大、バイオリン

いま世界中で話題のクラフトビール

Craft beer which is becoming a hot topic now

谷 和 (クラフトビールベース社長)

Ai Tani (President, Craft Beer Base)

伝統的に醸されるスタイルのビールを現代の技術力と分析能力を以って進化したスタイルが生まれ、情報化の波に乗り世界規模で展開をされている。都心部での物と情報の飽和と回帰的健康嗜好・上質嗜好が合い、ワイン同様の「テロワール」の表現や、ホップ・モルトなど原材料の品種改良は業界内ではトレンドとなっている。さて、ビールを題材として皆様にお伝えできることはビールの持つ社会性です。ビールとは現在、世界的にも「地域性」を表現するツールとなっている。そこにはモルト・ホップの産地間の特性の違い、味覚への嗜好レンジの地域性、水や環境の景観、歴史的踏襲国の景観など、様々なものがある。

また、別の面から分析するともとの文化性としてその地域の方々の社交場であったり、身近なコミュニケーションの場であったりと、酒場としてなくてはならない存在である。「ビールの醸造所ができる場所は活気が出て、町が栄える」といわれる。その醸造所が地域性に富み、町を代表するようなビールを作るとなると、これほどうれ

しいことはない。これにより町が栄える。「大阪府民」を代表する醸造所として、北摂にある「箕面ビール」がある。地域に愛され、地域の食材をビールに使うなど工夫もしつつ、消費の場を地域優先と考えている。そのことが消費者の理解も経て「大阪から日本を代表し、世界の舞台で金賞を受賞する」世界でも有数の醸造所となり、地元からも愛される企業へと成長している。難しいものではなく、自然とつながるコミュニケーションの中に溶け込んだ、ごくごく当たり前のつながり。ただ、ともすればこの現代の中では見落としがちになってしまふものなのかもしれない。私たちはこの関係を素直に楽しむ環境にいてこそこれからも続いていく関係性を保っていききたいものである。

キーワード：ホップ、モルト、品種改良、社会性、地域性

京都与謝野のホップ栽培

Cultivating Hop at Yosano in Kyoto

藤原ヒロユキ (日本ビアジャーナリスト協会代表)

Hiroyuki FUJIWARA (Japan Beer Journalist Association)



ビールの原料

麦

- ・主に発芽された大麦。
- ・小麦、ライ麦、オーツ麦も使われることがある。
- ・発芽させないものを使うこともある。

ホップ

- ・アサ科のツル性多年草植物 和名は西洋唐花草
- ・松かさのような形をした種花をつける
- ・この種花の中に苦み成分の薬となるルプリンがある

酵母

- ・菌類の一種。糖分をアルコールと二酸化炭素と副産物に転化する
- ・ビールの発酵に利用されるのは、主にサッカロマイセス(サッカロミセス)属
- ・サッカロマイセス属の中にも様々な種がある

水

- ・硬水と軟水に分けられる
- ・醸化、スパイジングなどの時に使われる



- ・アサ科のツル性多年草植物
- ・和名は西洋唐花草
- ・松かさのような形をした種花をつける
- ・この種花の中に苦み成分の薬となるルプリンがある
- ・ビール醸造に使われるのは雌株の種花のみ
- ・収穫後、腐敗を防ぐために乾燥させる
- ・乾燥後、工場ではホールホップやペレットに加工し、醸造所へ運ぶのが一般的



なぜホップは、ビールに使用されるのか？

5つの理由

1. 高い殺菌効果
2. さわやかな苦味
3. 香りの良さ
4. 清澄効果
5. 泡立ちを良くする



京都・与謝野町でのホップ栽培の取り組み



メタセコイア&山桜ギター

Metasequoia/Wild cherry tree Guitar

企画・立案：岡野 浩（大阪市立大学）

提供・調整：武田雅史（ドルフィンギタース）

製作者：塩崎雅亮（エム・シオザキ弦楽器工房、工房長）

杉田健司（スギクラフト社長）

佐野博士（寺田楽器工場長）

木材提供：三浦太門（郡上八幡自然園・メタセコイア）

豊下正良（豊下製鉛・山桜の提供）

製作本数：8本（表板がメタセコイア、側板と裏板が山桜）

塩崎雅亮 ナイロン弦およびスチール弦

杉田健司 ナイロン弦およびスチール弦

寺田楽器（佐野博士）ナイロン弦およびスチール弦（VG-00 MS-YZ）

ドルフィンギタース（SWITCH Custom Guitars）ナイロン弦（Giulietta 305

MS-YZ）2本およびスチール弦（SCOM-2H MS-WC）



武田雅史 1998年 ドルフィンギタース 設立（大阪・江坂）2010年 東京恵比寿出店 国内有名メーカー、特に国内外の製作者の取り扱いがトップクラス。

塩崎雅亮 1956年6月1日 愛媛県西条(旧東予)市壬生川(にゅうがわ)生まれ 1978年 大阪電気通信大学 中退 1982年 愛媛県西条(旧東予)市周布(しゅう)にてシーガル弦楽器工房を創立 1996年 工房を現住所へ移転 2013年 エム・シオザキ弦楽器工房へ社名変更
杉田健司 1965年生。1984年より茶位幸信（茶位ギター）の下でクラシックギター、バイオリンの製作に従事。独立、鉄弦の製作者に転向。クラシックギターの構造を独自の解釈でスチール弦ギターに取り入れ、オリジナリティ溢れるギターを製作する。

（株）寺田楽器 大正5年創業 昨年創業100年を迎えた、愛知県の老舗メーカー。国内外を問わずさまざまなブランドのギターを中心とした生産を請け負っている。

レセプション

Reception



レセプションでは、奈良のスギバイオリンと市大のシンボルツリーで昭和天皇所縁のメタセコイア・山桜ギターの合奏やホップを利かしたクラフトビールの試飲などを行いながら、「人と植物との共生」の一端を体験いただいた。わが国で有数のギター製造家である塩崎雅亮氏や林健司氏、佐野博士氏、そして武田雅史氏と岡野（都市研究プラザ）とのコラボレーションも好評を得た。

ギター: **古川忠義** (テディーズギター主宰) Guitar: **Tadayoshi Furukawa**, (President, Teddies guitar)

1975年15歳でデビューリサイタル 京都市堀川高校音楽部コントラバス専攻を経て京都市立芸術大学音楽部へ

1980年日本演奏家連盟新人選考会で優勝 アメリカ、テネシー州科学万博で7日間10回のコンサートに参加

1989年デビューシングル「我が家のかくや姫」をリリース (日本クラウン) 1997年ニューヨーク、カーネギーホールに於いて「ザ・ヤングピープルズコンサート」に出演 日中友好25周年、上海音楽院創立70周年記念祝賀招待演奏会にゲスト出演

2005年アルバム「ソロデベンチャーズ」をリリース

2006年「ソロデベンチャーズ」教則本発売 (現代ギター社)

2009年25年ぶりの古川昌義とのデュエットアルバム「シエスタ」をリリース

・バイオリン 澤井 杏 Violin : Anzu Sawai
大阪府立夕陽丘高校音楽科 卒業 三木茂 (大阪市大) と引田茂教諭との二人三脚⇒Nature 誌ほか 現在は京都市立芸術大学1年生に在籍。6歳よりバイオリンを始める。第7回クオリア音楽コンクール 高校生部門 第3位。第3回 津山音楽コンクール 弦楽部門 第2位。NAGANO 国際音楽祭 2016 に参加。これまで豊嶋泰嗣、森田玲子、木村直子、の各氏に師事。

筆者紹介

江見 裕子 大船(株)元取締役 喫茶料理「ビーハイブ」創業者重松為次郎の三女

小南 鉄雄 元大阪府立農芸高校教諭

小山 弘道 鶴殿ヨシ原研究所 元大阪市立大学理学部附属植物園

杉村 浩司 大阪電気通信大学高校教諭 元大阪市立昭和中学教諭

田中 晴美 (株)三木楽器・歴史保存室

田丸 八郎 NPO法人信太の森FANクラブ代表

中西 顕子 珈琲専門店チ・ケ 店主(二代目) ピアニスト(中西アキ)

濱崎 憲子 ティールーム&アートギャラリー・エムズ代表

本田 浩二 本田歯科 院長

松浦 一郎 明洋軒 美章園本店 店主

吉村 弘 吉村歯科 元院長

D.W.Larson カナダ・グエルフ大学名誉教授(植物学・古生物学)

Hans Thomsen チューリッヒ大学教授(日本美術)

Ma Yuming 内モンゴル農業大学教授(植物学)

Pan Shanhai 大阪市立大学都市研究プラザ特任准教授(経営学)

Li Geng 京都造形芸術大学教授(美学・水墨画)

武田雅史 ドルフィンギターズ社長

塩崎雅亮 エム・シオザキ弦楽器工房長

杉田健司 スギ・クラフト代表

佐野博士 (株)寺田楽器・工場長

有山麻衣子 奈良県森林技術センター 主任研究員

谷 和 クラフトピアベース社長

藤原ヒロユキ 日本ビアジャーナリスト協会代表

岡野 浩 大阪市立大学都市研究プラザ教授・経営学研究科(商学部)併任教授

大阪市立大学都市研究プラザ・レポートシリーズ No. 43

都市生態と文化創造：阿倍野から広域的ネットワークを構築する

Urban Ecology and Cultural Creativity: Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka

URP Report Series No.43 (May 2018)

Published by Urban Research Plaza (URP), Osaka City University

3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka 558-8585 JAPAN

発行日：2018年5月15日

編集：岡野 浩 edited by Hiroshi OKANO

発行：大阪市立大学 都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL: (+81) (0)6-6605-2207

FAX: (+81) (0)6-6605-2069



URP 
Osaka City University

大阪市立大学 都市研究プラザ
Urban Research Plaza, Osaka City University